

序章 はじめに

2025年、この年が太平洋戦争終結から80年の節目となることは皆さまもご存じでしょう。毎年、夏には先の大戦に関する報道がされ、後世を生きる我々にあの戦いが何だったかということを繰り返し問いかけます。

ですが、そこで取り上げられるのは空襲・特攻などが中心であり、現在の人々の太平洋戦争のイメージは大きく固定化されてしまっているのではないのかと私は考えます。

本書で取り扱う「山口県周南市」という地域と太平洋戦争で思いつくことを皆さまに問いかけてみましょう。ある方は光嵐部隊分遣隊が駐屯し、人間魚雷「回天」の出撃地となった大津島をお答えになるでしょう。また、別のある方は第三海軍燃料廠（徳山海軍燃料廠）やそれに関する油槽所・防空施設、徳山空襲などを挙げられる方もいらっしゃるでしょう。

ところで、皆さんは周南市櫛浜地区の一角である二葉屋開作（現周南市徳山モーターボート競走場）にかつて日本陸軍の船舶部隊の基地が存在していたことをご存じですか？おそらく「知らなかった」・「名前だけは聞いたことがある」という方が大半でしょう。

私は決して、空襲をはじめとする戦災で亡くなられた方や特攻作戦で殉職された方々の死を軽んじるわけではありません。しかしながら、太平洋戦争が特攻と空襲だけで始まり、終わった戦争ではないということを知っていただきたいのです。

戦争は敵と直接戦う戦車・戦艦・戦闘機、そして銃を持った兵士だけで行うわけではありません。彼らの影には、最前線の仲間を支えるため、「縁の下の力持ち」として任務を全うした方たちがたくさんいます。

そして、その「縁の下の力持ち」のひとつが周南市櫛ヶ浜という場所にあり、この地でも先の大戦を戦い抜いた方々が確かに存在していたということ。これを本書でお伝えしていくつもりです。

櫛浜という土地が陸軍船舶部隊の一大拠点であったことや日本の重要な局面に間接的ながらも関わっているということ、ここに駐屯した船舶部隊は何をしていたのか、彼らの実態はどのようなものだったのか。これらを皆さまに知っていただくことで、ある種の固定概念ともいえる従来の「山口県と太平洋戦争」のイメージに、新たな視点を加えることができると考えております。

今回が初めての書籍執筆ということと、まだまだ不勉強な部分が多くあることから、本書の内容だけでは櫛浜地区に存在していた陸軍船舶部隊を十分に解説できていないかもしれません。ですが、多くの方々のお力を頂いて、現時点で明らかになっている情報を、できる限り正確に、後世へ残すための資料として一冊の書に纏めました。稚拙な部分もあるかもしれませんが、ぜひ最後の1ページまでお付き合いいただければ幸いです。

2025年

福岡大学人文学部歴史学科 岡村真翔

目次

序章 はじめに P1

第一章 櫛浜町という土地と部隊の進出 P4～P6

第二章 櫛浜町に展開する陸軍船舶兵 P7～P14

～そもそも陸軍船舶部隊とは～・・・P7

●海上駆逐隊補充隊（通称號「暁16712」）・・・P8

●機動輸送隊補充隊（通称號「暁16711」）・・・P10

●櫛ヶ浜陸軍船舶部隊、フィリピンにて・・・P11

●備考 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊と朝鮮人について・・・P12

第三章 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊 櫛ヶ浜基地 P15～P40

●櫛ヶ浜基地の全貌・・・P15

●櫛ヶ浜における使用兵器・・・P21

●櫛ヶ浜で利用された各種舟艇・船舶・・・P24

●備考 艇の係留状況・・・P32

●櫛ヶ浜の基地とのゆかりのある部隊・・・P33

第四章 櫛ヶ浜基地の戦後 P41～P72

●櫛ヶ浜基地の最期・・・P41

- 櫛浜地区に残る戦争遺構・・・P45
- 笠戸島の陸軍船舶部隊と戦争遺構・・・P52
- 本浦地区に残る戦争遺構・・・P54
- 深浦・小深浦地区に残る戦争遺構・・・P57

第五章 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊と人々の記憶 P73～P75

- 人々の記録に残る櫛ヶ浜基地・・・P73
- 市民と櫛ヶ浜陸軍船舶部隊の記憶・・・P74

終章 さいごに P76

参考文献等・ご協力していただいた方の紹介 P77

表紙写真：深浦国民学校に駐屯した櫛ヶ浜船舶部隊の兵士たちの集合写真。『行李は語る』（土本2024）に掲載されたもの（元画像は『深浦小学校百十年誌』に掲載されたもの）。

第一章 櫛浜町という土地と部隊の進出

1938年。国家総動員法が始まった年であった。

この年になるまでに、日本と中華民国の間には満州事変を代表とする関東軍の暴走と工作（華北分離工作）・日本人襲撃事件に加え、第一次上海事変など、不安の種は十分なほど蓄積され、両国社会は相手国への敵愾心を十二分に醸成させている状況であった。

そして前年の1937年7月。この緊張は頂点まで達し、ついに盧溝橋事件（北支事変）という種火を契機に、日中戦争という大火となる。

話を1938年に戻そう。この年の8月17日、陸軍省がとある土地を買収した。その土地とは山口県周南市（旧徳山市）の櫛浜地区にある二葉屋開作地（現在の山口県周南市栗屋二葉屋開作1035-18周辺一帯）である。

旭町龍神社付近に設置されている櫛浜地区コミュニティ推進協議会の案内板などを元によると、この土地は温品暢造（屋号は二葉屋）が開始した太華山東側の干潟開作事業により、明治14年誕生したものである。明治7年には堀川運河も設置された（櫛浜コミュニティ推進協議会1990・櫛浜コミュニティ推進協議会広報部2006）。

その後、『行李は語る』（土本2024）の執筆協力者である廣中氏が山口地方法務局周南支局より提供を受けた旧土地台帳（現在の土地登記簿謄本にあたる）のうち、「下松市大字栗屋二葉屋開作二十九番一」で確認できる範囲では、元来ここは干拓事業を始めた温品暢造の所有するところであったが、明治12年には井上達己という人物に所有者が移る。明治18年には井上利宜という人物に所有権が移った。

それからしばらくたった大正6年、二葉屋開作地は工業団地を設置するという計画のもと、現下松市近辺にて工場整備事業を進めていた実業家である久原房之介によって購入され、その後、彼が設立した株式会社久原用地部の整備・所有するところとなる。

だが、社会情勢により肝心の工場誘致計画は頓挫してしまったため、久原用地部は昭和13年8月17日、土地を陸軍省に売却。かくしてこの土地は軍用地となったというわけだ。

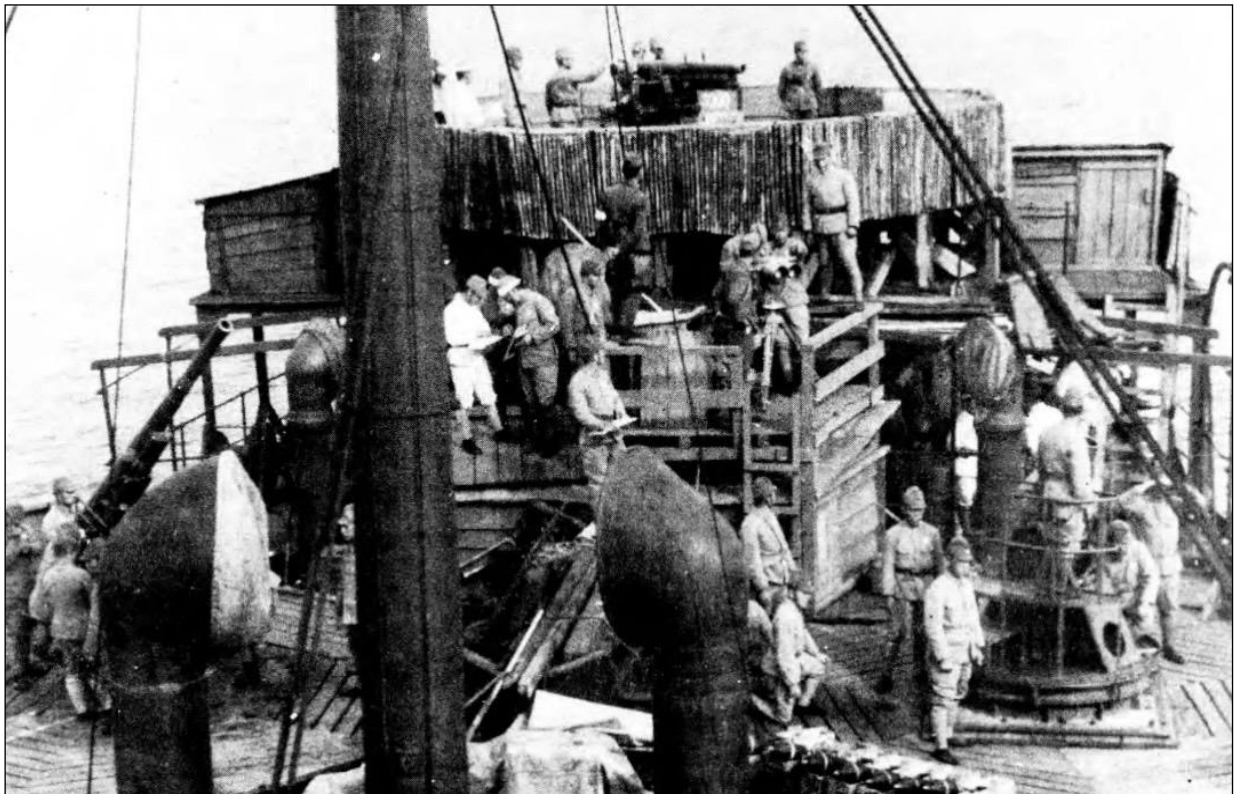
ところが軍用地になっても、すぐに軍事利用されたわけではなかった。実際、史料からこの地での陸軍の行動が確認できないことに加え、近隣に住んでいた秋本元之氏が陸軍の基地ができる以前の二葉屋開作地は田んぼや畑ばかりだったと回想している。

ただ陸軍に買われたが、泥沼化する中国戦線の現状打破にも、すさまじい勢いで日進月歩変動する南方戦線にも寄与できず、役目が来るその時まで放置されているだけであったのであろう。

そして1943年末、いよいよ眠っていたこの土地へ白羽の矢が立つ。ここへ陸軍船舶部隊の基地が設置されることが決定されたのである。完成した基地に駐屯したのは陸軍船舶部隊のうち、新設されたばかりの「海上駆逐隊補充隊」と「機動輸送隊補充隊」と呼ばれる部隊であった。

この書では櫛浜地区と駐屯した陸軍船舶部隊について、その実態を明らかにしていく。読み終わるころには読者の皆様も、語られることの少ない彼らの実態と郷土の歴史について、少しでも理解を深めていただければ幸いである。

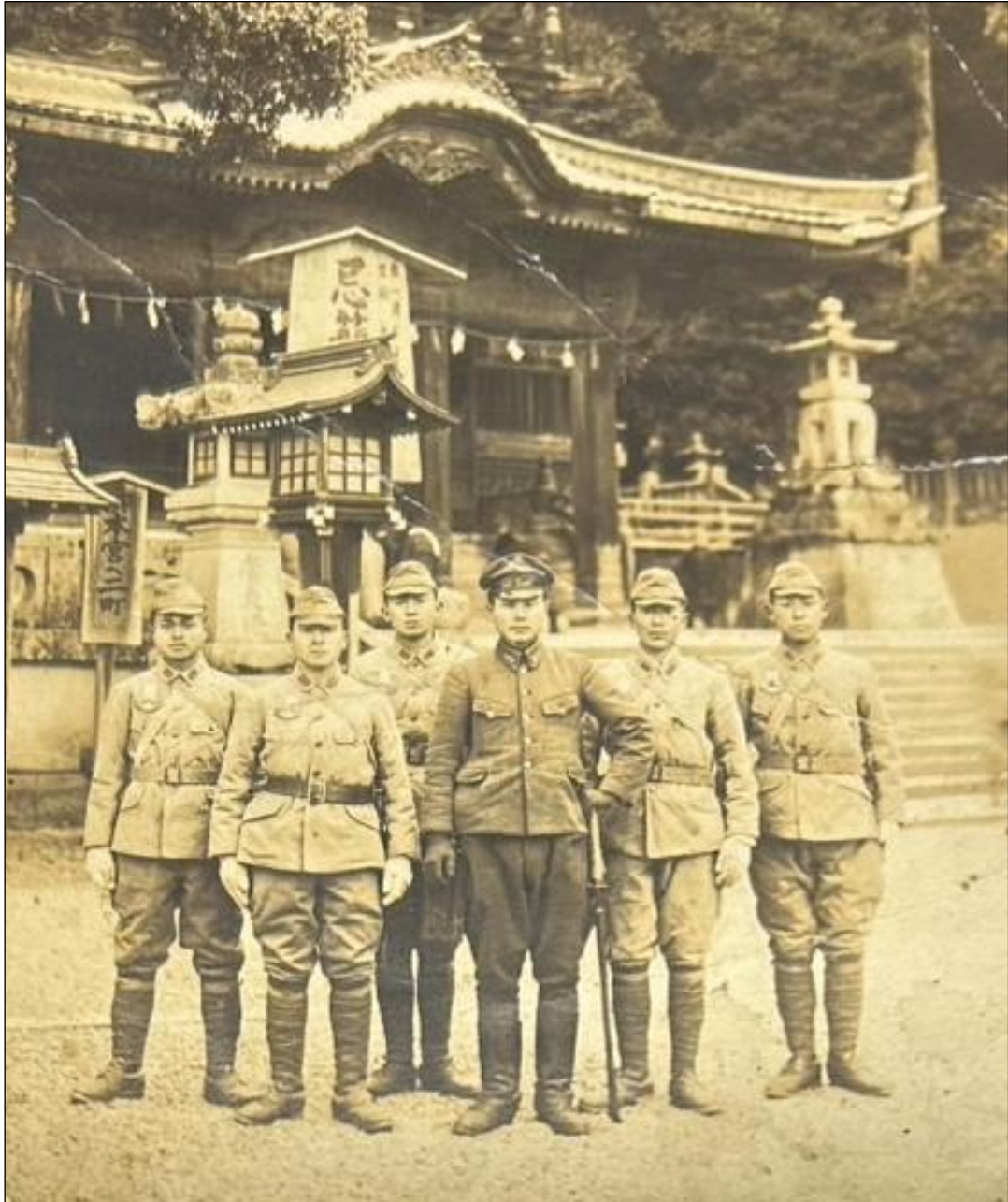
なお、本書では周南市櫛浜地区の栗屋二葉屋開作に駐屯した陸軍船舶部隊や彼らが駐屯した基地を「櫛ヶ浜陸軍船舶部隊」・「櫛ヶ浜船舶部隊」・「櫛ヶ浜基地」などと呼称する。これは山口県文書館の所蔵史料などに多く見られる「櫛ヶ浜曉部隊（曉部隊は陸軍船舶部隊を指す）」等の記述に則ったものであり、現在の周南市櫛ヶ浜に部隊が駐屯したわけではないことに注意していただきたい。



挿図 1 (上)・2 (下)：甲板で作業を行う日本陸軍船舶部隊の兵士たち（双方ともに撮影時期場所・撮影者不明。解説によると、写真は太平洋に位置する硫黄島で米軍に回収されたものとのこと）
上写真は九六式一五糎迫撃砲を操る兵士、下写真には甲板上に積み上げられた迫撃砲弾（九六式一五糎迫撃砲の砲弾）や望遠鏡・野砲（75 mm野砲と史料では言及）・高射砲（八八式七糎野戦高射砲）が

写る。輸送船における船舶砲兵を撮影したものであろう。

本写真は国立国会図書館デジタルコレクションにて公開されている米国戦略爆撃調査団文書の一部『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』に掲載された写真である。



挿図 3：日本陸軍船舶兵の写真（船舶特別幹部候補生隊のもの）

船舶兵（幹部候補生隊）の集合写真。香川県小豆島にて撮影されたものであると思われる。昭和 20 年ごとに撮影されたものと推定。胸には船舶兵の証である陸軍船舶胸章が付いている。

写真は麻生敏治氏より提供。

第二章 櫛浜町に展開する陸軍船舶兵

～そもそも陸軍船舶部隊とは～

日本陸軍船舶部隊の概要に関しては『陸軍船舶戦争』（松原・遠藤 1996）が詳しい。

そのため、本項では基本的には同書をかいつまんだ内容を説明させていただくが、ときより『陸軍船舶特別幹部候補生隊』（岡上 1978）・「日本軍の渡洋上陸作戦－水陸両用戦争の視点からの再評価－」（二宮 2016）に加え、筆者が史料を見てきた上で感じた船舶部隊の傾向などを織り交ぜてさせていただくということ、筆者の知識不足により間違いが混ざっている可能性が否めないということをおことわりさせていただく。

陸軍の船舶部隊の起源は明治にまでさかのぼる。1894年（明治27年）、朝鮮半島にて東学党の乱（1894年に朝鮮半島南部を中心に発生した農民反乱。「甲午農民戦争」のことを指す）が発生した。この際、兵士たちを朝鮮半島へ輸送するため、運輸通信部を宇品港（広島県）においたことが陸軍船舶部隊のはじまりとされる。

とはいえ実際のところ、これはあくまで臨時のものであり、本格的な船舶部隊の誕生はもう少し待たなければならない。日本軍は同年発生した日清戦争のため、陸軍運輸部を開設した。これが陸軍船舶部隊の礎となり、ここから日本陸軍による本格的な船舶運用が始まったと言えよう。

彼らはその後も日露戦争などの戦いで船舶輸送のノウハウを蓄積した。また、第一次世界大戦における上陸戦「ガリポリの戦い」から学んだ知識とこれまで経験をもとに、大正から昭和期にわたり、上陸作戦における戦術の洗練や兵器の研究・海運界との連携を深めた。

昭和期に入ると、ついに陸軍内で船舶を用いる専門部隊が結成。彼らは上陸作戦専門工兵として、1932年の第一次上海事変（満州事変による日本への反感を契機に発生した日中の軍事衝突）に参戦。日本陸軍初の正式な舟艇を用いた部隊として前線に出動し、上海で戦う海軍陸戦隊への救援部隊を無事に上陸させた。

この戦いで敵前上陸をはじめ様々な任務を成功させた彼らは、自身の有用性を証明するとともに、近代において鉄製舟艇を利用した世界初の上陸作戦を成功させたのである。

上陸戦は更に行われ、続いて1937年から始まった日中戦争でも船舶を用いた工兵隊は幾度もの上陸作戦を成功に導いた。

この時期の陸軍で船舶を運用する部隊は兵士を上陸させることを主軸に置いたものであった。だが、あくまで彼らは工兵（土木・建築技術で攻撃・防御を実施する部隊）あるいは輸卒（輸送を実施する部隊）等の枠に収まっており、独立した立ち位置を持っていなかった。

上陸を主目的に据える傾向は太平洋戦争開始に備えた1941年まで続く。ところが、太平洋戦争開戦後しばらくすると状況は変わった。東南アジアをはじめとする広大な戦域を手中に収めた大軍へ兵員・物資を送ることが、既存の輸送部隊と海軍輸送部隊たちだけでは限界となっていたからだ。

結果、1942年からは船舶部隊は兵站（物資の補給）の維持を重点的に担うように次第に変化し、主な任務が輸送や補給となる。また、そのときには船舶部隊の規模は非常に膨張していた。よって、これを機に同年、「船舶兵」という兵科が新しく誕生する。彼らはいかに工兵や輸卒（輜重兵）などではなく、「船舶兵」という独立した立ち位置をようやく得たのである。

通称「暁部隊」と呼ばれた彼らはそれまでの組織形態を組み換えるとともに、機能を拡充。自衛火器を扱う船舶砲兵、各基地や部隊と連絡を行う船舶通信兵や、物資の揚陸を行う陸上・水上・建築勤務中隊等、さまざまな役割を持った部隊の創設・兵士の育成が進んだ。これらの部隊・兵士は日本本

土だけでなく、日本軍の各戦線に駐屯してそれぞれの役割を果たした。

1943年ごろには、戦局の悪化・不足する人材の補充・船舶部隊の任務多様化で、現場で指揮を執るための初級下士官の需要が急速に高まったことにより、特別幹部候補生隊が結成される。

訓練は香川県小豆島にて行われ、教育を受けた隊員らは船舶部隊の中核を担う存在として、訓練を履修したのちに伍長として各部隊へと巣立っていった。

だが結局のところ、この翌年より戦局悪化がますます著しくなったというのは周知のことであろう。

これ以降の時期では、もはや上陸に関する部隊の編成はほとんど見られない。太平洋戦争が終局に向かうにつれ、船舶部隊の特性は兵站維持のための揚陸・輸送と特攻艇を用いる海上特攻の2つへ大きく偏ってしまうのであるが、これ以上は本題と離れてしまうため、船舶部隊そのものの概要説明はここまでとさせていただきます。

さて、時間の針を米軍の反抗が激となりだした1943年末へ戻させていただこう。この年の12月、戦局を持ち直すべく、広島県にて「陸軍海上駆逐隊補充隊」と「陸軍機動輸送隊補充隊」が誕生する。彼らこそが、本書の主題である「櫛ヶ浜基地」に駐屯した部隊であり、以降、解説していく部隊である。史料によってはこの両者を「櫛ヶ浜暁部隊」などと呼称し、まとめることもあるが、この項では別々に解説する。

さて、この海上駆逐隊補充隊と機動輸送隊補充隊というふたつの部隊が創設されたのは同じ日であり、臨時編成日は1943年12月1日（防衛研究所所蔵『船舶司令部編制人員表』の『教育船舶兵団』）、正式な編成日（編成完結日）は同年12月28日（防衛研究所所蔵『陸軍部隊編成資料 昭和20年8月15日現在』の『教育船舶兵団』・『元船舶部隊一覧表』・『陸軍船舶部隊略歴 その4』）となっている。史料によると両部隊は広島県の宇品で編成されたのち、山口県櫛浜町の栗屋へと移駐してきたようだ。とはいえ現段階では、なぜ櫛浜町が移駐先に選ばれたのか・どの時期に宇品から櫛浜町へ移駐したのか・櫛ヶ浜基地の着工・完成時期はいつなのか・基地は何者がどう建設したのかなどの不明点が多々見られる。

船舶部隊は大まかに「輸送」（船舶輸送を主にするもの）・「兵站」（船舶廠などで修理などを実施）・「戦闘」・「教育」（教育補充を担当）・「その他」（通信及び防衛など）の5つのタイプに分けられる（防衛研究所所蔵『第3章 船舶部隊の運用／第4節 船舶部隊の特性に基く運用』）。

その中でも、これらの部隊は「教育」を担当している部隊であった。ここからは櫛ヶ浜に移駐してきた両部隊について簡潔に紹介したい。

●海上駆逐隊補充隊（通称「暁16712」）

この部隊は、「海上駆逐隊」と呼ばれる部隊の要員を補充することを任務とした。初代補充隊長は森木明義大佐（1943年12月3日発令。防衛研究所所蔵『第217号 昭和18年12月5日 陸軍異動通報』）。

防衛研究所所蔵史料『陸軍船舶部隊の参考』によると、「海上駆逐隊」は海上駆逐艇（写真1）と呼ばれる武装艇を用いて、敵潜水艦を爆雷（水中で爆発する兵器）で攻撃し、軍事的に重要である海運地の出入り口や輸送船を防護することを主任務としていた。史料より確認できる部隊の人員は3406人（1943年12月1日）から3432人（1944年10月28日）と戦局の推移にも関わらず、微増したのみであった（防衛研究所所蔵『船舶司令部編制人員表』）。

1944年からは特別幹部候補生の受け入れも開始。特別幹部候補生らによって書かれた回顧録『紅の

血は燃えて』(「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989)によると、教育班は第1～6中隊まで存在していた。訓練は転属・召集により集まってきた一般兵士などで編成された隊(第1～5中隊)と、前述した特別幹部候補生からなる隊(第6中隊)に分けられていたそうである。後者は香川県小豆島にある「船舶特別幹部候補生隊」にて訓練を受けたのちに、この地に来て訓練を行った(参考A)。この第6中隊は、さらに6つのグループに細分化されて教育が施されていた。内訳は甲板1・2班(甲板作業や機器操作の教育と推定)、機関、重機(重機関銃運用の教育と推定)に加え、通信班が2つという具合である。

訓練ではそれぞれの専門分野の訓練に加え、歩兵として突撃や肉薄訓練・行軍訓練などを行った。もちろん、船乗りとして必要な手旗・モールス信号・舟艇を用いた航行や棧橋達着訓練なども実施していた。なお、転属がたびたび起こるため、本来の訓練内容は不明のままのことである。

同書には終戦直前に「櫛ヶ浜に残留となった一部の特別幹部候補生や一般兵は陣地構築のため、北九州へ移動した」・「櫛ヶ浜に残留した留守部隊の隊員数名が笠戸島(下松市)にて舟艇の隠蔽作業を実施していた」という旨の記録が残るが、これらの行動の詳細は不明である。

当時、舟艇の隠蔽は他の船舶部隊補充隊でも実施されていた。船舶工兵第九連隊補充隊(和歌山県和歌山市)では大発動艇・小発動艇と呼ばれる兵士や兵器を運搬する上陸用舟艇(「櫛ヶ浜で利用された各種舟艇・船舶」の項にて後述)が草木を被せて隠蔽され、船舶特別幹部候補生隊(香川県小豆島)では大発動艇を隠蔽するための壕が各地に作られたとの記録が残っている(NHK アーカイブ 2016・岡上 1978)。

そのため北九州での工事内容は不明であるが、笠戸島にて部隊が隠蔽した舟艇は上陸用舟艇ではないかと推定される(艇と笠戸島の壕の解説は後の項で実施)。

ここで訓練を終えた特別幹部候補生は特攻要員・船の艇長・指導要員などの任務へ取り掛かった。

なお、この部隊で教育を受けた兵士たちの本来の配属先である海上駆逐隊は、「海上駆逐第一大隊」というたった1つの大隊しか編成されていなかったことが史料より判明した(山口県文書館所蔵『部隊一覧表』・防衛研究所所蔵『船舶部隊略歴 その4』)。

ただし、この一文には補足をしておかなければならない。私がお世話になっている方に中国新聞客員編集委員の佐田尾信作という方がいる。佐田尾氏は『マルレを焼いた日』など太平洋戦争についての記事を執筆されており、豊富な知識を持っている記者の方である。そんな同氏が取材していた際、「海上駆逐第二大隊」という部隊へ配属された海上駆逐隊補充隊の隊員が居たことを発見した。当該兵士の軍歴には「警備第六号艇艇長」として「付近海面警備」に従事したという記録が残る。部隊の詳細は不明であるし、「海上駆逐第1大隊第2中隊」という部隊が『船舶部隊略歴 その4』で確認できるため、この部隊を誤って記録しただけかもしれないが、このことから別の海上駆逐大隊が存在していた可能性が浮上してきた。とはいえ、「海上駆逐隊」がごく少数のみ編成された部隊であるというのは揺るぎない事実であろう。

結局のところ、海上駆逐隊に入り損ねた隊員らの主な進路はふたつであった。海上挺進戦隊という水上特攻を行う部隊へ編入されるか、海上輸送大隊と呼ばれる部隊に編入され、輸送任務に従事するかのどちらかである。後者は大戦後半に編成され始めた部隊であり、民間からの機帆船を徴用して物資を運搬するのが役目であった。

1945年5月10日の徳山空襲では、櫛ヶ浜基地に駐屯していた本部隊が対空戦闘に参加した記録が見つかっている。訓練目的で宮庭に設置されていた高射機関砲や高射砲(飛行機を撃ち落とすための機関砲や大砲。舟艇への攻撃に使用されることもあった)などで米爆撃機へ攻撃したとみられる(防

衛研究所所蔵『船舶部隊略歴 その4』)。

史料より以上のことが判明したものの、肝心の部隊が編成された経緯や人員の変化の原因は見つけることはできなかった。

あくまでこれは推測であるが、この部隊は当初、太平洋戦争中期ごろより南方にて猛威を振るった米潜水艦へ対抗するために創設された海上駆逐隊の人員を補充するため、編成されたのだろう。しかし、戦争後期からは数多くの輸送船が撃沈され、乗組員が摩耗していく状況に対応するため、早急に輸送人員を確保しなければならなくなったこと・遅々として進まない艇の生産などの関係で海上駆逐隊の編成が困難になったことを要因に人員は増加せず、同補充隊で教育を受けた者は特攻任務を行う海上挺進戦隊(※3)や輸送を担う海上輸送大隊などの編成に利用されたのではと考える。

また、本部隊からは比島派遣隊という遠征部隊も編成されていた。彼らは1944年9月13日に門司港(福岡)を出発して、フィリピンで物資の揚陸や戦闘活動を行ったのち、1945年9月2日には連合国軍による武装解除を受けた。詳細は「櫛ヶ浜暁部隊、フィリピンにて」の項で説明する。

余談であるが、防衛研究所所蔵資料『暁部隊』には同部隊の所在は福山市(広島県)とされている。実際に部隊がこの土地にも所在していたのか、ただの記載ミスなのかは分からない。また史料によっては「海上駆逐補充隊」・「海駆」などと呼称する場合もある。

●機動輸送隊補充隊(通称「暁16711」)

後者の本部隊は、1943年末より編成が開始された「機動輸送中隊」という部隊の人員を補充するために編成された。初代補充隊長は山田正雄少佐(1943年12月3日発令。防衛研究所所蔵『第217号 昭和18年12月5日 陸軍異動通報』)。

この機動輸送隊中隊は前述した『陸軍船舶部隊の参考』によると、SS艇(機動艇)と呼ばれる輸送船を利用し、危険な前線周辺での輸送に従事する部隊である(SS艇は輸送船の一種。説明は後述)。

史料より確認できる部隊人員は1049人(1943年12月1日)から2691人(1944年10月28日)と、戦争後半になるにつれ大幅に増加している(防衛研究所所蔵『船舶司令部編制人員表』)。

1944年からは特別幹部候補生の受け入れも開始。先ほど使用した『紅の血は燃えて』を見てみると、この部隊は第1～6中隊までが存在していたようである。香川県の小豆島で訓練を受けてきた彼らは第4～6中隊に配属されたことが確認できたが、詳細は不明。

第5中隊に配属されたという特別幹部候補生によると、1つの中隊のなかには9つのグループ(区隊)が存在していたようだ。幹部候補生は「下士候」(下士官候補生と思われる)で構成された第1区隊～第4区隊ではなく、第5区隊から第9区隊に分けられた上で訓練していた。うち、第5・6区隊は甲板要員、第7・8区隊は機関要員、第9区隊が機関砲(船砲要員)の教育を受けることになっていたことも明らかとなった。

彼らは海上駆逐隊補充隊の兵士が行う陸上での訓練や手旗などの基本的な訓練に追加して、甲板要員がSB艇(SB艇は輸送船の一種。説明は後述)の受領と航海訓練を、機関要員が学科実習訓練を、船砲要員が学科および高射機関砲・高射砲(本文では「高角砲」と記載)を用いた実習訓練を行った。

同書には「防空壕作り」や「洞くつ作業」の文言も確認することができたため、訓練の合間に他の作業を行っていたことも判明した。おそらく、海上駆逐隊補充隊の兵士と作業内容は同じであろう。

彼らはここで船舶の基本を学んだのち、特攻を含む船舶兵としての任務へ取り掛かった。

配属先としては、軍用輸送船での物資輸送を任務とした機動輸送中隊を中心に、前述した海上輸送

大隊・海上挺進戦隊（マルレと呼ばれるモーターボートで攻撃を行う部隊。マルレについては後の項で解説）の特攻要員・基地の分隊長・潜水輸送隊機関要員・助教官になったことが確認できた（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989）。

また、史料では確認することはできなかったが、おそらく 1945 年 5 月 10 日の徳山空襲ではこの部隊も対空戦闘に参加していると予想される。同空襲後には、この部隊の隊員数十名が人命救助・死体収容作業に従事したという記録が残るほか、同年 8 月 7 日には、この部隊の隊員がトラック数台に乗り込み、原爆が投下された広島市へと救援に向かった（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989）。

ただ、こちらも部隊の編成理由を示す史料の発見には至らなかった。

とはいえ、日本陸軍がこれからの戦局を有利に進めていくには、島嶼戦において重要となる素早い揚陸能力が必要であると、幾度もの上陸戦やガダルカナル・アッツなどの敗北で学んだこと・限界寸前ながらもなんとかやりくりできていた輸送船舶が、戦争中期ごろから戦局悪化により不足し始めたことの 2 点が編成の契機となったのではないかと筆者は考える。

つまるところ、新たな上陸戦術を実現するため・連合軍への反抗計画実現のため・絶対的に不足する輸送力を少しでも改善させるため、この教育部隊を新設したのであろう。そして、戦争後半になるにつれて撃沈される船舶がさらに増加したため、これに伴って、部隊人員も大きく増加したのではないだろうか。

余談であるが、史料によっては「機動輸送補充隊」・「櫛ヶ浜輸送隊（これは機動輸送中隊などの他の船舶輸送部隊を指している可能性もある）」・「機輸」との呼称も存在する。

●櫛ヶ浜陸軍船舶部隊、フィリピンにて

1944 年 9 月 13 日。南方で勢力を増し、フィリピンへの上陸を企図する連合軍に立ち向かう日本軍の支援をするため、海上駆逐隊補充隊の人員をもとに結成された「比島派遣隊」が門司港（福岡県）を出発した。

『船舶部隊略歴 その 4』によると、彼らはフィリピン到着後、北サンフェルナンド（参考 B）やマニラにて揚陸作業を実施。のち、カヤバへ転進し、捷号作戦（フィリピン防衛作戦）に参加。並行して、同地の警備を実施した。1945 年 3 月からは一部人員が他の部隊に編入され、同年 6 月にはアンチポロへ転進。しかし、1945 年 9 月 2 日、終戦によりこの派遣隊は連合軍により武装解除された。

山口県文書館所蔵の『船舶特定部隊 行動概見表 留守業務局調製』では比島派遣隊とみられる部隊が言及されており、より詳しい記録が残されている。

これを大まかに要約すると、海上駆逐隊補充隊の隊員たちが小宇根隊（部隊名は原文ママ。詳細は不明）・特設水上勤務 145 中隊～151 中隊に編入され、フィリピンの戦いにおいて、輸送の補助・陣地構築・斬り込みなどを実施したと記載されている。物資輸送の際にもかなりの犠牲を強いられたようであり、空襲・魚雷艇や水陸両用戦車の攻撃・長距離砲撃を受け、機帆船を中心とする輸送用船舶が大量に海没していったことが読み取れる。

また、ここに記されていない機動輸送中隊なども「多号作戦」と呼ばれるフィリピンへの物資輸送作戦に参加し、南方方面に展開中である日本軍の命運を決する比島決戦を支援するため、危険な海域へと向かったことが防衛研究所所蔵史料『船舶部隊略歴 その 2』などに記されている。

●備考 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊と朝鮮人について

『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』（朝鮮人強制連行真相調査団 2001）には、太平洋戦争期に山口県内に駐屯していた部隊や企業の名称が記されている。本書は、戦時下における朝鮮人の動員実態について考察・研究をまとめた一冊である。

ところが該当書籍のなかで、海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊は朝鮮人の動員があったかどうか全く触れられていなかった。太平洋戦争を語る上で日本軍と朝鮮人の関係というのは度々議論になることが多いものの、櫛ヶ浜基地の場合はこれがどうだったのかはさっぱり分からない。そのため、この項では事実究明の役に立たないかもしれないが、少しばかりこの問題に触れておきたい。

筆者がさまざまな史料・資料を確認した結果を単刀直入に言うと、櫛ヶ浜基地における朝鮮人の存在を示す確固たる記載を残す史料は1つのみしか確認できなかった。

それが確認できた史料とは、先ほどから利用している書籍『紅の血は燃えて』である。ここには強制徴用ではないと思われるが、朝鮮人兵士の存在が3点ほど記されている。

海上駆逐隊補充隊には、陸軍少年戦車兵学校出身である「自称」韓国人の班長見習（伍長）が特別幹部候補生らへ「キシヤマラー」と怒鳴り激しい体罰を加えたという話と、櫛ヶ浜基地で教育を終えた兵士が海上輸送大隊に配属された後、朝鮮人兵士と海上輸送任務に当たるといった内容の話のふたつが確認できた。ただ前者に関してはあくまで「自称」であるし、後者については、朝鮮人兵士は朝鮮半島の主要駅において部隊へ編入されたことが同書より判明したため、櫛ヶ浜基地と朝鮮人の関係を語る情報としては微妙なものである。

一方、機動輸送隊補充隊では、櫛ヶ浜基地に朝鮮の高等商船学校から入隊した見習士官たちが訪れていたことが判明した。『慣れぬ日本語による命令』という文がみられることから、おそらく朝鮮半島在住の日本人ではなく、朝鮮人の可能性が高い。

同補充隊の隊員はこの見習士官らの教育に協力していたようだ。教育の内容は兵士へ命令を下すなどの指揮に関するもので、隊員たちは見習士官の命令に従って行動するものであったようだが、結局この見習士官らはこつ然とどこかへ行ってしまったと書かれており、彼らのその後は不明である。

以上のことから、朝鮮人と櫛ヶ浜基地は少なからず関係があったといえよう。筆者が見落とししてしまった朝鮮人に関する記述はまだ残っているかもしれない。先ほど挙げた見習士官たちとは別の朝鮮人もこの基地で訓練を行っていた・受けていたという可能性はあるし、基地の工事に朝鮮人が動員された可能性なども想定できる。特に特別幹部候補生が書き記した回顧録は今後、より注意して確認しなおす必要があるだろう。

また特別幹部候補生二期生の会員名簿（『第二期生会会員名簿』船舶特幹二期生会 1991）には海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊に転属した者のうちに、朝鮮・満州出身者の存在が複数確認できた。ただし、彼らの氏名は日本人のものである。朝鮮や満州に移住した日本人なのか、日本式の氏名を持った朝鮮人・満州人なのか、詳細な素性は不明である。

とはいえ、少なくとも筆者が調査した範囲においては櫛ヶ浜基地にて朝鮮人が存在していたことを示す決定的な史料・記録・証言は上記のものしか見つけられなかったという結果をここで共有させていただく。

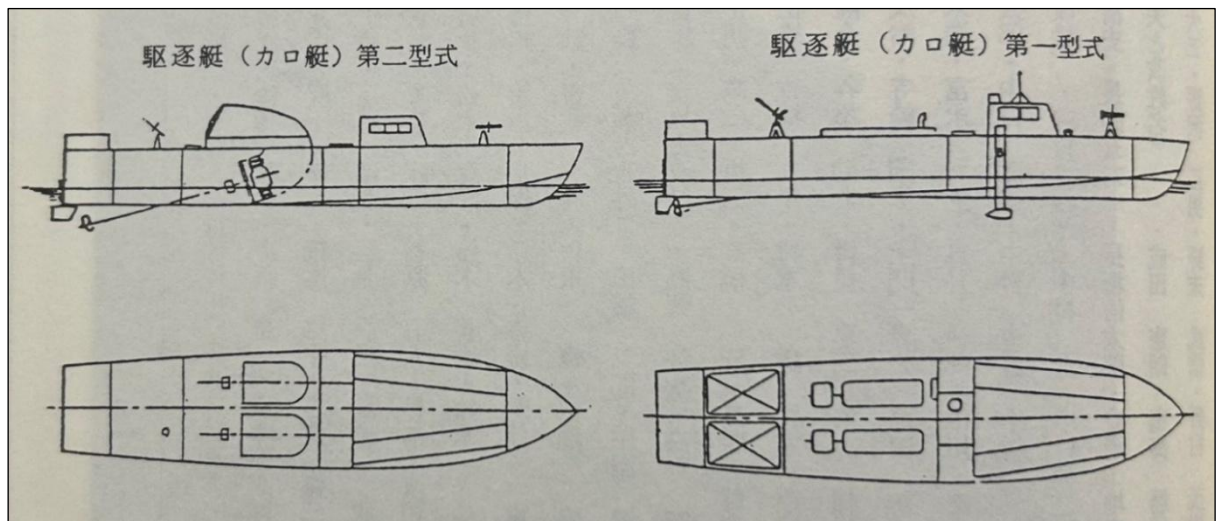


写真1：カロ艇の図面

いわゆる海上駆逐艇。対魚雷艇（魚雷などで武装した小型のボート）を目的に設計されたが、潜水艦を攻撃する能力も付与されており、泊地防衛の戦力として期待されていた。ただし、生産が振るわず、各種型式合わせて70隻程度の生産にとどまったとされる（奥本 2015）。

画像は『紅の血は燃えて』（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989）より引用。

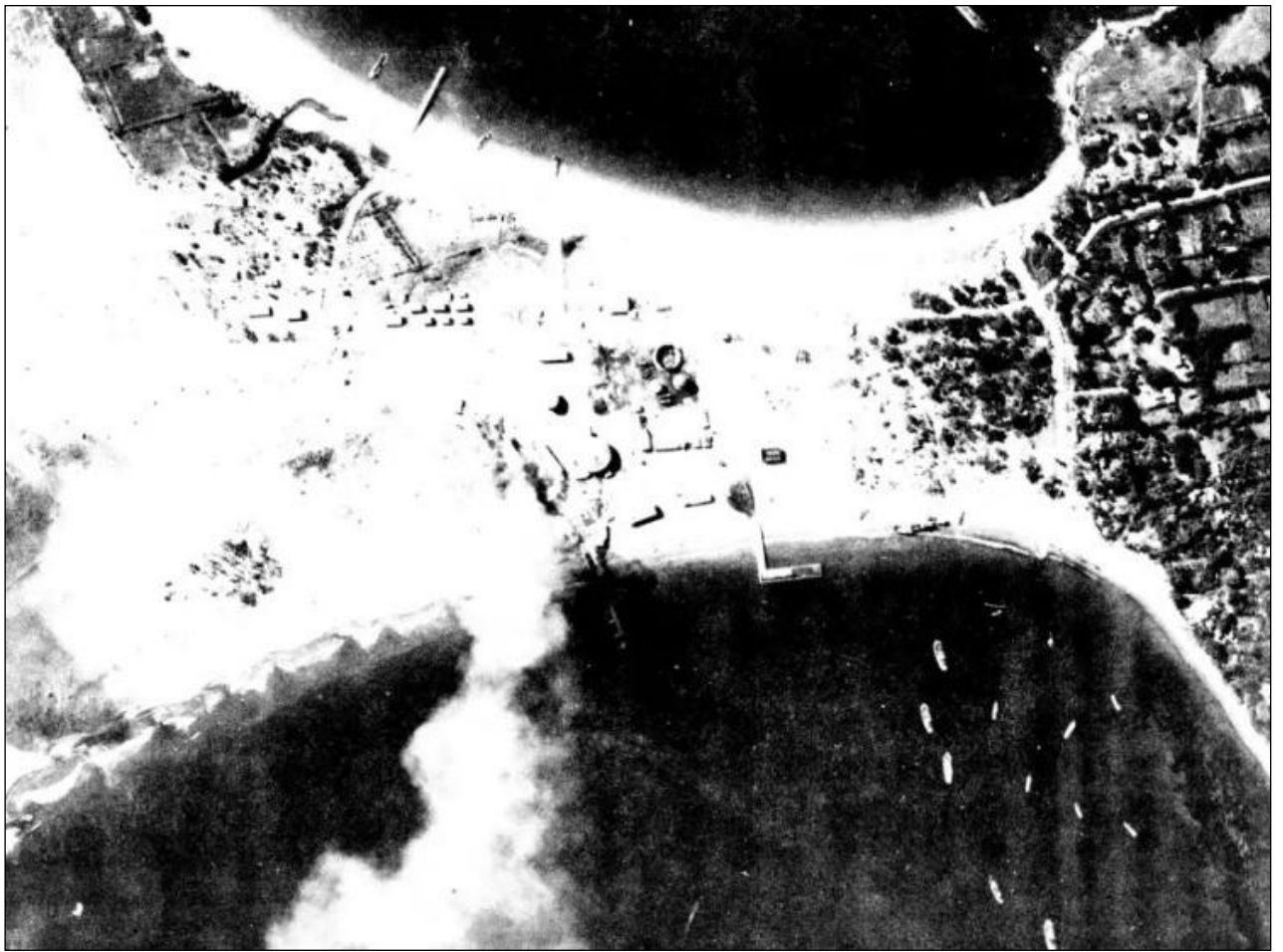


参考A：海上駆逐隊に編入された特別幹部候補生らの写真（撮影場所不明。1945年3月ごろ）

キャプションには「於 海駆隊営庭（甲板二班） 昭和20年3月頃」とある。撮影場所はおそらく櫛ヶ浜基地にある海上駆逐隊補充隊の関係施設と考えられるが、詳細説明が不足しており位置の確定が

できないため、参考画像として紹介する。

画像は『紅の血は燃えて』（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989）より引用。



参考 B：米軍の攻撃により炎上するフィリピンのサンフェルナンド港（1944 年 12 月 16 日米軍撮影）
画像は国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly
bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。

第三章 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊 櫛ヶ浜基地

●櫛ヶ浜基地の全貌

櫛ヶ浜基地の面積は、山口県文書館所蔵史料『土地建物関係綴③』内にある『軍用地一時使用許可申請書』によると面積 83000 坪、建物面積 8000 坪となっている。一方、同施設所蔵の『旧軍用地建物 一時使用申請及認可綴 第 1 号』内にある『徳山市暁部隊敷地 軍用地塩田化状況について』によると総面積は 26.6 町 (79800 坪) とされる。史料によって数値の変動がみられるが、後者はおそらく塩田化する敷地のみをまとめているため、正しい面積の数値は前者のものであろう。

また、この基地の人員に関して、先ほどから使用している防衛研究所所蔵史料『船舶司令部編制人員表』のうち『教育船舶兵団』によると、1944 年 10 月 28 日時点で 6123 人の将兵がこの基地に駐屯していたようだ。なお、これは海上駆逐隊補充隊と機動輸送隊補充隊の人員表に示された人数を単純に合計しただけの数値であるため、実際の数値とは差があると考えておいたほうがよいだろう。

以上のことから、どうやら櫛ヶ浜基地は他の船舶部隊基地と比較して、膨大な人員が駐屯する大規模な基地だったようだ。

とはいえ、数値だけを提示されても何がどう大規模なのかは分からないだろう。そこで、その証明として、他の主要船舶部隊などと本基地を様々な面で比べてみよう。

まずは先ほど利用した史料『船舶司令部編制人員表』を基に、他の船舶兵教育部隊の人数との比較を行う。

陸軍船舶練習部 (広島県) は将兵 2343 人と軍属 144 人、船舶工兵第一連隊補充隊 (山口県) は将兵 3119 人、船舶工兵第六連隊補充隊 (山口県) は将兵 2119 人、船舶工兵第九連隊補充隊 (和歌山県および広島県) は将兵 2969 人と軍属 3 人、船舶通信隊補充隊 (広島県) は将兵 1339 人、船舶整備隊教育隊 (広島県) は将兵 993 人であった。一方、櫛ヶ浜基地は将兵 6123 人である。内訳は海上駆逐隊補充隊 3432 人、機動輸送隊補充隊 2691 人となる (数値は全て 1944 年 10 月 28 日に集計された記録を使用、地名は防衛研究所所蔵『元船舶部隊一覧表』から引用)。

ここからまず、人員規模の大きさがお分かりになっただろう。なお、『紅の血は燃えて』に寄稿した機動輸送隊補充隊の隊員は、櫛ヶ浜基地に新兵として入隊してくる者が「片目の者・足の悪い者・指一本ない者・吾輩の親父の様な兵ばかり」であったと回想している。この時期はおそらく太平洋戦争後半ごろとみられ、このことから戦局の悪化に伴って櫛ヶ浜基地の兵士の質は低下していた可能性が高いと言える (「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989)。

次に、彼らが所有していた工作機械 (旋盤・形削盤など) の数を県内の他の船舶部隊と比較してみよう。史料は山口県文書館所蔵『国有財産移管綴』内の『工作機械所在部隊名及台数』を利用する。

船舶工兵連隊第一補充隊 (※山口市あるいは宇部市。この部隊に関しては史料・情報が錯綜している。防衛研究所所蔵資料『暁部隊』によると、山口県吉敷郡秋穂町秋穂国民学校内に所在) が 8 個、第十一野戦船舶廠順在分廠 (下関市) が 8 個、陸軍船舶工兵第六連隊補充隊 (柳井市) が 17 個であった。

これらに対し、櫛ヶ浜基地は計 46 個の機械を所有していた。その内訳は海上駆逐隊補充隊 19 個、機動輸送隊補充隊 27 個となる。

機材の種類は多岐にわたる。同史料に同封されていた『国有財産移管一覧表』によると、海上駆逐隊補充隊はボール盤・研磨機・丸鋸機・木工旋盤・旋盤・フライス盤・卓上ボール機・空気圧縮機・帯鋸機・ボイラー・ポーリングマシン・ベルトハンマーなどを所有していたことが挙げられ、機動輸

送隊補充隊は電気ボール盤、電気グラインダー・旋盤・木工旋盤・金切引鋸盤・二軸穿孔機・丸鋸ボール盤などを所有していたことが確認できた。

ここで、他の基地と比較してみると、櫛ヶ浜基地は豊富な設備を有していたことが判明した。

続いて、保有する舟艇の数の比較だ。県内の陸軍船舶部隊と比較してみよう。史料は山口県文書館の『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』のみを使用した（舟艇についての説明は後ほど「櫛ヶ浜で利用された各種舟艇・船舶」の項にてさせていただきます）。

陸軍船舶工兵第一連隊補充隊（山口市あるいは宇部市。防衛研究所所蔵資料『暁部隊』によると、山口県吉敷郡秋穂町秋穂国民学校内に所在、アイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『Japanese recruiting and replacement system, July 1945.』によると、宮城県石巻となっている）は報告なし。陸軍船舶工兵第六連隊補充隊（柳井市）は上陸用舟艇 55 隻（木製・ベニヤ製・鉄製大発動艇と小発動艇）に加え、モーターボート 2 隻（高速艇乙）の所有が認められる程度であった。

これに対して、櫛ヶ浜基地には戦闘艇 10 隻（装甲艇）・上陸用舟艇 114 隻（木製・ベニヤ製・鉄製大発動艇と小発動艇）という数が報告されている。

つまるところ、櫛ヶ浜基地は保有していた舟艇数も県内トップクラスだったというわけだ。

最後に、敷地面積も筆者が確認できた他の基地の面積と比べてみよう。

筆者の力量不足で、見つけることができた史料は山口県文書館に所蔵されている『旧軍用地建物一時使用申請及認可綴 第 2 号』の陸軍船舶工兵第六連隊補充隊の面積を示すものだけであった。

これによると、柳井市の伊保庄に駐屯した同部隊の敷地面積は、敷地 38982 坪（建物面積 4391 坪）・同部隊所有の烏島演習場 5300 坪の合計 44282 坪と判明した。

が、これは櫛ヶ浜基地には到底及ばない面積である。同地には、2771 坪ほどの「陸軍水道水〇〇（〇は読解不可能の文字。「用地」などが入ると推測される）」という施設がある。この伊保庄の船舶部隊との関係は不明であるが、これを加えても、やはり櫛ヶ浜基地の面積には敵わない。

これらのことから、この基地が設備・規模面において他の船舶部隊基地よりも大きく上回っていたことがお分かりになっただろう。

話を櫛ヶ浜基地に戻そう。

冒頭で述べた史料『土地建物関係綴③』によると、基地には兵舎・事務所・車庫・兵器工場をはじめとする各種工場（修理を実施する場と推定されるが、「自製工場」という単語もみられるため、一部の物品を基地で製作していた可能性がある）・水槽タンク・守衛室・医務室・各種倉庫・炊事場・浴室・燃料庫・酒保・兵器庫・監視所（舟艇訓練の指導や見張り・舟艇への破壊工作防止の目的と推定）などの建物が存在していた記録が残る。

これらの多くは木造平屋だが、一部は壁に鉄板が張られていたり、鉄筋コンクリート造のものも存在していた。回顧録では基地は周囲を板塀で囲まれ、兵舎が急造バラックだった・内部は板の間にワラ布団、整頓棚と殺風景だったという回想が見られるほか、「太華山に部隊の対空監視所が設けられている」（この文脈からすると、太華山の海軍防空施設とは別のものがあったとみられる）という話が見られた（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989）。

笠戸島出身で筆者とともに陸軍船舶兵について調べる土本誠治氏は筆者が発見した『土地建物関係綴③』と米軍空撮写真（写真 2）、そして幹部候補生の記録をもとに基地の地図を作成した（図 1）。

同氏曰く、31・32・33・34 の兵舎は海上駆逐隊補充隊の兵舎であり、28・29・30・38・41・44 の兵舎は機動輸送隊補充隊の兵舎と考えられるようだ。そうすると、57 や 58 の兵舎は海上駆逐隊補充

隊あるいは機動輸送隊補充隊の兵舎、もしくは人員補充などに訪れた部隊や新しく編成された部隊のための外来宿舎であると考えらるべきだろう。

『紅の血は燃えて』によると、海上駆逐隊補充隊と機動輸送隊補充隊の兵舎の間は約一メートルの溝で仕切られていたそうである。また、海上駆逐隊補充隊の兵舎は宮門側から海に向かって第6中隊、第5中隊・・・という具合に建ち並び、第1中隊の兵舎は海に接していたことや部隊本部（おそらく35）は海に面して建っていたとも記載されている。基地内には柵や仕切りらしい仕切りがなかったため、機動輸送隊補充隊の兵士と海上駆逐隊補充隊の兵士がお互いに会いに行くこともあったそうだ（『特幹二期生の記録』編纂委員会 1989）。

記録には残っていないが、当時基地周辺にお住まいであった秋本元之氏の証言によると、堀川に上陸用舟艇（おそらく大発動艇）が係留されていたほか、末武川の基地より少し上流の位置には、大鍋が設置され、兵士の布団などについてシラミなどを煮沸消毒する場所が設けられていたというので、櫛ヶ浜基地の敷地外にも関係施設が存在していたことが分かる。

『紅の血は燃えて』では、特別幹部候補生が「下松衛兵」という任にあたっていたことが記されている。これは、「部隊から数キロ離れた下松市の柳井高校（原文ママ）」に被服の倉庫があり、一週間その倉庫の警備をするというものであった。これが本基地の被服を貯蔵した倉庫だったのか、他の部隊の倉庫だったのかは不明である。ほかにも、海岸の砂浜・田園や末武川の河畔で教練が行われたり、中国山脈を横断する訓練をした等との記録が残り、詳しい場所は不明であるが基地の外でも訓練を行うこともあったことが分かった。ただし、船舶工兵第六連隊補充隊が烏島を演習場として所有していたように、櫛ヶ浜の船舶部隊が特定の土地を演習場として所有していたという記録は見つからなかった（『特幹二期生の記録』編纂委員会 1989・山口県文書館所蔵『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第2号』）。

1945年5月8日の徳山空襲ではこの基地に訓練目的で設置された重火器から反撃が行われたほか、被災した地域へ櫛ヶ浜船舶部隊は一部人員を派遣し、人命救助や遺体収容を実施した。空襲時には兵士が宮庭の蝸壺壕（少人数が入る小さな壕）や防空壕へ飛び込んだという記述も見られ、本土空襲が開始されるころになると、敵襲に備えた体制がとられていたようだ。同空襲後には機動輸送隊補充隊第5中隊第5区隊が兵舎を小学校（場所不明）に移したという記載も残るも、結局終戦まで基地そのものが空襲による被害を受けることはなかった。しかし、空襲時には地上から発射された高射砲弾の破片が基地に降り注いだほか、7月25日（7月に行われた空襲の日には諸説あり。26日あるいは27日と示す史料もあるが、『紅の血は燃えて』では25日と表記）には徳山市内が爆撃される中、目標から逸れて投下された爆弾が衛兵所付近に落下。破片を受け、立哨中の兵士が戦死・負傷するという事態が発生した（『特幹二期生の記録』編纂委員会 1989）。

また、山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』には「日本発送電株式会社 神野瀬水力建設所」から山口県知事や「徳山進駐軍隊長」に宛てた興味深い手紙が残っている（日本発送電株式会社は戦前に設置され、日本の電力を司った半官半民のトラスト企業である）。

手紙の内容を簡略に説明すると、日本発送電社は日本陸軍の船舶部隊の1つ、教育船舶兵団司令部（広島県）より機材供出の依頼を受けたので、1945年6月15日より海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊に日本発送電社のコンプレッサー・削岩機・モーター・送風管等の土木工事機械を移動・利用させたという。だが終戦後、工事のため供出した機械を返還してほしいのに、進駐してきた連合軍占領部隊の管理下に置かれて利用できなくなったから解決してほしいという話である。

土木工事の内容や実施された地区は不明であるが、同史料の『持ち込み工事用機材報告ノ件』など

から、戦争後半の櫛ヶ浜基地には企業から接収された機材も持ち込まれていたことが判明した。

ここからは余談であるが、米国から見た櫛ヶ浜基地についてわずかばかり述べさせていただこう。

米軍は遅くとも 1945 年 7 月時点には櫛ヶ浜基地の存在を確認していた。それは米国のアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリに所蔵されている史料のひとつ、米陸軍省軍事情報部によって作成された『Japanese recruiting and replacement system, July 1945. (1945 年 7 月の日本の募集および補充制度)』から確認できる。ただし、この時点では米軍は海上駆逐隊補充隊が櫛ヶ浜基地に存在していたこと・海上駆逐隊補充隊の「暁 16712」という通称まで把握していた。

反面、機動輸送隊補充隊は存在こそ知っていたものの、この基地に駐屯していたことは知らなかったようである。

両部隊の人員やこの基地に配備されている兵器についても同様に把握できていなかった。また、米軍は本土決戦の際、この 2 つの部隊は教育部隊としての活動を停止し、戦闘部隊として行動するのではないかと睨んでいたことが前述史料より伺える。

どのような経路で海上駆逐隊補充隊の情報が米国側に漏れたのかは不明である。南方戦線にて捕虜になった海上駆逐隊補充隊出身の兵士が情報を提供したか、日本兵の軍隊手帳や日記などの資料が回収されたのではないかとみられる。機動輸送隊補充隊については訓練を終えた兵士の多くが輸送船などの船舶に搭乗した。結果、米軍の攻撃を受けた際にそのまま溺死しまったことで、情報を提供する捕虜がほとんど発生しなかったことで、米軍はこの部隊の情報はあまり収集できなかったのではないかと筆者は考える。

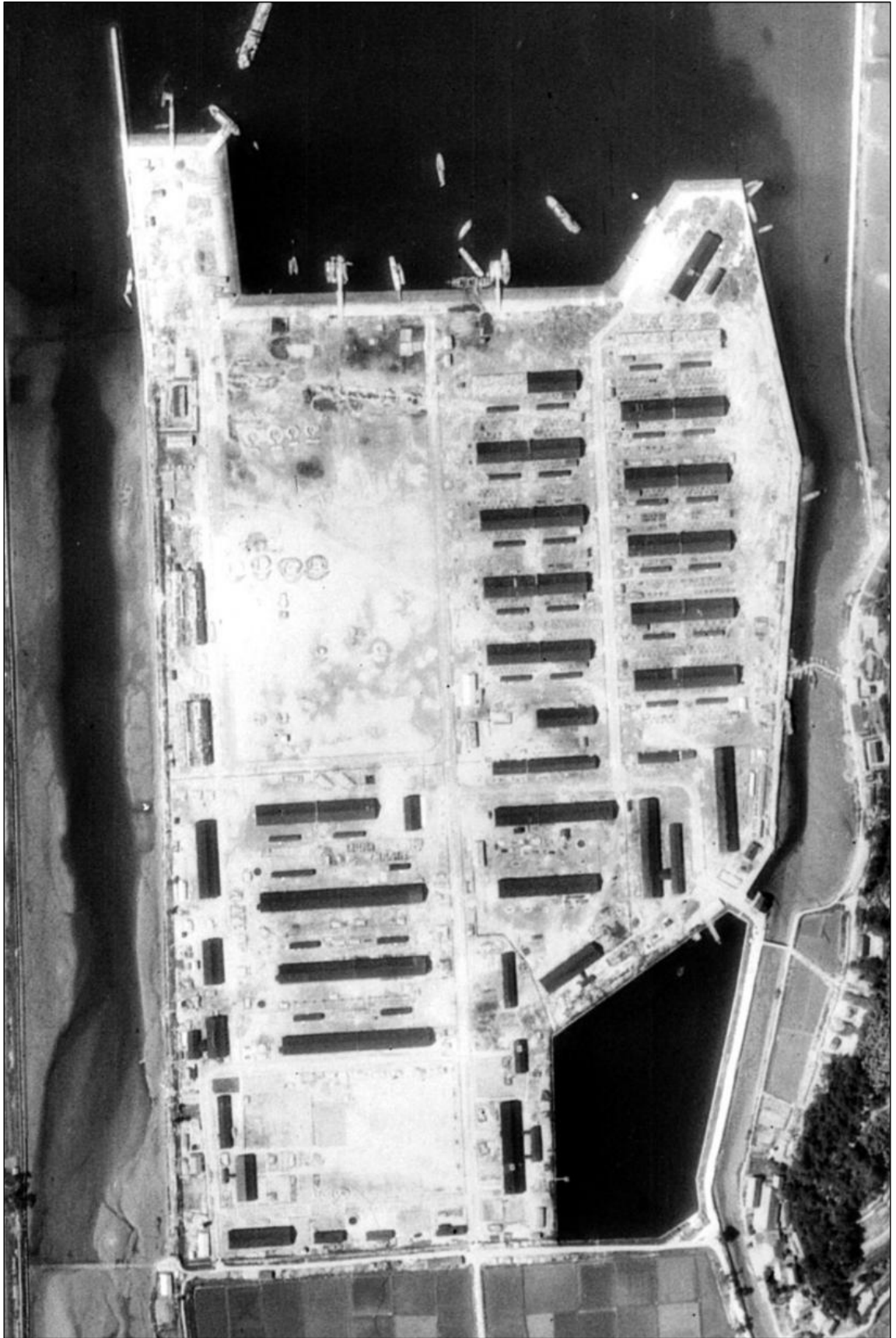


写真2：米軍による櫛ヶ浜基地の空撮（1945年7月5日米軍撮影）

宮庭（グラウンド）に壕や砲台と思わしきものが多数確認できるほか、史料に同封されていた地図と多少配置などが異なる建物も存在している。

画像は土本氏が郷土史家の工藤洋三氏より提供していただいた米軍機による偵察写真である。

●櫛ヶ浜における使用兵器

櫛ヶ浜基地で使用された軍用船のすべてを解き明かすことはできないだろう。しかし、山口県文書館収蔵の戦後史料を通じて、どのような舟艇がこの基地で運用されていたのが判明した。

櫛ヶ浜海上駆逐隊補充隊は終戦時に、折畳舟（写真3）が17隻（山口県文書館所蔵『旧陸海軍雑用船名簿』）。それに加え、鉄製小発動艇36隻（写真5）・木製大発動艇49隻・鉄製大発動艇2隻・ベニヤ製大発動艇27隻（写真6・7）・装甲艇10隻（写真8）を所有していたことが判明した（山口県文書館所蔵『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』）。

なお、史料によってはさらに、機帆船3隻（写真10）・高速艇9隻・高速輸送艇旭型1隻・星型輸送艇1隻（詳細不明）・曳船（史料によっては「小型曳ボート」とも呼称、写真9）1隻・内火艇1隻（前述した「高速艇」を指すものか、実際は不明）・漂着していたところを拾得して入手した特型運貨艇（海軍が所有した大発等の呼称である「特型運貨船」のことと思われる）1隻を所有すると記すもの（山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』）や、小輸送艇4隻（写真11）・中輸送艇4隻・汽艇1隻・機付舢舨（前述の「折畳舟」を指しているものかは不明）2隻・運貨艇2隻の所有を示すもの（山口県文書館所蔵『特殊物件外船舶調査綴』）もある。

ただし、『船舶関係雑件綴』と『特殊物件外船舶調査綴』については舟艇が所属している部隊の照会がされているか怪しい印象を受けたため、参考程度に留めておいた方がよいだろう。明らかに重複しているものは除外して紹介したほか、機帆船・小輸送艇・中輸送艇・特型運貨艇・高速艇の一部に関しては、機動輸送隊補充隊の所属のところが誤って海上駆逐隊補充隊所属と記載している可能性がある。また、筆者の誤読もある可能性があるので注意されたい。

一方、陸軍機動輸送隊補充隊は終戦時、機帆船3隻、小輸送艇2隻、折畳舟7隻の所有を示す史料（山口県文書館所蔵『旧陸海軍雑用船名簿』）と、カッターボート2隻（写真4）の所有を示す史料（山口県文書館所蔵『船舶仮保管一件』）が確認できた。

更に所属は不明であるが、櫛ヶ浜基地沖にモーターボート1隻が存在していると示す史料もある（山口県文書館所蔵『船舶仮保管一件』）。

ただし、これらはあくまで終戦時に史料に記されたものだけをまとめたものであり、この地にいた・この地で教育を受けた兵士たちが運用していた舟艇はこれだけには留まらない可能性が高いということに注意しなければならない。

実際、特別幹部候補生らの回顧録にはSS艇やSB艇（写真12）と呼ばれる輸送艦に乗り込んで訓練を実施したという証言が残っている（「特幹二期生の記録」編纂委員会1989）。

更に、米軍の空撮写真（写真2）では上記の艇とは形状が異なるように見える船舶が写っている。

以上のことから、史料から配備された舟艇を完全に把握することは困難である。他部隊の所属と誤認・混同されたり、何らかの事情で記録されていない艇が存在していると考えておくべきだろう。

山口県文書館所蔵『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』には、破損した海上駆逐隊補充隊所属の木製大発動艇が対岸の笠戸島などで放置されている記載がある。この史料にて艇が大破している場所は、部隊が駐屯した場所である傾向がみられるため、一部の上陸用舟艇は笠戸島に駐屯していた部隊のもとで運用・管理された可能性が高い。

ただし、『船舶仮保管一件』内の『軍用舟艇借用ニ関スル件』には、「笠戸島西海岸鼻線に使用者不明の木製大発動艇が漂着し、擱座した。」という旨の記録があるため、艇が大破している場所の全てが駐屯していた場所ではないということも示しておく。

土本氏は周南市大島に駐屯した笠戸嵐部隊の壕掘削に櫛ヶ浜基地の兵員と舟艇が動員されたと予想

している。現時点ではまだ裏付けのない仮説に過ぎないが、事実であれば、大島地区でも一定数の舟艇が運用・保管されていたかもしれない。

ここまでで櫛ヶ浜基地の所有する船舶を解説してきたが、本項の後半からはこの基地において運用された陸戦兵器・車両についても解説しよう。

基地の営庭には輸送船に搭載される火砲（高射機関砲や高射砲など）が設置されており、兵たちはこれで自衛火器を扱う訓練を行っていた。前述した通り、徳山空襲時にはこれらの砲で基地からの反撃が行われたとの記録が残る。これら火砲を操っていた部隊は不明だが、この基地から発射された高射砲の弾丸は米軍の飛行機に命中することはなく、ついには砲身が真っ赤になり曲ってしまったそうである。（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989・「特幹二期生の記録」編纂委員会 2004）

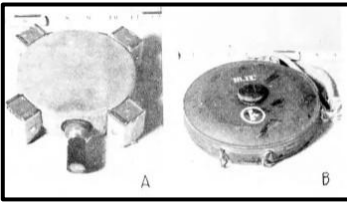
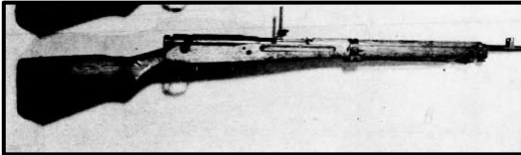
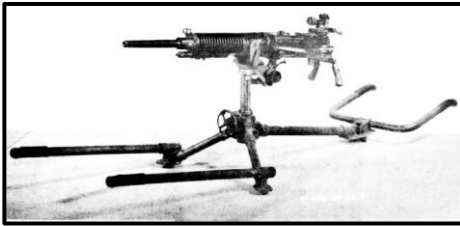
櫛ヶ浜基地で教育を受けた特別幹部候補生隊らによる回顧録などには「防毒面」、「騎兵銃（三八式騎兵銃あるいは四四式騎銃と推測）」、「九九式歩兵銃」という単語が登場しているため、一般的な小火器もこの基地で保管・使用されていたようだ。

さらに、この基地で教育を受けた兵士が「重機関銃（九二式銃機関銃あるいは一式重機関銃と推測）」に関する教育を受けていること・戦争末期に海上駆逐隊補充隊にて「アンパンと呼ばれる地雷（九三式戦車地雷などの対戦車地雷と推測）」や「破甲爆雷（九九式破甲爆雷と推測）」を用いた肉薄攻撃訓練が実施されたという証言を鑑みると、櫛ヶ浜基地では前述した兵器だけではなく、他の兵器も配備されていた可能性が高い（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989・『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編） 第8巻』より『常德作戦の苦しみと戦死した戦友を思う』）。

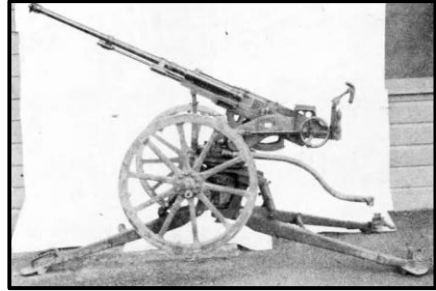
他にも機動輸送隊補充隊の隊員が副官の同伴として船舶司令部（宇品）まで向かったものの、宿が取れず単身自動車で櫛ヶ浜基地まで戻った記録等が残るほか、基地内に車庫が存在していることを示す史料がある。そのため、基地では一定数の自動車なども利用されたと考えられるだろう（「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989・山口県文書館『土地建物関係綴③』）。

ここからは余談である。山口県文書館所蔵史料『完結原議綴 雑品（昭和22～26年）』には「櫛ヶ浜曉部隊」の名で馬7、馬車3、野戦馬鉄工具1が山口県馬匹組合へ引き渡されていることから、基地では馬も使用されていたことが窺える。これを裏付けるものとして、実際に『紅の血は燃えて』に寄稿した隊員や、少年時代の秋本氏は陸軍将校が馬に乗っていたことを目撃している。

使用軽火器（例）



使用重火器（例）



参考 C：櫛ヶ浜基地で使用された可能性が高い兵器の一部（櫛ヶ浜基地で撮影されたものではない）

軽火器（上：九二式重機関銃 中：九九式小銃 下：九九式破甲爆雷・九三式戦車地雷）

重火器（上：九六式二十五糎機銃 下：九八式二十糎高射機関砲）

画像は国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。

● 櫛ヶ浜で利用された各種舟艇・船舶

先ほど、「櫛ヶ浜における使用兵器」の項で説明したように、櫛ヶ浜基地では多様な舟艇・船舶が活用されていた。本項では、この基地の兵士によって運用がされたであろう舟艇・船舶について、可能なものは画像を交えつつ、簡単な解説をしていきたい。

紹介は、おおよそ小さい艇から大きい艇の順番で行うこととする。

なお、いずれの掲載写真も櫛ヶ浜で撮影されたものでないことに注意。



写真3：サイパン島にて分解したまま座礁した折畳舟（米軍撮影、1944年6月18日ごろに撮影されたと推測）

折畳船（正式名称「九三式折畳舟」・「九五式折畳舟」・「九七式駄載折畳舟」等）・・・渡河や上陸などで使用されたほか、本写真のように負傷者の搬送などにも使用されていた。史料によっては、「中折舟」「組み立て式の箱舟」という名称の舟が登場するが、これも折畳舟であると筆者は解釈する（山口県文書館「船舶仮保管一件」・「船舶特幹第三期生の記録」編集委員会 1995）。

『旧陸海軍雑用船名簿』には長さ5mという記述が見られるため、櫛ヶ浜基地で使用されたのは「九七式駄載折畳舟」であると筆者は考えた。ところが、『船舶仮保管一件』によるとこの基地で運用されているのは「九五式折畳舟」であったということが判明した。

折畳舟を橋として運用することも多々あり、当時の教範である『兵務課 渡河作業教範総則及第1部 第2部の件（1）』（防衛研究所所蔵）からもそのことが窺える。『不許可写真集』（毎日新聞社 1998）でも陸軍兵士によって運用されている写真が確認できる。

画像は国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。

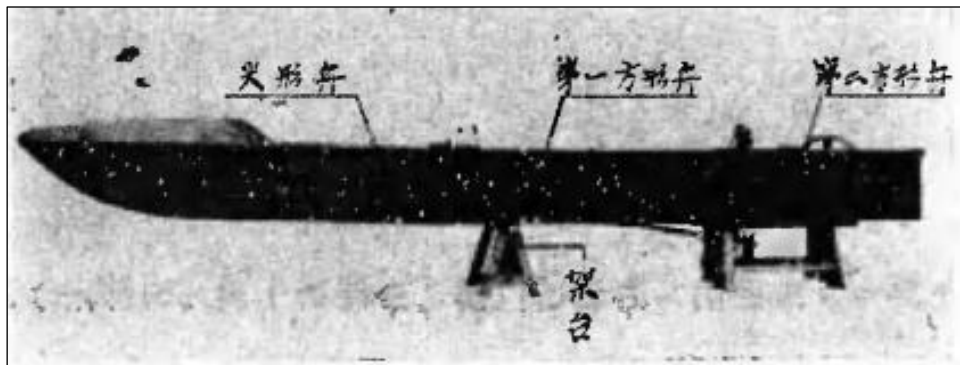


写真4：カッター訓練に励む日本海軍大竹海兵団の水兵（撮影時期・撮影者不明）

カッターボート・・・乗組員がオールを漕いで進む舟。大型艦艇に搭載されることもある。「短艇」とも呼称される。海軍ではもちろん、陸軍船舶部隊でも使用されたようだ。

櫛ヶ浜基地の兵士たちはこの艇を用いて訓練を行ったということが『紅の血は燃えて』より読み取れる。櫛ヶ浜基地においては数少ない人力で動かす舟艇だったのではないかとみられる。

画像は大竹市教育委員会より提供。



参考D：機付艇のひとつと筆者が推測している九九式機舟の写真（実際に写真の九九式機舟が「機付艇」を指しているかは不明なので、あくまで参考画像という扱いにする）

機付艇・・・渡河の際に使用された舟艇。全長・全幅は不明。

架橋の際に利用されるだけでなく、渡河舟艇として中国戦線で利用された記録も残る。折畳舟よりも多くの馬匹を搭載できると評価されている。なお、自走のために設置された操舟機（エンジン）は貧弱であるとの記載もある（防衛研究所所蔵『常德殲滅作戦に於ける教訓 昭和19年1月25日 第39師団』）。交通船としても使われたようである（防衛研究所所蔵『第3揚陸隊命令 10月』）。防衛研究所所蔵史料『29. 海運器材資材整備予算』によると本艇は1945年において、1500隻の製造が予定されていたようである。

具体的にどのような兵器なのかは不明であるが、筆者は写真に掲載された九九式機舟のように、折畳

舟に操舟機を取り付けた兵器を指しているのではないかと推測する。

また、防衛研究所所蔵史料『第1 Lingayen湾上陸作戦』では上陸に使用した上陸用舟艇のなかに、大発動艇・小発動艇とともに本艇の名前が掲載されている。よって、1941年12月時点には確実に存在していた兵器であるとみてよいだろう。

画像は防衛研究所所蔵『機械課99式機舟取扱法の件』より引用。



写真5：小発動艇（撮影時期・撮影者不明）

小発動艇・・・兵士たちを上陸させる目的で開発された鉄製の小型舟艇（上陸用舟艇）。通称「小発」。全長10.71m、全幅2.44m（奥本2016）。

海軍で使用される場合には「特型運貨艇」と呼称される。なお、1944年からは大発動艇の方が利用価値が高いと判断されたために生産が中止。ただし、利用自体は継続していた。山口県内の他の船舶部隊でも一定数が配備・利用された記録が残る。大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本2016）や『不許可写真集』（毎日新聞社1998）では、本艇の解説や写真が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

画像はアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft (ONI 208-J 補足第2号 極東小型船艇)』より引用。



写真6：陸軍用の大発動艇（撮影時期・撮影者不明）



写真7：海軍によって利用される大発動艇（特型運貨艇）（撮影時期・撮影者不明）

大発動艇・・・兵士に加え、戦車や重量のある兵器を上陸させることを目的に開発された鉄製の小型舟艇（上陸用舟艇）。通称「大発」。全長 14.55m、全幅 3.3m（数値は木製大発動艇、奥本 2016）。汎用性の高さから陸海軍双方で重宝された。海軍で使用される場合には「特型運貨艇」と呼称される。戦争後半になると物資不足から木製や合板製のものも登場するようになり、艇のサイズが小さくなった・軽量化したなどの変更点がある。基本的には、櫛ヶ浜を含む各地域の船舶部隊がこの艇を訓練で用いており、彼らにとっては最もオーソドックスな兵器だったと言えよう。

なお、『船舶関係雑件綴』にて、櫛ヶ浜基地の所属にされていた特型運貨艇については戦後漂着したものである可能性があり、当時は別部隊の所属だった可能性がある。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本 2016）や『不許可写真集』（毎日新聞社 1998）でも、本艇の解説や写真が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

画像は写真 6・7 とともにアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft（ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇）』より引用。

高速艇・・・伝令や偵察などに用いられた高速艇。甲型・乙型が存在する。全長 14.42m、全幅 2.74 m（数値は甲型、奥本 2016）。

柳井市に駐屯していた船舶工兵第六連隊補充隊は高速艇乙を所有していた記録が残るため、櫛ヶ浜基地でも運用されていた可能性は否めない。『船舶仮保管一件』に登場する「モーターボート」はこの艇を指している可能性が考えられるほか、明言されていないものの『紅の血は燃えて』にて登場する「連絡船」は本艇だった可能性がある。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本 2016）では、本艇の解説とともに写真が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

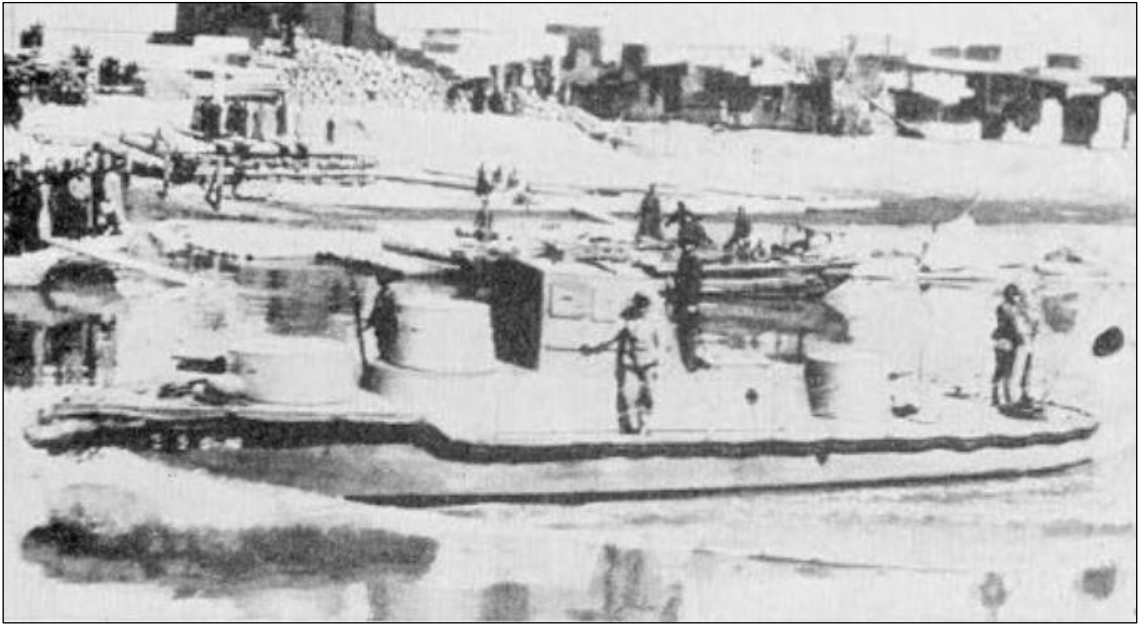


写真 8：米軍報告書に掲載された中国における装甲艇（撮影時期・撮影者不明）

装甲艇・・・河川や沿岸の敵に砲撃を加えることを目的に開発された鉄製の小型舟艇。全長 15.5m、全幅 3m（数値は三号艇、奥本 2016）。米海軍情報部によって作成された『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft（ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇）』にはさまざまなタイプの本艇が報告されている。櫛ヶ浜にどのタイプが配備されたのかは不明。

海上駆逐隊補充隊が戦車帽 30 個・戦車眼鏡 24 個を所有すると記した史料が残るが、これは装甲艇の運用で用いたのではないかと推測される（山口県文書館所蔵『主要品目報告一件』）。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本 2016）や『不許可写真集』（毎日新聞社 1998）では、本艇の解説や写真が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

画像はアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft（ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇）』より引用。



写真 9：米軍報告書に掲載された曳船（タグボート）（撮影時期・撮影者不明）

曳船・・・船の曳航や水先案内などを行う舟艇。民間で活用されたものや占領した際に接収したもの

をも日本軍は使用していた。船の全長は平均 22～33m、最大のものは全長 45m である（『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft (ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇)』）。

ただし、この舟艇が櫛ヶ浜基地で運用されていたのかは明確ではない。山口県文書館所蔵『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』には「陸軍櫛ヶ浜附立（病院）」所属や「徳山防備隊」の曳船が確認できるので、戦後に移動されたものを櫛ヶ浜基地の所属という形で処理したという可能性も否定はできない。また、史料で提示された本船の具体的な大きさやどの程度の能力を有していたのかも不明。画像はアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft (ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇)』より引用。

イ号高速艇・・・敵制海権下・制空権下での物資輸送を目的とした高速輸送艦。全長 33m、全幅 5.4 m（数値は二型、奥本 2016）。

1944 年から研究が開始され、一型と二型を合わせた 60 隻が建造された。なお、本艇を使用する高速輸送大隊は一つしか編成されていないことが防衛研究所所蔵史料『元船舶部隊一覧表』より分かる。どういふわけか、『紅の血は燃えて』では、海上駆逐隊補充隊の隊員が櫛ヶ浜基地にイ号高速艇を 1 隻配備されていたのを目撃したという話が紹介されている。これを裏付けるように、前項で使用した『船舶関係雑件綴』にて、「海上駆逐隊」（「補充隊」を欠落した状態で誤記載したとみられる）が「高速輸送艇旭型」を 1 隻保有していた記録が残る。

ただし、「旭型」という型は確認されておらず、詳細は不明である。櫛ヶ浜の舟艇のなかには、「旭〇〇〇〇」・「星〇〇〇〇」・「暁〇〇〇〇」（〇の部分には数字が入る）といった具合に船名・番号が付られていることがあるため（山口県文書館所蔵『特殊物件外船舶調査綴』）、「旭型」は船名についての「旭」を型式のひとつと誤認したものではないかと推測される。

本艇が櫛ヶ浜へ配備された経緯も不明であるが、本部隊は「高速輸送第一大隊」の補充を担当していた記録が残るため、教育機材として配備されたものだったのだろうか推測する（山口県文書館所蔵『部隊一覧表』）。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本 2016）では、本艇の解説とともに設計図が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。



写真 10：米軍の偵察機により撮影された木造機帆船の集団（ラバウル・シンプソン港にて 1943 年 11 月撮影）

機帆船・・・民間で盛んに利用されていたエンジンを有する木造船。船舶兵によって、局地における物資輸送で利用されることも多かった。

比較的小型の輸送船は機帆船や鉄製の貨物船などをひっくるめ「海上トラック」と呼ばれた。もとも

とは民間で運用されていたものであったが、太平洋戦争時にはかなりの数の船が徴用され、陸軍船舶兵や海軍に利用された。大きさや設備も艇によってまちまちである。櫛ヶ浜基地では3隻の存在が確認されている。

画像はアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft (ONI 208-J 補足第2号 極東小型船艇)』より引用。

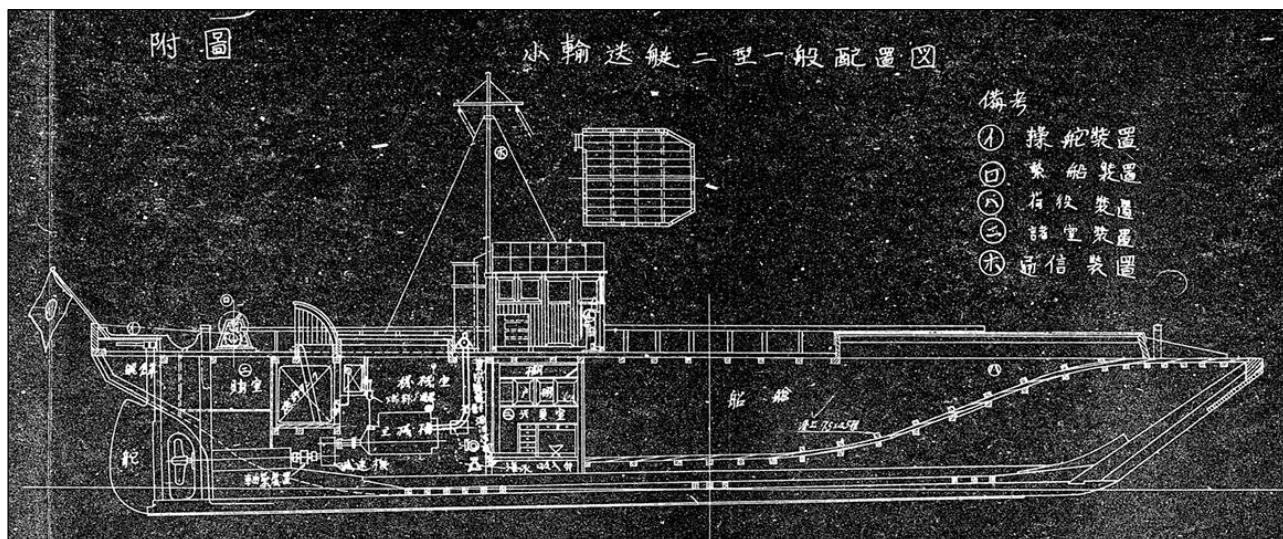


写真 11：小輸送艇（二型）の図面

小輸送艇・・・港湾設備の整っていない島々への輸送のために開発された木造機帆船。全長 23.9m、全幅 4 m（数値は二型、奥本 2016）。

櫛ヶ浜に配備されたという記録はないが、『旧陸海軍雑用船名簿』にて、機動輸送隊補充隊の所属となっている本艇二隻（史料の「記事」（備考）欄には「不詳一三隻」・「不詳一二」と記されている）が福岡県若松で停泊していたことが判明した。なお、『特殊物件外船舶調査綴』では、海上駆逐隊補充隊所属の本艇が 4 隻存在しており、櫛ヶ浜に所在していたことを示している。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本 2016）では、本艇の解説とともに設計図が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

画像は防衛研究所所蔵『10 小輸送艇 2 型研究中間報告』より引用。

中輸送艇・・・輸送のために開発された機帆船。「一五〇噸（屯）型機帆船」あるいは「一〇〇噸（屯）型機帆船」などのバリエーションがあったようだ。全長・全幅は不明。

防衛研究所所蔵史料『発来翰綴 昭和 20. 1～3』のうち、『9. 兵政造密第 56 号 中輸送艇（150 噸型機帆船）整備ニ関スル件 昭和 20 年 1 月 9 日』などに記録が残り、大阪陸軍造兵廠が整備を担当していた（「一五〇噸型」のみか、「二五〇噸型」も担当していたのかは不明）。

『162. 大作秘第 477 号 中輸送艇整備ニ関スル件依頼 昭和 20 年 2 月 16 日』（防衛研究所所蔵）によると、1945 年 2 月 16 日時点で 14 隻が建造中であった。『163. 大作第 452 号 中輸送艇整備ニ関スル件通牒 昭和 20 年 2 月 19 日』（防衛研究所所蔵）が作成されたころには、この 14 隻は完成し、乗員も揃っていたようであるが、曳船の関係で 1945 年 2 月 19 日時点では引き渡し日は未定という状態であった。同史料曰く、本船は昭和十八年度乙造船緊急増産により整備されはじめたとのことであるが、工事は粗雑と評されている。

『兵政造密第1367号 昭和20年4月2日 中輸送艇の製造命令訂正相成度件通牒 他』（防衛研究所所蔵）にも記載が残り、本船が木造機帆船であること・「一五〇噸（屯）型」と「二五〇噸（屯）型」の二種類の型が存在していたことなどが分かる。なお、写真や詳細な諸元は現時点では確認できていない。

『特殊物件外船舶調査綴』は海上駆逐隊補充隊所属の本艇が4隻、櫛ヶ浜に所在していたことを記録している。櫛ヶ浜基地に至るまでの経緯は不明。

SS艇（「機動艇」・「機動輸送艇」とも呼称）・・・戦車などの兵器や兵員を大量に輸送し、直接船を海岸に上陸させることを目的に作られた輸送船である。全長63m、全幅9.6m（奥本2016）。

機動輸送隊の主装備となった。なお、終戦時の櫛ヶ浜基地で本艇は確認されていない。

大日本絵画より出版された『日本陸軍の舟艇』（奥本2016）では、本艇の解説とともに写真が確認できるが、権利上の問題で掲載は控えさせていただく。

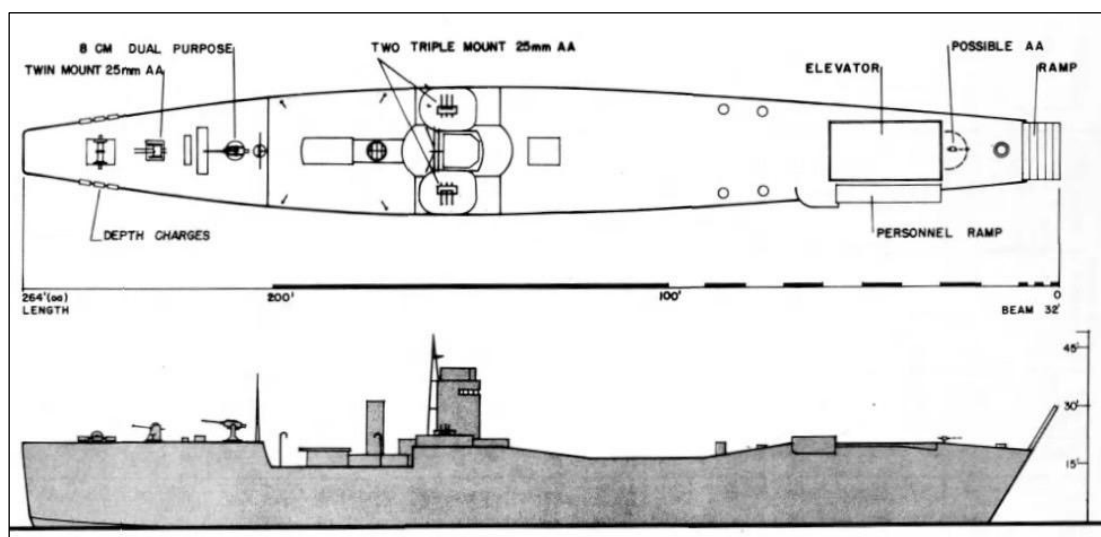


写真12：米軍報告書に掲載されたSB艇の図面

SB艇（「二等輸送艦」とも呼称）・・・機動輸送隊の主装備となった海軍開発の輸送艇。全長75m、全幅9m（大内2016）。

SS艇と同じく、戦車などの兵器や兵員を大量に輸送し、直接船を海岸に上陸させる目的で設計された。こちらの艇も機動輸送隊で利用されたほか、機動輸送隊補充隊の航海訓練で使用された記録が残る。なお、終戦時の櫛ヶ浜基地で本艇は確認されていない。

潮書房光人社『輸送艦 給糧艦 測量艦 標的艦 他』（大内2016）では本艇の詳細な解説のほかに、写真も掲載されているが、権利上の問題で写真は利用しない。

画像は国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。

●備考 艇の係留状況

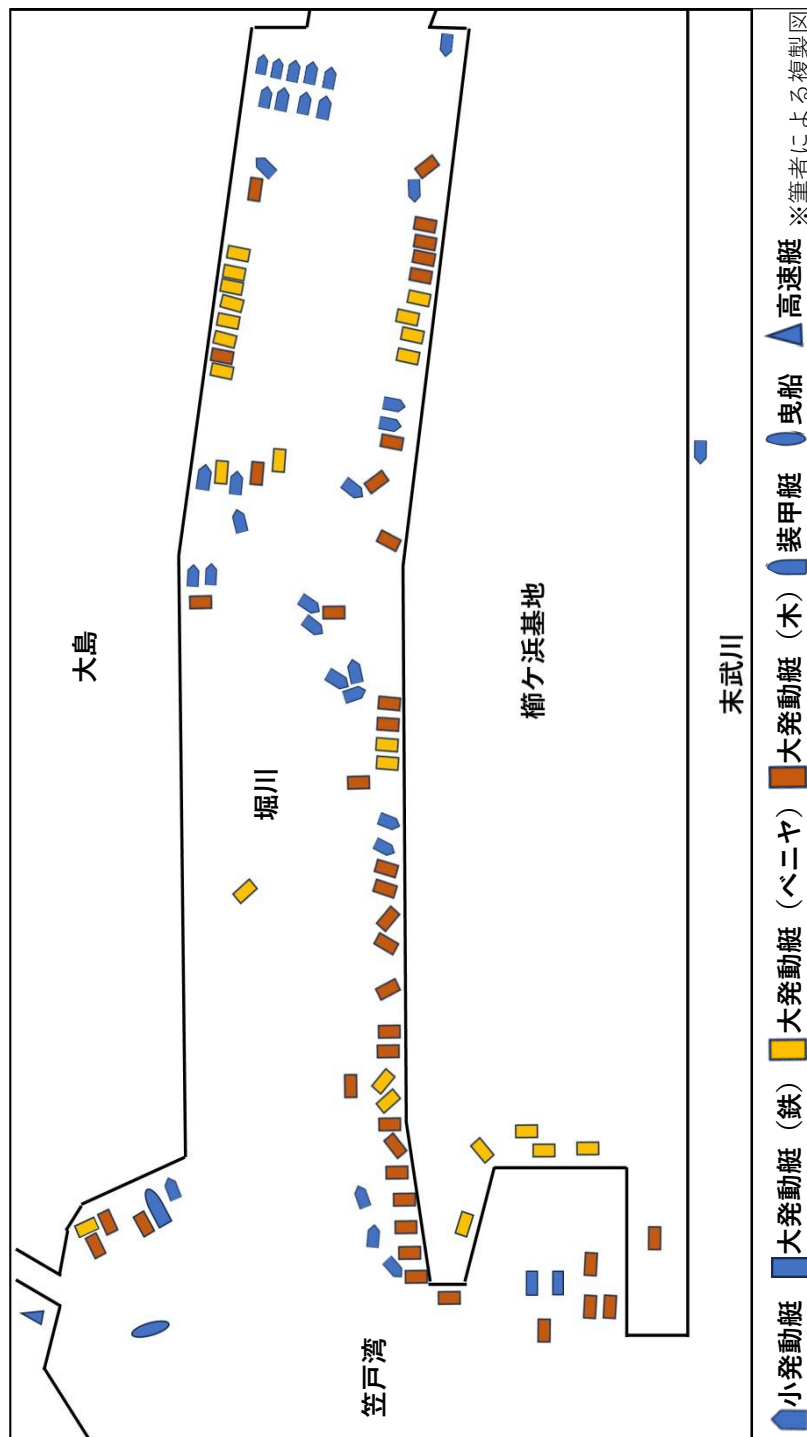
山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』のなかには、1946年10月24日に山口県知事宛てに送られた『櫛ヶ浜旧暁部隊作業報告書提出の件』が含まれている。

この報告書には、櫛ヶ浜基地のどこに艇が係留されていたのかを示す図面が同封されていた。終戦後に記録されたものであるため、移動された艇も多くあるだろう。ただ、この基地において舟艇が如何に係留・保管されたかがイメージしやすい史料であるため、参考として図面の複製を掲載する。

ただし、元の史料が既に実際の地形と異なっていること・艇の所属は不明であることに注意。

図2：1946年10月24日に報告された櫛ヶ浜基地における軍用舟艇係留状況

『船舶関係雑件綴』（山口県文書館所蔵）に掲載された図面を筆者が複製したもの。



●櫛ヶ浜の基地とのゆかりのある部隊

櫛ヶ浜基地は陸軍船舶部隊にとって重要な場所であった。その証拠として、防衛研究所所蔵史料の『陸軍船舶部隊略歴』から、いくつもの部隊がこの基地と関係していることが読み取れる。

この史料にて機動輸送中隊と海上輸送大隊のふたつの部隊が登場した場合、多くの部隊の略歴には、「櫛ヶ浜（原文ママ）」の地名が登場している。

よって、櫛ヶ浜基地は大戦後半における陸軍海上輸送部隊にとって、部隊編成や人員補充の面から重要な拠点のひとつとなっていたのである。

これら櫛ヶ浜基地に関係する部隊は戦局が悪化していく中で、主に日本～朝鮮半島間の物資輸送や国内での輸送を敢行し、物資不足に喘ぐ日本軍の兵站をなんとか維持していたのだ。たかが国内、日本～朝鮮半島と思われる方もいらっしゃるかもしれない。だが当時の日本近海はすでに米軍の手に落ちかけており、平然と来襲する米軍航空機や潜水艦だけでなく、無数の機雷（船が接近・接触すると爆発する水中兵器）が敷設され、文字通り「死の海」と化していたことを忘れてはいけない（参考 E・F）。

この基地での編成や補充を受けた部隊のなかには、呉空襲や沖縄戦・フィリピンの戦いといった太平洋戦争を語る上で欠かせない激戦に参加している部隊がみられる。そのほかにも、1945年に激戦地となる硫黄島に訪れた部隊や多号作戦（フィリピンへの物資輸送作戦）に参加した部隊、大陸へ渡った日本兵や日本人たちのために本土への引き揚げを実施した部隊もある。

このことから間接的ではあるが、櫛ヶ浜という土地が日本にとって重要な局面に関わっていたという事は明らかだろう。

彼らは戦争の花形である戦車や戦闘機、戦艦を用いていたわけではなかった。けれども、彼らがいなければ、日本の戦争遂行はより困難になり、戦局は史実以上の悲惨な状態になっていたに違いない。

これからは『陸軍船舶部隊略歴』に記載されている櫛ヶ浜に訪れた部隊やこの地で結成された部隊の詳細を示す。

防衛研究所所蔵史料『陸軍船舶部隊略歴（その1～その4）』より、櫛ヶ浜基地に関する部隊とその概要の抜粋（※部隊概要は筆者により要約したものの、部隊名は原文ママ）

・第二機動輸送隊本部

1944年8月3日に櫛ヶ浜で編成。釜山、那覇、高雄（台湾）等を経由。最終的にはネグロス島（比）にて終戦。なお、本土残留者は櫛ヶ浜機動輸送隊のもとへ到着後、航海訓練・整備業務に従事している。

・機動輸送第二中隊

広島で編成。マニラ（比）やセブ（比）などの南方で輸送や対空戦闘を実施。1945年1月9日に櫛ヶ浜に到着。機動輸送隊補充隊長の指揮下に入る。その後国内各地を転々しつつ、同年8月19日に櫛ヶ浜に到着。

・機動輸送第三中隊

1944年6月27日、櫛ヶ浜機動輸送補充隊長の指揮下に入る。高雄（台湾）などを経たのち、ミンドロ島（比）にてレイテ（比）増援輸送作戦を実施。その後、主力は宮津（京都府）、砲兵要員は阿川港（山口県）にて終戦。

・機動輸送第六中隊

1944年3月30日、宇品にて機動輸送隊補充隊と船舶砲兵第一連隊の一部人員で編成。沖縄県・上海・台湾で輸送任務を実施。1945年5月13日、釜山へ向かう途中で触雷。船を失った兵員は高射砲陣地の構築に取り掛かる。竹子島（山口県）にて終戦。

・機動輸送第七中隊

広島で編成。沖縄県・基隆（台湾）間やルソン（比）などで輸送任務などを実施。1944年12月17日、櫛ヶ浜機動輸送隊補充隊のもとへ訪れる。国内を転々としつつ、萩にて終戦。

・機動輸送第十一中隊

広島で編成。1944年5月28日に櫛ヶ浜に訪れた後、沖縄県、中国を経て門司（福岡県）にて終戦。

・機動輸送第十二中隊

広島で編成。1944年5月10日に一部を広島に残して櫛ヶ浜に移駐。硫黄島（東京都）、朝鮮、台湾を経たのち呉空襲にて戦闘。門司にて終戦。

・機動輸送第十三中隊

広島で編成。1944年5月10日に櫛ヶ浜へ移駐。マニラのサンフェルナンド港（比）を経て、門司（福岡県）にて終戦。

・機動輸送第十四中隊

広島で編成。1944年に南大東島（沖縄県）にて輸送作戦を実施。台湾を経て、北サンフェルナンド上陸（比）。同年12月18日には櫛ヶ浜機動輸送隊補充隊のもとで欠員を補充し待機。翌年からは対馬及び壱岐方面の輸送作戦を実施。1945年、萩（山口県）にて一時停戦ののち、8月22日以降は邦人や傷痍軍人の引き揚げに従事。

・機動輸送第一六中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。日本水域での船舶輸送作戦に参加したのち、櫛ヶ浜で終戦。

・機動輸送第一七中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。二度のレイテ島（比）への補給作戦へ参加。しかし、1945年1月2日からは艇を損失。最終的にバキオ（比）とタルラック（比）で終戦。

・機動輸送第一八中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。兵装・特殊工事のため国内を転々しつとも、大阪にて終戦。

・機動輸送第一九中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成、日本水域での船舶輸送作戦に参加したのち、函館（北海道）で終戦。

・機動輸送第二〇中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。従事任務は同上。相生（兵庫県）にて終戦。

・機動輸送第二一中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。沖縄県、台湾、中国を経たのち、日本にて軍需資材の輸送に従事。米戦闘機との戦闘を経つつ、門司（福岡県）で終戦。

・機動輸送第二二中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。中国に到着後、軍需品の輸送等に従事。幾度もの対空戦闘を経て、櫛ヶ浜にて終戦。

・機動輸送第二四中隊

1944年10月26日、櫛ヶ浜にて編成。博多港・釜山間を航海したのち、七尾港（石川県）にて終戦。

・機動輸送第二五中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。日本水域での船舶輸送作戦に参加したのち、宮津（京都府）で終戦。

・機動輸送第二六中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。従事任務は同上。尾道（広島県）にて終戦。

・機動輸送第二七中隊

1944年10月28日、徳山市櫛ヶ浜機動輸送補充隊にて編成。翌年より、釜山・門司港の緊急輸送、日本水域での船舶輸送作戦に参加したのち、宮津（京都府）で終戦。

・機動輸送第二八中隊

1944年10月26日、櫛ヶ浜にて編成。人数103名。兵員の教育を実施。宮津（京都府）にて終戦。

・機動輸送第二九中隊

1944年10月28日、櫛ヶ浜にて編成。人数103名。翌年から日本水域での船舶輸送作戦に参加したのち、博多（福岡県）で終戦。

・機動輸送第三〇中隊

1944年10月28日、広島にて編成。同時に機動輸送補充隊長の指揮下に入る。日本水域船舶輸送作戦に従事。博多（福岡県）にて終戦。

・海上輸送第十四大隊

1945年2月20日、櫛ヶ浜にて編成。門司（福岡県）にて終戦。

・海上輸送第十五大隊

1945年2月20日、海上駆逐隊補充隊の一部人員を基幹に編成。後に別部隊へ吸収され、多数の犠牲を出しつつ沖縄県にて停戦。

・海上輸送第十六大隊

1945年3月20日、櫛ヶ浜にて編成。朝鮮半島との輸送業務に従事。門司（福岡県）にて終戦。

・海上輸送第十七大隊

1945年4月20日も櫛ヶ浜で編成。任務・終戦時の位置は上記同様。

・海上輸送第十八大隊

1945年4月20日に櫛ヶ浜で編成。任務は上記同様。下関にて終戦。

・海上輸送第十九大隊

1945年5月30日、櫛ヶ浜海上駆逐隊補充隊において臨時編成完結。瀬戸内海東部における輸送作戦に従事したのち、常石（広島県）にて終戦。

・海上輸送第二十大隊

1945年5月20日、櫛ヶ浜海上駆逐隊補充隊において臨時編成完結。瀬戸内海西部における輸送業務に従事。宇ノ島（福岡県）にて終戦。

・船舶工兵第三連隊補充隊

1944年11月20日、一部が海上駆逐隊補充隊に編入される。

・第六七碇泊場司令部

1945年1月3日、徳山海上駆逐隊と徳山機動輸送大隊から転属した兵員で編成。蘇州（中国）を中心とする船舶輸送任務を担うと同時に湘桂反転作戦（光号作戦）の準備を進めるも、蘇州にて終戦を迎えた。

※余談であるが、前述した史料「船舶司令部人員編成表」によると、機動輸送中隊の編成人員は機動輸送第一～十五中隊までが総員 87 名が基本であるのに対し、機動輸送第十六中隊からは総員 103 名が基本となっている記録が見つかったこと（創設時は総員 87 名であったが、昭和 19 年に入り、兵が 16 名増員されている）から、なんらかの装備や編成が更新されたのではないかとみられる。

また、『暁部隊』（防衛研究所所蔵）より山口県徳山市には「陸軍船舶練習船」という部隊？が存在していたようである。本部隊の兵団文字符・通称番号の解読は難しかったが、「暁一六七一一」（機動輸送隊補充隊のもの）もしくは「暁一六七二」であった。これが櫛ヶ浜基地と関係しているかは分からないが、基地に関係している可能性が否定しきれないため、紹介しておく。なお、この部隊の詳細は不明。機動輸送隊補充隊のことを指しているだけの可能性もある。

同史料には山口県下松市大字末武南に「暁一一」（部隊名不明）という部隊が存在していることも記してある。この部隊も比較的、櫛ヶ浜基地と距離が近く、関係がある可能性が考えられる。ただ、「暁一一」という通称番号を持つ部隊は確認されていないので、おおかた記載ミスであろう。

また、山口県文書館に収められている『部隊一覧表』という史料より、櫛ヶ浜基地を補充基地として指定している部隊が多数確認された。この表にある部隊の全てがこの地で編成された部隊ではないが、欠員などが出た場合は櫛ヶ浜基地に駐屯するふたつの部隊の人員から補填していたようだ。この表からも櫛ヶ浜基地が船舶部隊の教育・補充拠点として重要な役割を持っていたことが分かる。名簿は以下に示す。

ただし、戦後の混乱による間違いが混ざっている可能性もある上、筆者が見落としている部隊もあるかもしれないので、参考として見ていただきたい（実際に同史料における船舶工兵第一連隊補充隊に関する記述は、他史料と矛盾する点がみられる）。

なお、図中の「暁 16711」は機動輸送隊補充隊、「暁 16712」は海上駆逐隊補充隊を表す。

図 3：山口県文書館所蔵史料の『部隊一覧表』

(※櫛ヶ浜基地と関係するものを一部抜粋した。部隊名などはすべて原文ママ)

兵団文字符・通称番号	部隊名	編成年月日	補充担当部隊
灣 2952	第 11 船舶團司令部	1943.10.10	暁 16712
威 6172	船舶工兵第 4 連隊	1942.8.31	暁 16712
威 1750	船舶工兵第 11 連隊	1942.11.24	暁 16712
威 6176	船舶工兵第 15 連隊	1944.1.10	暁 16712
威 16700	船舶工兵第 16 連隊	1944.3.17	暁 16712
輝 6189	海上輸送第 2 大隊	1943.5.15	暁 16712
威 6190	海上輸送第 3 大隊	1943.6.30	暁 16712
暁 19814	海上輸送第 12 大隊	1945.1.19 または 2.6	暁 16712
暁 19815	海上輸送第 13 大隊	1945.1.19 または 2.6	暁 16712
暁 19816	海上輸送第 14 大隊	1945.2.20	暁 16712
灣 19817	海上輸送第 15 大隊	1945.2.20	暁 16712
暁 19818	海上輸送第 16 大隊	1945.3.20	暁 16712
暁 19819	海上輸送第 17 大隊	1945.3.20	暁 16712
暁 19820	海上輸送第 18 大隊	1945.3.20	暁 16712
暁 19833	海上輸送第 19 大隊	1945.3.16	暁 16712
暁 19834	海上輸送第 20 大隊	1945.3.16	暁 16712
暁 16707	高速輸送第 1 大隊	1944.1.8	暁 16712
暁 16706	第 1 機動輸送隊本部	1943.12.18	暁 16711
暁 16766	第 2 機動輸送隊本部	1944.8.3	暁 16711
暁 16725	機動輸送第 1 中隊	1943.12.1	暁 16711
暁 16726	機動輸送第 2 中隊	1943.12.1	暁 16711
暁 16727	機動輸送第 3 中隊	1943.12.1	暁 16711

曉 16728	機動輸送第 4 中隊	1943.12.1	曉 16711
曉 16729	機動輸送第 5 中隊	1943.12.1	曉 16711
曉 16730	機動輸送第 6 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16731	機動輸送第 7 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16732	機動輸送第 8 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16788	機動輸送第 9 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16734	機動輸送第 10 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16735	機動輸送第 11 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16736	機動輸送第 12 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16737	機動輸送第 13 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16738	機動輸送第 14 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16739	機動輸送第 15 中隊	1944.3.30	曉 16711
曉 16762	機動輸送第 16 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16763	機動輸送第 17 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16764	機動輸送第 18 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16765	機動輸送第 19 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16766	機動輸送第 20 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16767	機動輸送第 21 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16768	機動輸送第 22 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16769	機動輸送第 23 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16770	機動輸送第 24 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16771	機動輸送第 25 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16772	機動輸送第 26 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16773	機動輸送第 27 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16774	機動輸送第 28 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16775	機動輸送第 29 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16776	機動輸送第 30 中隊	1944.10.28	曉 16711
曉 16708	海上驅逐第 1 大隊	1943.12.28	曉 16711
(41A) 16742	病院船衛生第 24 班	1944.7.30	曉 16712
尚武 19774	病院船衛生第 32 班	1944.11.20	曉 16712
威 6150	第 10 揚陸隊	1943.6.30	曉 16712
輝 6154	第 11 揚陸隊	1943.5.30	曉 16712

(41A) 19794	特設陸上勤務第 144 中隊	1944.12.5	暁 16712
(41A) 19795	特設陸上勤務第 145 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19796	特設陸上勤務第 146 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19797	特設陸上勤務第 147 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19798	特設陸上勤務第 148 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19799	特設陸上勤務第 149 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19800	特設陸上勤務第 150 中隊	1944.12.5	暁 16711
尚武 19801	特設陸上勤務第 151 中隊	1944.12.5	暁 16711

※各部隊の解説（防衛研究所所蔵『陸軍船舶部隊の参考』より要約）

船舶團司令部・・・船舶工兵・揚陸隊などの船舶部隊が行う上陸作戦・局地輸送を指揮する部隊。

船舶工兵連隊・・・大発動艇・小発動艇を使用して上陸部隊の上陸・軍需物資の揚陸、水路輸送・局地輸送・隠密輸送を実施した部隊。

海上輸送大隊・・・機帆船や漁船を使用して局地輸送を実施した部隊。なお、船員は別に存在している。

機動輸送隊本部・・・史料に解説はないが、機動輸送中隊をはじめとする輸送部隊を指揮した部隊であった。

高速輸送大隊・・・高速輸送船を使用し、最前線での輸送を実施した部隊。

機動輸送中隊・・・機動艇（SS艇）を操縦して上陸・輸送を実施した部隊。

海上駆逐大隊・・・軍事海運地の出入口を防護するため、敵潜水艦への攻撃を実施した部隊。

病院船衛生班・・・病院戦に乗船し、患者輸送の診療看護に任じた。

揚陸隊・・・水上・陸上・建築勤務中隊の任務を併せて担う部隊。敵からの攻撃が激しい地域では、この部隊が栈橋などの施設を作ったりした。

特設陸上勤務中隊・・・「特設」陸上勤務中隊の解説史料はないが、陸上勤務中隊は船舶輸送司令部や支部、碇泊場司令部などに配属させられ、主に物資の揚陸などを実施した部隊。

米軍史料からの補足

アメリカのアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリには『Japanese recruiting and replacement system, July 1945. (1945年7月の日本の募兵および補充制度)』という史料が保存されている。これは米陸軍が作成した日本陸軍部隊の補充制度、師団管区および軍務管区、駐屯地、駐屯地の名称について解説したものである。

この史料には、上記の図3に登場した部隊に加え、「船舶工兵第24連隊」・「船舶工兵第32連隊」・「第9揚陸隊」が榑ヶ浜基地を「home station（補充基地）」にしていたと記録されていた。

もっともこれは、太平洋戦争中の米軍の史料である。彼らは当時、限られた情報しか使用できなかったことから、この記述が間違っている可能性は高い。実際、この史料に記述されていない部隊は数多く、完全なものとはいえない。とはいえ、これもまた榑ヶ浜基地と他の部隊との関わりを示す重要なものなので、この場で提示しておく。



参考 E：九州南岸沖 2 マイル地点で空襲される日本海軍の魚雷艇（4 月 23 日米軍撮影。1945 年の写真と推定）

国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。



参考 F：朝鮮半島沖で攻撃を受ける日本軍輸送船（時期不明。米軍撮影）

国立国会図書館デジタルコレクション所蔵『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins（共同情報週刊速報）』より引用。

第四章 櫛ヶ浜基地の戦後

●櫛ヶ浜基地の最期

太平洋戦争時には、陸軍船舶部隊の重要拠点であった櫛ヶ浜基地だったが、敗戦によりその機能を停止。海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊に所属していた隊員らは郷里へと帰っていった。そして残された建物も戦後すぐにあっけなく解体され、基地の物品は大半が民間に引き渡されることとなる。

この引き渡しの有様は山口県文書館が所蔵する『土地建物関係綴③』・『主要品目報告一件』・『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第1号』・『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第2号』・『兵器処理関係綴』・『兵器処理関係綴2』・『特殊物件払下雑件綴 雑ノ3』、『完結原議綴（器具ノ部・軽機械ノ部・雑品など多数）』など多くの史料に記録が残されている。

これら史料によると膨大な数の被服や毛布などが放出され、燃料・資材や舟艇は復興のために官民へ引き渡された。その反面、ダイナマイトなどの爆薬をはじめとする危険物は海の底へと沈められた。日本発送電社の事例のように、民間より貸与された物品の一部は占領軍に接收され、戦後しばらく返還されなかったというケースも確認できる。

施設もさまざまな場所へ転用されることとなる。兵舎は一時的に戦災者住宅に転用。ある建物は県立下松高女校舎や山口県立徳山工業学校長へ払い下げられ、またあるものは海員宿泊所などといった具合で、それぞれの建物や品物には第二の役割が与えられることになった。

残った基地の跡地は最終的に中国財務局徳山管財出張所・農林省開拓課の管理下におかれるか、塩田へ転用されてしまうという末路を辿った。そのため、建築物は跡形もなくなり、基地に関するものはすべて無くなった（写真13・14）（『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第1号』・『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第2号』・全国モーターボート競走施行者協議会1970）。

ところが、そんなこの地に更なる転機が舞い込む。その「転機」とは、ボートレース場誘致の運動である。当時の徳山市（現周南市）は戦災復興事業を進めていたものの、巨額の資金が必要であったため、予算の問題で事業は難航していた。そこで1951年ごろにボートレース場を誘致、その収入を事業費用に組み込むという案が可決され、推進される。この運動は上手く行き、1953年より基地跡は周南市徳山モーターボート競走場（BOAT RACE 徳山）に姿を変えたのである（徳山市史編纂委員会1985）。

櫛ヶ浜基地は、戦時中は輸送という面で陰から多くの日本軍将兵を支え、戦後はボートレース場として活用されることで徳山の復興を陰から支えたのだ。そして今日、この基地跡では戦うためではなく、人々を楽しませるために艇が疾駆している（写真15）。

さて、現在の二葉屋開作地を一見すると、この地に残る戦争の痕跡は時代の流れに呑まれ、消滅してしまったように見えるかもしれない。

だが、旧基地敷地内にはかろうじて、基地が造られたころより存在していた池が残っている。（現住所は山口県周南市栗屋1025-1）が、これがなぜ今も残されているのか、そもそも何のために設けられたのかは分からない。工業団地として開発された際、工業用水の汲み取り・排出場所として設けられたのだろうか、あるいは堀川に係る運河の設備だったのだろうか。現在、分かっている唯一の情報としては、米軍の航空写真（写真2）で栈橋らしきものが確認できるということぐらいである。

ちなみに、『主要品目報告一件』では被服や毛布・救命胴衣などに加えて、「戦車帽」・「戦車眼鏡」

の名前が見える。とはいえ、この部隊に戦車があった記録はみられない（後述する鈴木惣太郎氏の証言では基地にて「戦車のキャタピラ」に地雷をつけたり、爆雷を戦車に取り付ける訓練を行っていたようであるが、訓練で実際に戦車を用いていたかどうかは不明）。おそらく、これらは装甲艇の砲手が使用していたのであろうと推測する。

また、この隊が保有し、戦後放出したものの中に毛布があるが、これに関しては寝具とは別の方法でも活用がされた可能性がある。

というのも、私が偶然知り合った人に麻生敏治という方がいる。同氏の父親は船舶兵特別幹部候補生として香川県小豆島での訓練を受けたのち、陸軍輸送潜水艦における通信の教育を受けていた際に終戦を迎えたそうである。同氏は、「大発動艇のエンジンはバスのものだった」・「皆が船酔いして鉄兜（ヘルメット）へ嘔吐したところ、教官にそれを食べと言われた」・「昭和20年、春ごろに弾薬庫警備をしているとき、桜に見とれてしまっていたところを将校に見つかり、叱責されそうになった」・「営倉に入れられた戦友を助けた」・「終戦後、今まで出なかった銀シャリやサバの味噌煮が一週間連続で出てきたものの、次第に飽きてしまった」・「みかんを食べ終わると、朝鮮人の用務員？たちが皮を集めて食べていた」等の話を父親より伝え聞いていたそうだ。その中で、「舟艇を操作する訓練をする際に、操縦席の前に毛布を立て、前方が見えない状態で指示の通りに前進や旋回をして、視界のきかない暗闇でも正確に艇を操れるようにした」というお話を伺った。このエピソードは小豆島（香川県）の船舶幹部候補生隊あたりの話だと推測されるが、もしかするとこの基地でも似たような訓練が行われたかもしれない。

余談であるが、山口県文書館所蔵の『船舶関係綴』・『船舶関係雑件綴』・『旧軍船舶関係綴』・『海汲物件引揚一件』などの史料から、当時の櫛ヶ浜基地近辺には大量の舟艇が沈没していたことや、基地が面する笠戸湾に櫛ヶ浜の船舶部隊だけでなく海軍など、あらゆる部隊の保有していた軍用品や兵器が海中投棄されたことが読み取れる。これらは後に再びスクラップとして引き揚げ、資源として活用されたり、修理して再利用するために保管されたことが示されている。



写真 13：太華山から見た戦後の櫛ヶ浜基地跡（1945年頃撮影、撮影者不明）

手前が基地跡である。栈橋・スベリ跡と無数の戦災者住宅などと思わしき建物が見えるが、兵舎などの建物はほぼ消滅している。一大軍事拠点であったということがもはや幻のようだ。

画像は『目で見える徳山・下松・光・新南陽の100年』（郷土出版社1998）より引用。



写真 14：高度 4724mより撮影された櫛ヶ浜基地跡（1947 年 3 月 11 日米軍撮影）

一部の建物や棧橋などの設備以外はもう何も残っていない。基地跡の手前の水田に見えるのは米軍によって投下された爆弾の痕と思われる。

画像は国土地理院地図・空中写真撮影サービスより引用。



写真 15：現在の生まれ変わった櫛ヶ浜基地跡（2025 年 5 月 10 日時点のもの）

Google マップを利用してみるとボートレース場の他、公園なども造られているのが分かる。それでも、池や土地の輪郭を見てみると基地の面影が残っている。

画像は Google マップ（2025 年 5 月 10 日閲覧）より引用。

● 櫛浜地区に残る戦争遺構

現在櫛ヶ浜基地の遺構に関しては前述したとおり、ほとんど残っていない。とはいえ、櫛ヶ浜基地の対岸にあたる綱敷天神鳥居周辺には船舶部隊の関係遺構らしき2つの壕が確認できる（写真16・17）。

許可を取った上で調査したところ、両者とも細長くなっているのが特徴であり、素掘りということと、最深部に削岩機（ドリル）の掘削痕が残ることが共通点として挙げられる。未完のままで終戦を迎えたとみられる。

片方（便宜上、A壕と呼称）の壕は直線状に掘られていた。現在は民間の方に倉庫として活用されており、内部には何も確認できなかった。

一方、もう片方の壕（便宜上、B壕と呼称）の内部には当時のものとみられる設備などが設置されていた。この壕は開口部が崩落しているものの、内部には設備跡が残っており、保存状態は比較的良好である。

内部に残っているものとしては、パイプ穴が設けられたコンクリート製の水槽・二本の鉄柱・コンクリート製土台が挙げられる。奥部からは木片やポンプらしきもの、碍子・配線等の電気製品などの遺物も見つかった。ただし、不法投棄の物品の量も多く、誤解を招くような品物も多い。

その一例として、竹本電機計器製作所（1936年より軍事目的の計測器を生産していた企業）によって1948年以降に作られたとみられる電流計の目盛りや、生産時期不明の日立製作所製抵抗器（破損・汚損により詳細不明）の銘板が発見されている（例に漏れず、この会社も軍需品を生産していた）ことが挙げられる。

そのため、年季の入った不法投棄の品と戦時中の遺物の判断をすることは難しく、下手をすれば誤った答えを導き出しかねない。壕内の物品から壕の目的を推測するのは控えた方がよいだろう。

遺物に関する情報はここまでにして、B壕の話を開きさせていただこう。

壁面は素掘りであるが、床面だけはモルタルあるいはセメント張りとなっている。また、パイプあるいは土管（水道管もしくは電線用とみられる）らしき円筒が床面中央に埋設されていることが確認できた。天井には電線や電球を設置するためと思わしき鉄釘二本が確認できるが、壁面に光源などを設置できるような窪みは確認できなかった。内部の形状は「凸」字と表現するのが一番適切であろう（図4）。入り口の幅が2.7m程度なのに対して、奥はいきなり広くなり、幅が5.6m程度になる。

ここまで説明したが、A・B壕ともに使用目的は不明である。特にB壕は皆目見当がつかない。

当初、舟艇整備用の壕と考えたが、開口部の幅が狭く船舶用には適さない上、内部に艇を入れる際に利用するレール痕も見られない。また、史料から大型の加工機械が櫛ヶ浜基地に多数あったことから、機械を退避させた壕とも考えてみた。だが、限られた数の機械をちまちま防空壕に格納するのは非効率ということ、史料の地図から見られる工場は十分な面積を有していたため、加工機械を格納するにはもっと面積が必要だと考えられるなど、こちらの仮説にも問題がある。

その後、筆者が調べてみたところ、旧陸海軍の陣地・基地では地下に発電機を設置しており電力を賄えるようにしている事例が存在するほか、県内にいた他の船舶部隊が発電機を所有していたことを見つけた（山口県文書館『完結原議綴 発電機・変圧器・充電器』）。

よって筆者は現在、B壕は櫛ヶ浜基地に提供する電気に関係していた壕ではないかと推定している（ただし、同基地より発電機が引き渡された記録は今のところ確認できない。もしかすると壕内部の台座に固定化してしまったから引き渡しができなかったのではないかと筆者は考える）。

また、内部に設置された水槽に関しては消火水槽か冷却水を貯めたものと思われる。水槽の側面に

はパイプ穴が設けられ、そのそばにはポンプと思わしき機械や鉄製品の残骸が放置されていた。

近隣住民の方より、「A 壕は兵隊が削岩機（ドリル）で掘っていた」という旨の証言を頂いたものの、着工時期・完成したのか・使用されたか等の情報は全く出てこない。ただ、内部の状況からおそらく 1945 年初頭ごろから掘削されはじめたと推定できる。

とはいえ、前述した 1945 年 6 月 15 日より海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊は日本放送電社より、削岩機 8 本などをはじめとした壕掘削に必要な土木工事用機械を受け取っている（山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』）。もしかすると、1945 年初頭ではなく 6 月ごろから工事が開始されたのかもしれない。とはいえ、櫛ヶ浜船舶部隊も自前の工事器具を持っていた可能性も否定できないので、これは推測にすぎない。

床の舗装・パイプの埋設、水槽などまで併設されているところを見ると、他の壕と比べ重要度の高い設備が秘匿されたとみてよいだろう。

余談であるが、先ほど述べた通り、基地跡周辺には当時から残る池や堀川が残存している。堀川は陸軍船の通行路であり、上陸用舟艇の係留地でもあった。今後ここから当時の遺物が出土する可能性があるのではないかと期待される。

図 4：各壕の形状（単位は m・基本的に高さ・幅の数値は壕口のものを使用。数値は 2021 年時のもの）

壕名	高さ	幅	奥行き
A 壕	2	2.2	18
B 壕	2.1	手前 2.7 奥 5.6	19



写真 16：倉庫として活用中の A 壕（2021 年筆者撮影）

現在は私有地のため立ち入りには許可が必要。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。



写真 17：B 壕の入口部から内部を見る（2021 年筆者撮影）

岩石や詳細不明の鉄材・不法投棄されたゴミを除去すれば新しい事実が分かるかもしれない。また、天井・壁面が整形されておらず、粗削りである部分にも注目。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。



写真 18 : B 壕奥部の様子 (2021 年筆者撮影)

左の水槽のそばに筆者のリュックサックが映りこんでしまっていることは許していただきたい。右部には少しばかり空間があるが、床面が舗装されていること以外、特筆することはない。機械か備品を設置する空間だったのだろうか。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。



写真 19 : 手前から見たコンクリート製の台座 (2023 年 8 月 27 日筆者撮影 ※明るさ調整済み)

台座はタテヨコ 280×70 cm の長方形で、壕の奥に設置されていた。上には部品などが転がる。



写真 20：台座の上面に残っていた機械痕（2023年8月27日筆者撮影 ※明るさ調整済み）



写真 21：壕の中間部にて撮影した設備痕（2023年8月27日筆者撮影 ※明るさ調整済み）

床の左端に埋め込まれている何かの設備痕。木材と鉄を組み合わせている。この痕はタテヨコ 240×70 cmの大きさで、壁際に沿って設置されていた。これとは別に、直径 60cm・深さ 15cm（砂利等で埋没）程度の円形の穴があげられている箇所も発見された。これはどうも坑木痕ではないように見えるが、詳細は不明である。

もし、内部に入る際は設備痕を安易に触らないでいただきたい。これらの遺構は少しの衝撃で崩壊する可能性があるからだ。

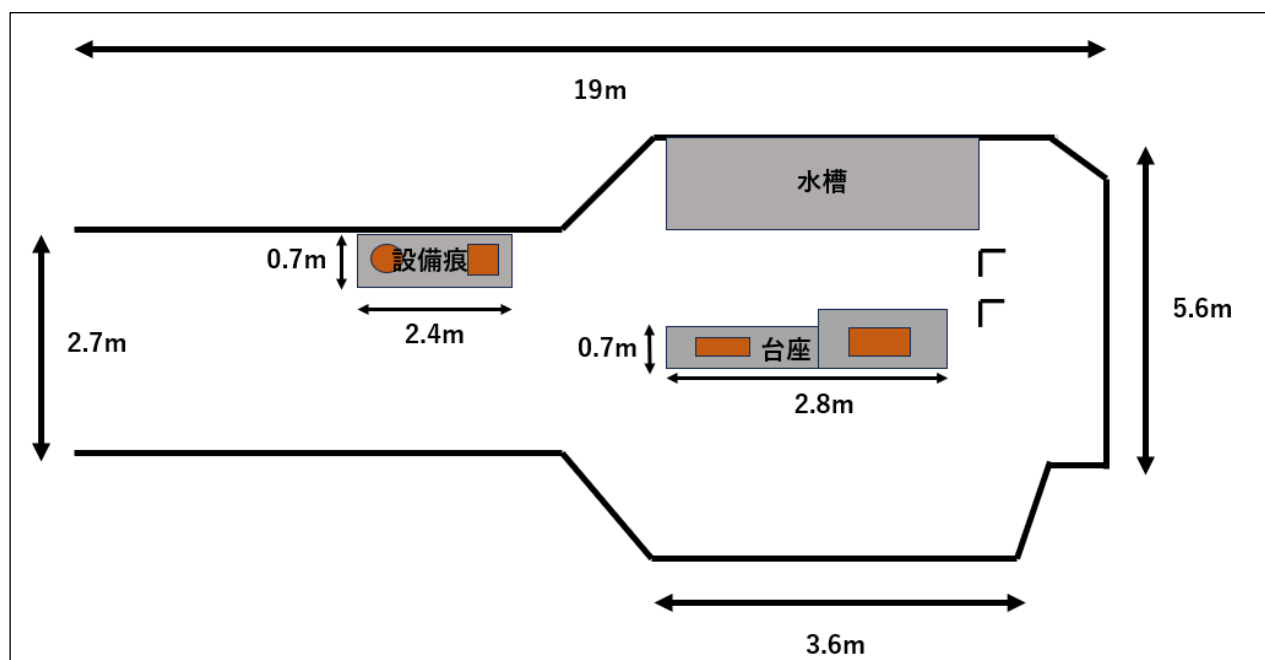


図 5：B 壕内部簡略図（筆者作成。2023 年の調査で作成したもの）

数値は「m」。レーザー距離計で導き出した数値。「L」と書いている部分は鉄柱である。茶色部分はくぼみや、なんらかの設備が固定されたり、埋設された痕跡が残る場所である。

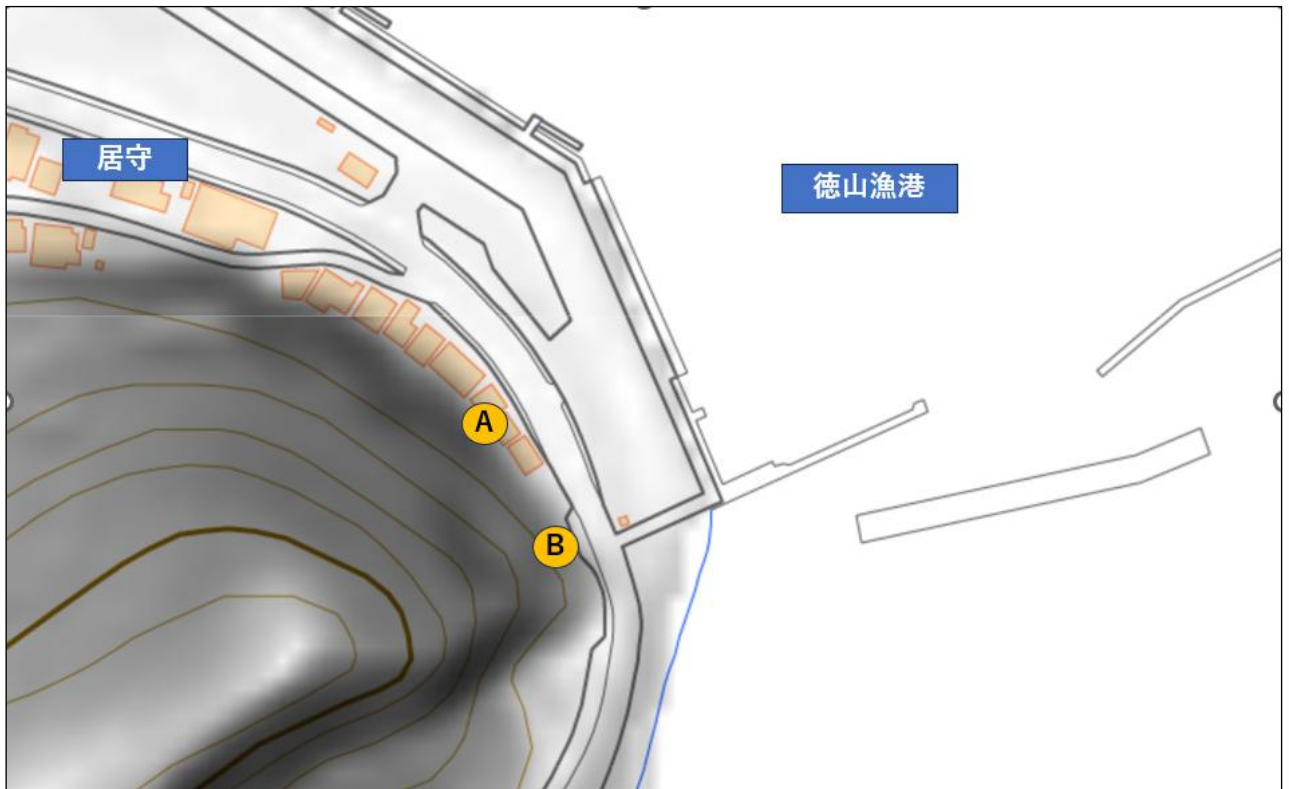


図6：各壕の大まかな配置（国土地理院の地図サービスを元に筆者が編集）
これらの壕は徳山ポートレースの対岸である徳山漁港周辺に位置している。

●笠戸島の陸軍船舶部隊と戦争遺構

櫛ヶ浜基地の船舶兵は、対岸に位置する笠戸島（下松市）にも進出していた。彼らが駐屯した地域は、確認できる範囲では2か所であり、場所は本浦国民学校（本浦地区）と深浦国民学校（深浦地区）のふたつである。

笠戸島で生まれ育った土本氏曰く、兵たちは風呂や睡眠のため近隣の民家で過ごしていたとのことである。

同氏の調査により、本浦地区では「松の根を掘っていた。」「兵士が松を切っていた。木は牛に引かせて東風浦や白浜の海岸に落としたのち、筏として組まれ、どこかへ運ばれていった。」「寄宿していた兵士が山からキイチゴを取ってきてくれた。」という証言が見つかった。土本氏のご実家には、当時の船舶部隊の兵士が使用した行李（荷物入れ）が残っているだけでなく、当時寄宿していた兵隊が夜中の空襲で二階から枕を抱えて飛び降りたという話も残っている。深浦地区でも「坑木となる木を伐採していた。」「作業中の兵士をからかったら怒られた。」「深浦国民学校の行事には軍人が来賓として並んでいた。」という旨の証言を得られたところであった（土本 2025）。

『深浦小学校 110 年史』では、深浦地区に駐屯した兵士らの集合写真（写真 22）が掲載されているだけに留まらず、訓練を見ていたという卒業生の思い出のほか、兵士からの寄稿文までも掲載されている。

回顧録『紅の血は燃えて』などには、兵士と笠戸島に関する記載が残っている。どうやら彼らは舟艇で櫛ヶ浜から移動してきたのち、この地で舟艇の隠蔽作業や陣地の設営を行ったようだ。ただし、具体的な作業の内容や場所は記されていない。また、「幕舎生活」という言葉が見られることから櫛ヶ浜より居住用のテントが持ち込まれたことが窺える。ただし、テントをどこで使用したかは不明である。

同書にて、ある兵士は 1945 年 8 月 10 日より作業を行った（作業自体はそれより前から進行していた可能性が高い）と記しているほか、『船舶関係雑件綴』より、1945 年 6 月 15 日には海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊が日本発送電社からコンプレッサー・削岩機等の土木工事機械をまとまった数受け取って利用していることが分かる。さらに、特別幹部候補生隊（香川県）では岡山空襲後（1945 年 6 月 29 日）から舟艇（大発動艇）の秘匿を始めている（岡上 1978）。

このことから、本地域の壕も 1945 年 6 月前後ごろから作業が開始されたものと推測される。

一方、三章にて使用した史料『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』には、笠戸島に海上駆逐隊補充隊所属の木製大発動艇が保管されていた記録が残る。その内訳は、古島に大破 1 隻、大浦に大破 1 隻、深浦に大破 1 隻・中破 1 隻の計 2 隻、本深浦に大破 2 隻・使用不能 1 隻・小破 2 隻の計 5 隻となっている（地名原文ママ）。前述した通り、この史料に載っている艇の大半は戦後移動させられたものであるが、破損している艇が保管されている場所は部隊が駐屯していた場所であるという傾向があるため、これらの土地に木製大発動艇が配備され、兵士らも駐屯していた可能性が高い。

他の史料にも類似した記載があり、山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』のうち『笠戸島及下松附近船舶調査』でも、所属部隊は記されていないものの、同様の記載がある。本史料のなかにある『旧軍所属船舶配分表』では、地図が掲載されており、笠戸島の各地や対岸の大島・下松などの場所にも艇が放棄されていることを示す地図が確認できる。特に現在の深浦地区には木製大発動艇が集中していた。

繰り返しになるが、山口県文書館所蔵『船舶仮保管一件』に同封されている『軍用舟艇借用ニ関スル件』には、「笠戸島西海岸鼻線に使用者不明の木製大発動艇が漂着し、擱座した」という旨の記録が

確認できたため、笠戸島の旧軍舟艇の中には戦後移動してきた舟艇も存在していたようだ。また、「下松暁部隊」という部隊が小発動艇を所有していた記録や、笠戸島町内会が海上駆逐隊補充隊所属の小発動艇を所有していた記録も残る。以上のことから、櫛ヶ浜の船舶部隊が船舶を伴って下松方面で展開したのは確実だと見ることができるだろう。

ここからは、笠戸島の本浦地区および、小深浦・深浦地区に残る遺構を紹介しよう。なお、島内には崩落して消滅した・あるいは未発見の遺構が残存している可能性がある。さらに付言するなら、紹介する壕の床面は砂やゴミに埋まっているものも多く、これらを除去することで新たな発見があるかもしれない。

ただし、無闇な発掘は埋没していた遺物や遺構を傷つける結果につながる可能性もあるので、よく考えて行わなければならないだろう。もちろん、これらの壕も入坑の際には所有者（市役所）への許可と十分な装備が必要なのは言うまでもない。



写真 22：『深浦小学校百十年誌』に掲載された深浦国民学校における船舶部隊兵士の集合写真(撮影時期不明)

背後には当時の国民学校校舎のほか、天皇の写真である御真影を保管する奉安殿らしきものがみられる。

『行李は語る』（土本 2024）内の画像を引用。もとは『深浦小学校百十年誌』に掲載されていたもの。

●本浦地区に残る戦争遺構

本項では笠戸島北西部に位置する本浦地区にある2つの壕を説明させていただく。

『下松地方史研究 第43号』（下松地方史研究会2006）によると、笠戸国民学校には1945年4月28日より陸軍船舶部隊が駐屯しており、海岸沿いには現在も船舶秘匿用とみられる壕が残されている。

うち一つは通称「はなぐり岩」（写真23）と呼ばれており、2000年に笠戸本浦自治会により作成された観光看板には「舟艇秘匿のために陸軍が掘り広げた」と紹介されている。ただし、こちらは潮が満ちると接近が困難な上、はなぐり岩の記述が江戸時代の文献『防長風土注進案』や『防長地下上申』等にみられることから、自然に形成されたものであり、軍によって掘削されたわけではないと考えられるとのご意見を土本氏より頂いた。この説が正しければ、自然に形成された穴を陸軍が戦時中に拡張して、現在の「はなぐり岩」が誕生したと考えられる。

もう一つ（写真24。便宜上、C壕と呼称）は座礁したコンクリート船の付近に存在している。これは砂浜から歩いて入坑可能である。おそらく、こちらも何かしらの舟艇を秘匿するために掘削されたのであろう。双方ともに終戦時までには完成していたようである。壕の構築は船舶部隊がこの地に訪れた1945年4月末～5月初頭ごとに始まったと推定される。

この近辺には大発動艇が大破していたと記す史料がある（山口県文書館所蔵『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』）。この史料にある大破した艇の位置は部隊の駐屯した位置である傾向があることから、これらの壕はこの地域で利用する大発動艇を隠匿する目的で作られたのではないかと筆者は推測した。とはいえ、あまりにも高さの数値が低すぎるので、格納は困難に思える。

もしかすると、より小型の舟艇や物品を秘匿するためのものなのだろうか。壕内に砂が堆積した影響で高さの数値が低くなってしまっただけかもしれない。

壕の形状自体はマルレや震洋とよばれる特攻用モーターボートを秘匿するための壕のサイズに近い（「マルレ」と「震洋」については次の章で説明させていただく）。

が、それにしても壕の長さが短すぎる。筆者の目ではこの壕を奥に掘り進めようとした痕も見つけれない。また、これら特攻基地で見られる本部跡や壕掘削を担う基地隊・設営隊が同地へ進出したという記録も見られぬ。そもそも、ここが特攻基地とすれば壕の本数が少なすぎる。

山口県文書館所蔵の『参議院特殊物件視察調書』という史料では「笠戸嵐部隊」（「笠戸突撃隊」あるいは「ウ九三一」との呼称も存在）と呼ばれる特攻部隊の所在地が笠戸島北部になっていることから、一時期はこの部隊の関係遺構なのだろうかとも推測した（笠戸嵐部隊の呼称に関しては、防衛研究所所蔵『昭16～20 在外海軍官衙部隊一覧表』のうち、『特設回航班～海龍隊』より引用）。

だが、その可能性は現時点ではかなり低いと言わざるを得ない。これが所有する海龍という特殊潜航艇（小型の潜水艦）を秘匿する壕は周南市大島に作られているという事実が土本氏らにより丹念に収集された証言と、防衛研究所所蔵史料『山口県引渡目録』から証明されているからだ。また、『参議院特殊物件視察調書』に提示されていた地域へ筆者が赴いてもそれらしきものは見えなかったため、何らかの手違いであると思われる。

とはいえ、その関係施設であるという可能性を完全否定する証拠が見つかっていないのもまた事実だ。

とどのつまり、現時点では結論を出すことができないのである。真相究明のためには、更なる史料調査と今後の調査が求められるだろう。

図7：各壕の形状（単位は m・基本的に高さ・幅の数値は壕口のものを使用。数値は 2021 年時のもの。「不可」は諸事情で計測できなかったもの）

壕名	高さ	幅	奥行き
はなぐり岩	3.6m	4 m	不可（潮により精密な測定不能）
C壕	1.6m	4.7m	9.6m



写真 23：はなぐり岩の写真（2023 年 8 月 27 日筆者撮影）

潮の満ち引きによって壕に接近できたり、できなくなったりするため、現地に訪れる際は注意が必要。また、壁面・天井部・床面のどこにも掘削痕等の作業痕が確認できない。壕の形状は直線状である。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。

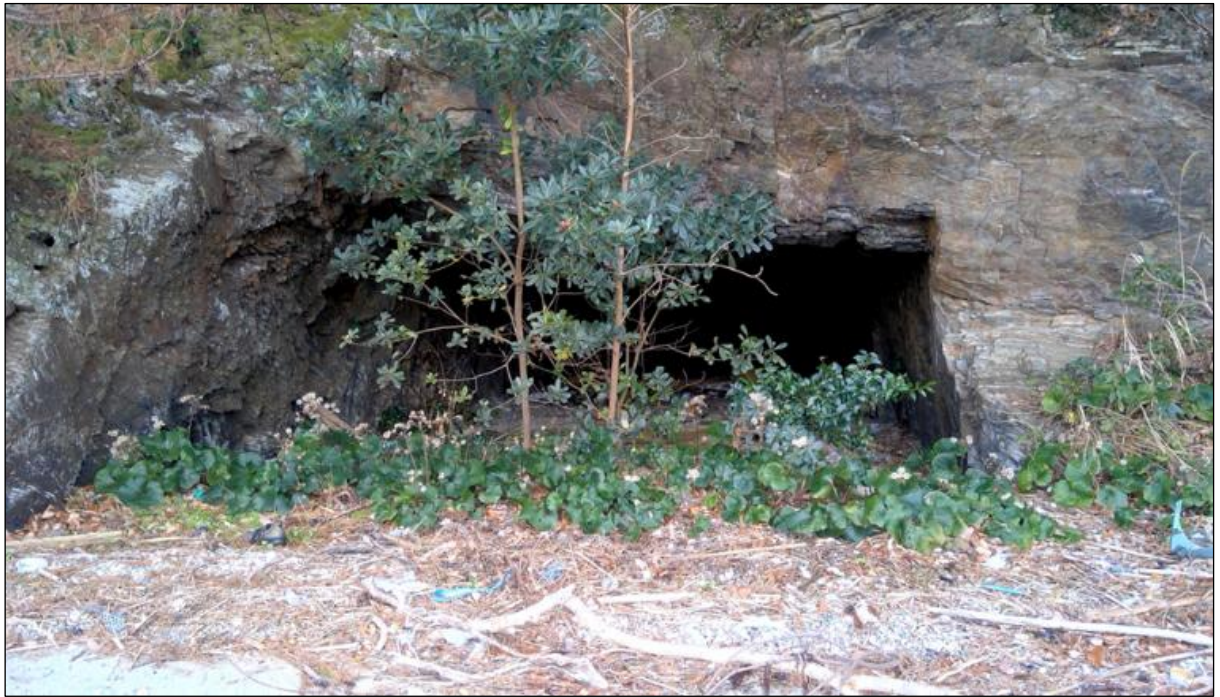


写真 24：C 壕の写真（2021 年筆者撮影）

壁面は整えられている印象を受けた。ほぼ完成～完成状態で終戦を迎えたとみられる。砂で埋まっている床部から新たな発見ができる可能性がある。壕の形状は直線状である。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。



図 8：各壕の大まかな配置（国土地理院の地図サービスを元に筆者が編集）

C 壕は、戦時中のコンクリート製被曳航輸送船周辺に位置。周辺は草が繁茂しているため、今回取り扱った遺構以外にも見落としている箇所があるかもしれない。また、はなぐり岩を近くで見学する際には、はなぐり海水浴場の沿岸部から進むことをお勧めする。余談であるが、周辺には物資輸送用トンネル（トロッコを使用）とされるトンネルも設置されている。遺構との関係性は不明。

●深浦・小深浦地区に残る戦争遺構

続いて、笠戸島南部の深浦・小深浦地区に残る遺構群について紹介させていただく。

『深浦小学校百十年誌』や『下松地方史研究 第43号』によると、この地では、1945年から陸軍船舶部隊が深浦国民学校へ駐屯を開始した。兵士たちは小学校や各家庭に泊まり込んだようであり、西ヶ浴には兵士の食事を作る場所があったようだ。1944年に同校を卒業した生徒が、二つの教室が兵の宿舎として使われていたことや朝夕の訓練を側で見ていたことを同書の中で語っている。また、西ヶ浴の食事を作る場所めがけて爆弾が落とされたこともあったようだが、幸い畑が崩れるのみで済んだ。

この地域では、筆者による調査で海岸沿いに8個の直線状の壕とドッグ跡（写真25・26・27）が確認できたほか、土本氏の調査にてこれに加え3つの掘削中とみられる壕が確認されている（図11）。付近では崩落している箇所も存在したため、確認できずに潰れてしまった壕がある可能性もある。

これらの壕は横幅が狭く奥行きが短いもの・横幅が広く奥行きが短いもの・横幅が狭く奥行きが長いものの3つに分類が可能であり、壕のなかには天然の地形を利用したものもあるとみられる。どれも直線であり、内部に設備の痕跡などはないが、⑧壕の床面に柱の痕跡が確認された。この壕は開口部周辺に複数の柱痕（坑木跡と推定）が集中していた。③壕の入り口手前には、地面にめり込んだ鉄製の何かを確認できるが、これは壕と関係があるかは不明なので、画像での紹介はしない。

壕のほとんどは掘削途中で放棄されたようであるものの、④・⑥壕は完成していたとように見える。この2つは他の壕と比較して壁面の凸凹具合が少なく綺麗なことから、整形が施されているようだ。とはいえ、大半の壕が未完のまま終戦を迎えたことが窺える。工事自体は部隊が深浦・小深浦地区へ移駐してきた1945年ごろから始められたのではないかと考えられる。

また、⑧壕の形状から、壕の掘削はベンチカット方式（岩盤の斜面が階段状になるように削っていく工法。トンネルの掘削断面を上と下の半分ずつに分け、上半分から掘削）で行われたと推定される。

2021年度に行った聞き取り調査では、深浦地区の地元住民の方などからこの壕は「軍が船を隠すために作った」という旨の証言を得ると同時に、「レールが敷設されていたものの、戦後の鉄不足の際に剥ぎ取られた」というお話を伺った。海上駆逐隊補充隊がレールを民間に引き渡した記録（山口県文書館所蔵「特殊物件原議台帳」※昭和21年）が山口県文書館にて見つかったため、同部隊が駐屯していた地域でレールが使用されていたという話は十分に考えられることである。

一般的に考えれば、舟艇を壕内に格納する際に使用したと考えられるが、壕の掘削時に発生した瓦礫を搬出する目的で設置された可能性も否めない。レールの幅が分かれば、ある程度の予測ができるが、レールの痕跡は見つけることができないため、現状レールの使用目的は不明である。

土本氏らによる取材では、⑧壕の掘削作業に参加した兵士の岡田勝一郎氏（櫛ヶ浜陸軍船舶部隊所属）の遺族より、兵士は「何のための壕か分からず、ただ命令により掘削した」という旨の証言を得ることができた。同氏らの調査により⑧壕付近の遺構が上陸用舟艇用の修理ドッグであると判明した。

一部の壕は砂浜より1段上の場所に位置する一方、多くの壕は潮が満ちた際に接近することが困難となる。ただし、「箱棧橋」なるものを櫛ヶ浜機動輸送隊が所有していた記録（山口県文書館所蔵『特殊物件原議台帳』※昭和21年）が残っていることを参考にすると、棧橋のようなものを設置するか、小道を造る予定があったのではないかと考えられる。

例に漏れず、肝心のこれらの壕の用途も不明である。

土本氏らはこの地域の壕群を本土決戦によって作られた海上特攻艇「マルレ」あるいは「震洋」を秘匿したものと推定している。この説の解説をする前に、ふたつの特攻艇についての説明を軽くさせていただく。

「マルレ」というのは日本陸軍船舶部隊で使用された兵器であり、船尾に爆雷（水中で爆発する兵器）を搭載したモーターボートである（写真 31）。敵艦に接近し爆雷を投下することで、敵艦を爆沈させようと企図して設計された。基本は1人で運用されるが、史料や写真によっては2～3人乗っているケースも見られた。正式名称は「四式肉薄攻撃艇」。これらの兵器は陸軍海上挺進戦隊という特攻部隊によって運用され、彼らには陸軍海上挺進基地大隊が同行した（松原・遠藤 1996）。1個戦隊には100隻ほどが配備され、基地隊を含むと、人員は総員1000人程度に膨れ上がった（木俣 1998）。

なお、ネット上などでは一部の方が、本兵器は乗組員が脱出することを元に設計したため特攻艇ではないと主張されているのを目にした。実際、フィリピンで戦った陸軍海上挺進第十二・十五戦隊が実施した米軍艦艇への攻撃では、少数ながらも搭乗員が生存している記録が残っている（木俣 1998・儀同 2003）。とはいえ、ここでは執筆の都合上「特攻艇」として扱わせていただく。どうかご理解いただきたい。

一方、日本海軍は「震洋」という兵器を使用した（写真 32）。これはモーターボートの船首に爆薬を仕込み、文字通り敵艦に突っ込むという特攻兵器である。本兵器は基本的に1人で運用されるが、場合によっては2名で運用された。

この兵器を使用する震洋隊には、50隻程度（一型の場合）あるいは、25隻程度程度（五型の場合）の震洋が配備されていた。また配備された震洋も船首に爆薬を詰め込んだもの（一型）を基本とし、ロケット弾のついたもの（一型改）・ロケット弾と機銃を搭載したもの（五型）などさまざまな武装のバリエーションが見られる。一型の震洋を使用する部隊の場合、1個震洋隊は基地隊や整備など諸々含めて191名程度の規模であった（木俣 1998）。

これらの水上特攻兵器は運用にあたって、敵から発見されないようにするための秘匿壕が掘削された。沖縄県をはじめとする全国各地には現在でも秘匿壕が残っている。土本氏らは笠戸島の壕もそのうちのひとつであると考えている。

それでは、大まかな兵器の説明が終わったところで、笠戸島の壕について考えてみよう。

同氏らがこれらの壕を水上特攻基地とする根拠は、海岸沿いに設置された壕の大半が特攻艇秘匿壕であるという傾向があること・笠戸島の周囲に点在した特攻部隊との関係が考えられること・下松や徳山が軍事的に重要な地域であったということが根拠となっている。

こう言われてみれば、確かに笠戸島の壕を水上特攻基地の遺構とみることはおかしいことではないかもしれない。だが、筆者はこの説にいくつかの問題・懐疑点を持っている。なので、本書ではこの説に関する問題点を共有させていただこう。

第一に、「部隊の性格に関する問題」である。これはマルレ秘匿壕説にのみ生ずる問題であるが、櫛ヶ浜の船舶部隊の性格は前述した通り、兵士へ船舶に関する訓練の実施や輸送要員の補充を担う「教育」である。そんなところにいきなり「攻撃」を担う特攻部隊が設置されるだろうか。

仮にそれに関する施設を設置するとして、笠戸島・櫛ヶ浜のどこに施設を設置するのか。記録にはないが、戦争末期は海上輸送の状況が悪化し、より人員を必要としていたことで、櫛ヶ浜基地の人員はさらに増していたと考えられる。それにも関わらず、新たな部隊や施設を設置する余裕があるのだろうか。また、マルレに関する教育は既に「第十教育隊」（広島県）に担われていたほか、櫛ヶ浜基地で特攻訓練が行われた記録はない。マルレの教育施設を拡充する計画があったとしても、まず第十教

育隊やその近辺の地域で行われる可能性が高いだろう。

第二に、「島内における艇・部隊配備に関する問題」である。山口県内におけるマルレの配備記録は確認されていない。県内はおろか笠戸島において、基地設置のために海上挺進戦隊やその関係部隊（海上挺進基地大隊）の行動があったという史料も未だ発見できていない。

そもそも海上挺進戦隊の擁するマルレは100隻前後・震洋隊の場合は25～50隻前後である（木俣1998）。これらを格納し、膨大な人員を収容することが、笠戸島の一区域にできるだろうか。さらにいえば、当時、九州南部や四国などが連合軍上陸予想地点とされていた。たしかに戦時下の下松・徳山沿岸部は軍事的に重要な土地であったが、上陸予想地点を差し置いてまで、笠戸島に水上特攻部隊を優先配備する必要があっただろうか。

震洋の方は、江の浦（下関）付近にて第六七震洋隊の存在が確認できた（木俣1998）。当時の史料からは防衛研究所所蔵史料『12. 海軍の軍備並びに戦備の全貌 其の5 昭和26年8月調製 13. 海軍の軍備並びに戦備の全貌 其の6 昭和27年3月調製』のうち『第2節第5項 本土決戦の水上水中特攻戦力の編制並びに配備』と『山口県引渡目録』より、県内での配備・配備計画があったことが確認された。

本艇は計画で終わった県内の一部特攻部隊に配備される予定だったほか、光嵐部隊（光基地・大津島分遣隊）・平生嵐撃隊などの特殊潜航艇を擁する特攻部隊（同時に訓練も実施していた部隊でもあった）も実際に震洋を所有した状態で終戦を迎えていた。ただし、阿多田資料館曰く、この艇は訓練の補助に使われたという話である。また震洋もマルレと同様、戦後の笠戸島で接收された記録はない。

笠戸島に最も近い笠戸嵐部隊（笠戸突撃隊）は海龍のみを所有した状態で終戦を迎えていることが、先ほど使用した2点の史料より明らかになっている（防衛研究所所蔵史料『12. 海軍の軍備並びに戦備の全貌 其の5 昭和26年8月調製 13. 海軍の軍備並びに戦備の全貌 其の6 昭和27年3月調製』・『山口県引渡目録』）。

ただ、訓練を担当しているわけではない笠戸嵐部隊が震洋を所有する予定があったかどうかは不明である。

そもそも本部隊の施設は前述した通り、笠戸島の対岸の大島にある。大島半島と笠戸島では移動などの面で不便が多すぎるのではないだろうか。『第2節第5項 本土決戦の水上水中特攻戦力の編制並びに配備』においても、笠戸島に震洋配備の記載は見られない。とはいえ、『日本特攻艇戦史』（木俣1998）では、突撃隊は震洋隊も指揮下においていることなどが記されていることには留意していただきたい。

第三に、「遺構の問題」である。マルレ基地や震洋基地跡には本部やスベリ（艇を海上へ運び出す際に使用する斜面）などの周辺施設が確認でき、地域住民からそれに関する証言も聞くことができる。笠戸島においてはそれらの存在が確認されていない。更にこれらの基地跡に大発動艇用のドッグがあったという報告例を筆者は確認できなかった。

壕そのものについても深浦・小深浦地区の壕群は、他の一般的な震洋隊・海上挺進戦隊の秘匿壕と比べ、数が少ない・一部の壕は高さが高く、幅が広いだけでなく、全体的に奥行きが短すぎるという問題がある。ただし、北九州に残るマルレ秘匿壕の中には本地域に残る壕よりも大きなものも見られた為、壕の大きさは関係ないのかもしれない（前薮2024）。

そして第四に、「掘削者の問題」である。マルレ基地は海上挺進基地大隊によって構築されるのが基本だ。例外的に朝鮮人労働者で構成された建設隊や現地住民等が掘削したという記録が沖縄県では見られるほか、一般の海上挺進基地第三大隊と陸軍船舶部隊（詳細不明）が掘削したという荷川取海

岸秘匿壕群の事例が確認できるも、これはごく少数のレアケースだと思われる（環境省沖縄奄美自然環境事務所 2021・沖縄県立埋蔵文化財センター2005）。

震洋基地についても基本、海軍の設営隊という建設隊が設置することが多い。設営隊が笠戸島に駐屯していた記録は確認できなかつたし、そもそもこの壕が櫛ヶ浜の船舶部隊によって作られたのは明らかだ。沖縄県では震洋秘匿壕を震洋隊隊員自身が掘ったというケース（NHK アーカイブス 2009）が確認できる。戦士叢書によると、陸軍海上挺進戦隊は基地設定や訓練を海軍の震洋隊と協働して行うとされていたほか、出撃時は海軍魚雷艇部隊が誘導するなど、部隊運用は海軍との協働作戦が予定されていたという。これを証明するものとして、静岡県の子特攻基地の事例が挙げられる。本基地にて第一岡崎航空隊と陸軍船舶部隊（詳細不明）が震洋秘匿壕を掘削したという記録が西伊豆町子地域振興協議会により 2001 年 3 月に設置された案内板より確認できるが、陸軍船舶兵単体が震洋秘匿壕を掘ったという事例は確認できない。

また、いくら戦争末期といえども、特攻とは無関係の一般の船舶部隊が単体で水上特攻部隊のための秘匿壕を掘削するというのは、設営隊やわざわざ創設した海上挺進基地大隊の存在意義がほぼ消滅してしまい、部隊運用の面からみて非常に非効率的である。櫛ヶ浜基地の兵士たちも所属する部隊のための防空壕掘りなどで忙殺されているのに、他部隊へ手を貸す余裕があるだろうか。限られた物資と人員を最大限効果的に使わなければならない戦局の最中、非効率的なことが行われるとは考えられないと筆者は考える。

以上が土本氏らの説とそれに対する疑問点である。これに対し筆者は、この壕は海上駆逐隊補充隊が保有する大発動艇などの上陸用舟艇を格納するための秘匿壕ではないかと考える。

海上駆逐隊補充隊所属の大発動艇が本地域にまとまって配備された可能性を示す史料（山口県文書館所蔵『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』・『船舶関係雑件綴』）が発見されたことに加え、ニューギニアのラバウルに残る上陸用舟艇用の壕（写真 33・34）や、広島県の忠海地域（船舶工兵第九連隊補充隊）に残る上陸用舟艇秘匿のために掘削したとみられる壕（写真 35）が、当地区の壕と形状が類似している（④・⑥壕などは一般的な水上特攻艇秘匿壕よりもこれら上陸用舟艇秘匿壕の方にサイズが近い）というのが、本説の根拠である。

さらに、同じく大発動艇を所有していた陸軍船舶部隊の駐屯する香川県の小豆島でも、本艇を空襲から守るために壕を掘削していたという記録が残る（岡上 1978）。

上陸用舟艇の壕には、壕内に海水を流入させる等の様々な格納方法が存在しているようであるが、証言からこの壕ではレールを使って格納したのではないかとみられる。もちろん、この地域の壕の全てが艇を格納するためものではなく、一部は人員や物資を防護・秘匿するためのものであろう。

ただ、こちらの説にも多少問題があることをお伝えしなければいけない。

仮に上陸用舟艇秘匿壕だった場合、岡田勝一郎氏の「何のための壕か分からず、ただ命令により掘削した。」という証言はどうなるだろう。上陸用舟艇を秘匿する程度の壕の存在を機密にする必要はあるだろうか。

追加の参考として、上陸用舟艇を漁船に擬態させたり、葉を重ねて隠蔽した事例があり、秘匿にあたっては必ずしも壕を掘る必要はなかったことも付け加えておく（NHK アーカイブス 2016・岡村千秋 2021・平和祈念展示資料館『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編） 第 8 巻』うち『船舶部隊の戦陣回想』）。

また、防衛研究所に所蔵されている海軍が作成した指導書『小舟艇用掩体構築法 昭和 19 年 10 月 20 日』のうち『第 1 章 要旨 第 2 章 掩体位置の選定 第 3 章 種別並に構築要領』には、上

陸用舟艇秘匿壕（大発動艇）の最小の大きさは、高・幅ともに4.5m、奥行きは大発動艇の場合一隻当たり17m、震洋の場合は約8mとある。もちろん実戦において、もっと言えば陸軍がこれをそっくりそのまま適用したわけではないだろうが、笠戸島の壕が上記の数値に近いとは言い難い。特に高さについてはこれが顕著である。また、工事途中や崩落があるとはいえ、大発動艇を格納するためには件の壕の大きさは微妙であると言わざるを得ない。

さらに言えば、震洋隊に大発が配備されるケースもある。仮に大発動艇が格納できそうな壕があるからといって、すべてが大発動艇を格納する壕だと安易に判断するのは間違いだ。実際に、防衛研究所には『舟艇引渡目録 第102 震洋隊』という史料が保管されているが、それには震洋・大発動艇の両者を洞窟に格納したと記されている。他にも笠戸島から遠く離れるが、父島（東京都）では震洋隊基地跡に上陸用舟艇秘匿壕が残存している（小笠原村教育委員会2002）。前述した史料の『第1章 要旨 第2章 掩体位置の選定 第3章 種別並に構築要領』における同史料の附表でも、名称が「大発」となっているものの、諸元から小発動艇や十三米特型運貨船（通称「中発」）とみられる艇のデータが掲載されていた。これは大発動艇以外の舟艇も壕に秘匿することも視野に入れていたということだろう。従って、壕に収容する艇やこの地で使われた舟艇を1種類に決めつけて推測するのは的外れかもしれない。

どちらの説も問題点も挙げていけばキリはないが、兎角こちらの戦跡も更なる調査が必要なのは言うまでもない。今後、この遺構も様々な方面からのアプローチが必要になるであろう。

補足であるが、今回紹介したこれらの壕の多くはドリルや爆薬を使って掘削したのち、手作業で整形等を施して製作されたと思われる。

その根拠としては戦後、櫛ヶ浜の船舶部隊がダイナマイト・鉋山爆薬などの火薬を所有していた記録（山口県文書館所蔵『特殊物件原議台帳』※昭和21年・『特殊物件払下雑件綴 雑ノ3』）と、石工ノミ・ドリル・タガネ・片手ハンマーなどを所有していた記録（山口県文書館所蔵『完結原議綴 器具』）に加え、海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊は日本発送電社より削岩機など壕掘削に必要な土木工用機械の供出を受けている（山口県文書館所蔵『船舶関係雑件綴』）ことが挙げられる。また、山口県文書館所蔵の『放出物資完結原議綴5ノ3』によると暁部隊（所属不明）が下松市にショベル・じょれん・つるはしを譲渡していることも確認されており、この暁部隊は笠戸島か櫛ヶ浜に駐屯した部隊を指すのではないかと推察される。

実際に②壕内部や③壕手前に削岩機痕らしき穴（写真36）が確認されるほか、⑧壕に小さいが人為的に開けられた穴（写真37）が確認できたほか、壁面が整形されたと思わしき壕があることが挙げられる。確認できた穴には、爆薬設置用のものもあるかもしれないが、現段階では予想の範疇を出ない。

この章の最後に、現在の深浦中学校付近に砲台が存在したという現地の方からの証言を紹介させていただこう。

筆者はこの話を聞いた当初、大変失礼ながらこの証言の真偽を疑っていた。しかし、山口県文書館所蔵の『軍需品払下関係綴』内にある『議案第67号』にはその砲台を指していると思わしき記述が確認できた。この議案は『笠戸防空砲台建物使用の件』というタイトルであり、深浦中学校が跡地を校舎として使用したことが記されている。

また、『若潮三期の絆』（「船舶特幹第三期生の記録」編集委員会1995）によると、「砲台作りのため櫛ヶ浜から笠戸島へ渡ったものの、岩石を積み重ねた塹壕のようなものが一か所あるだけだった。」という旨の記載がある。この地に駐屯した櫛ヶ浜船舶部隊の隊員らは砲台を建設することも計画していたようであるが、結局工事はほとんどしないまま、終戦を迎えたのであろう。

図9：各壕の形状（単位は m・基本的に高さ・幅の数値は壕口のものを使用。数値は2021年時のもの。「不可」は諸事情で計測できなかったもの）

壕	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
高さ	不可	4.1	2.8	2.2	3.4	3.2	不可	3.2
幅	2.3	3.1	2.6	4.9	3.4	5.1	2.8	4.0
奥行き	8.1	19	12	11	15	9.6	6.8	7.7

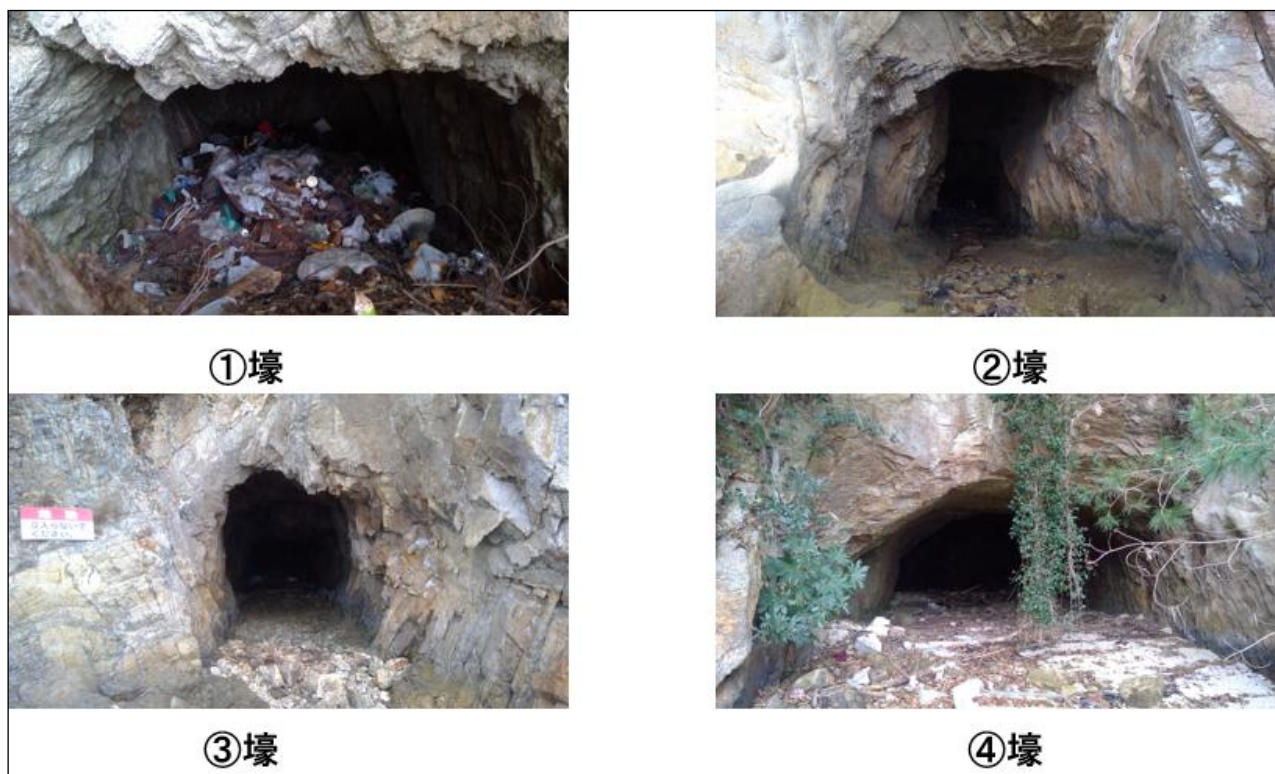


写真 25：①～④壕の写真（2021年筆者撮影）

一部壕は砂やゴミの堆積により底部が確認できなかつたり、内部に入れない。これらを除くすれば、新たな事実が判明するかもしれない。

（2021年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用）



⑤壕



⑥壕



⑦壕



⑧壕

写真 26：⑤～⑧壕の写真（2021 年筆者撮影）

一部壕は砂やゴミの堆積により底部が確認できなかつたり、内部に入れない。これらを除くすれば、新たな事実が判明するかもしれない。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。

図 10：各壕の大まかな配置（国土地理院の地図サービスを元に筆者が編集）



図 11：土本氏らが発見した各壕の大まかな配置（国土地理院の地図サービスを元に筆者が編集）
確認された壕と思わしきものは3か所。編集の都合上イ・ロ・ハで表示した。これらの壕について、個別のデータは頂けなかったため、詳細は不明である。筆者が引用元より写真を確認する限りでは、掘削しはじめたものの、すぐに放棄した様に見える。
位置は『行李は語る』（土本 2024）より引用。

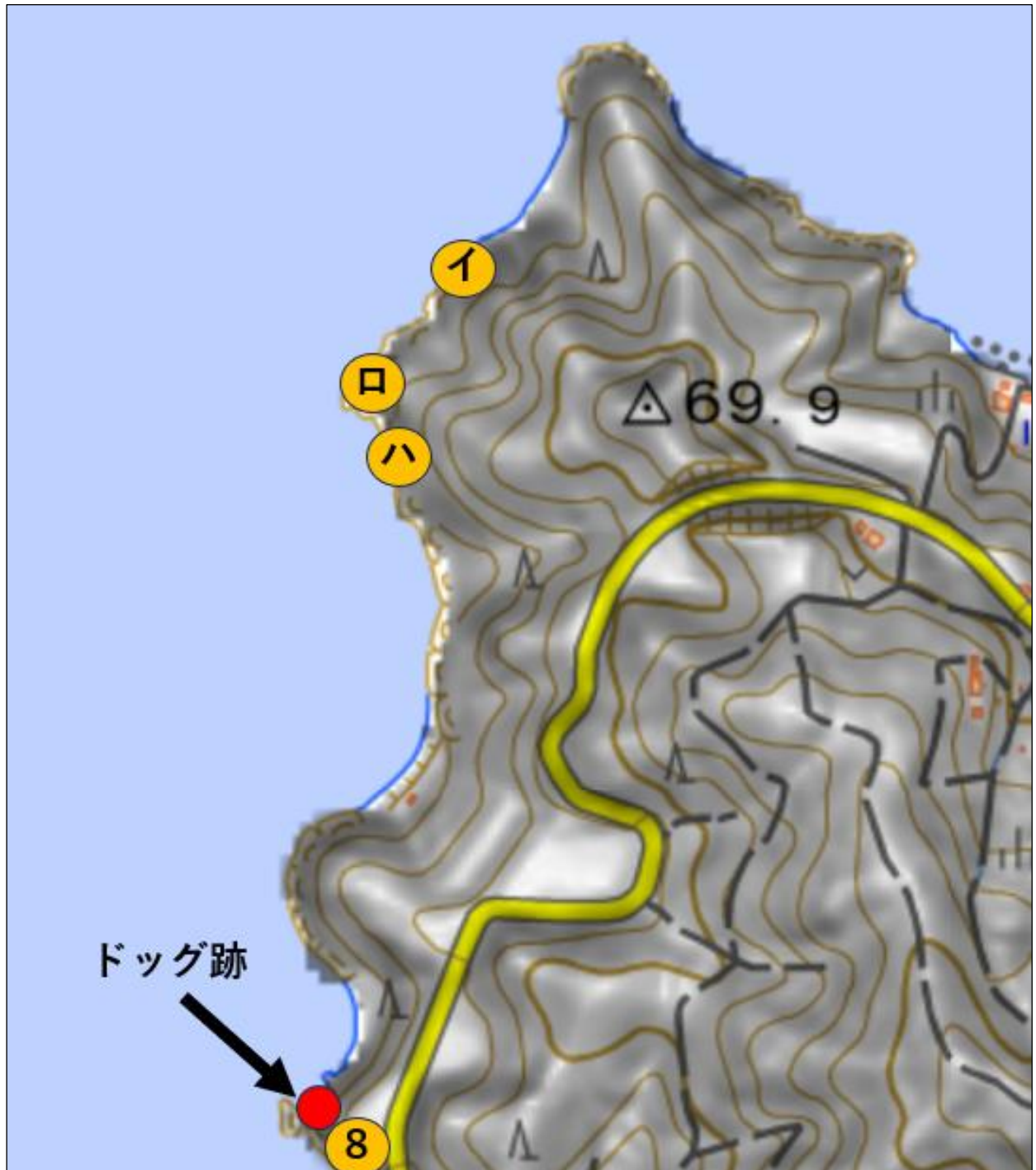




写真 27：上陸用舟艇用のドック跡（2021 年筆者撮影）

上陸用舟艇（大発動艇と）の修理用ドックとされている本遺構は幅 4.4m、左右壁面の高さ 1.6m、長さ 17m（土本氏らの調査結果）。

この建築物は木筋コンクリートであることが判明した（写真 28）。両壁の上面には 20cm 程度の穴が一直線に何個も空けられている。カモフラージュ用の屋根か何かを設置していたのかもしれない。場所によっては使用されている砕石やその密度が異なる（写真 29）。また、この遺構の真裏の岩には人為的に削られた跡らしきものが残っている（写真 30）。

そのため、コンクリートの粗骨材として使われた砕石や鉄筋の代替として利用された木材の一部は、現地で採集された・工事の際に発生したものを転用した可能性が考えられる。

2021 年度山口大学中高生研究発表会にて筆者が利用したスライドより引用。



写真 28：別角度から撮影したドック跡の一部（2023年8月27日筆者撮影）

劣化した木筋が露出しているのが分かる。また、壁面に柱の穴が見えるが、この穴の中にも朽ちた木材が残っていることが確認された。

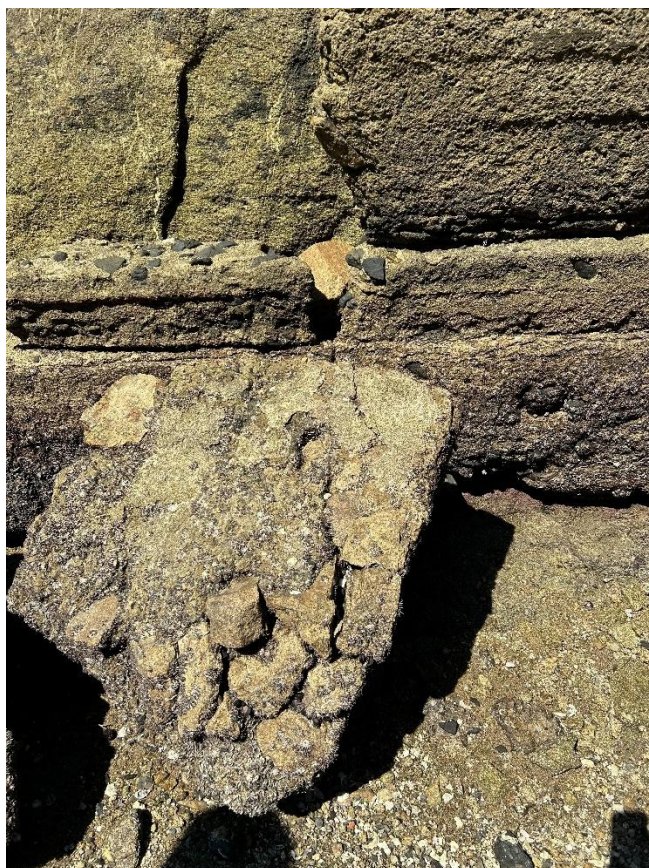


写真 29：ドック跡の崩落した箇所（2023 年 8 月 27 日筆者撮影）

部分ごとによって粗骨材として利用されている碎石の密度が異なっていることが窺える。うち、大きい碎石は壕などの掘削で生じた碎石の再利用か、この地で採集されたものと筆者は推測する。

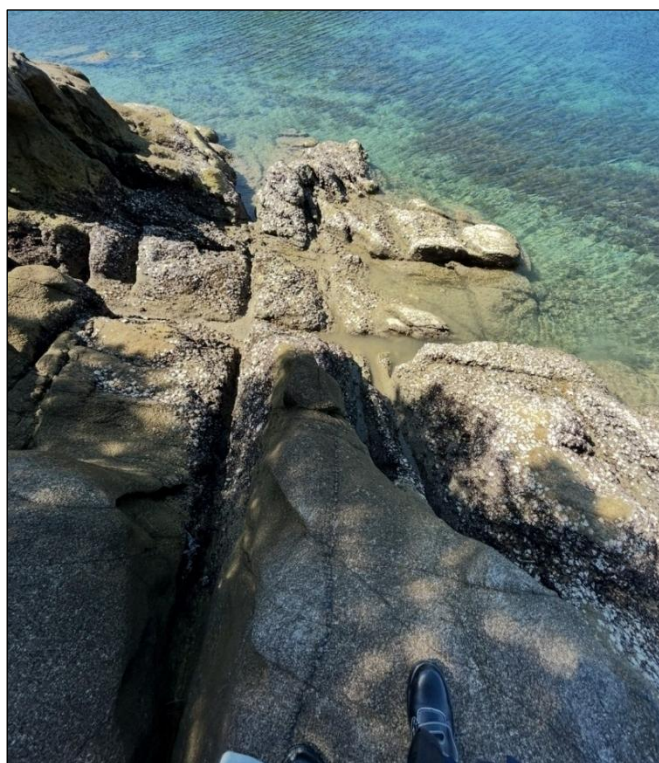


写真 30：ドック跡裏に残る岩を削った痕跡らしきもの（2023 年 8 月 27 日筆者撮影）

ドック建設で利用した碎石の一部はここで採集されたのではないかと筆者は予想するが、実態は不明。

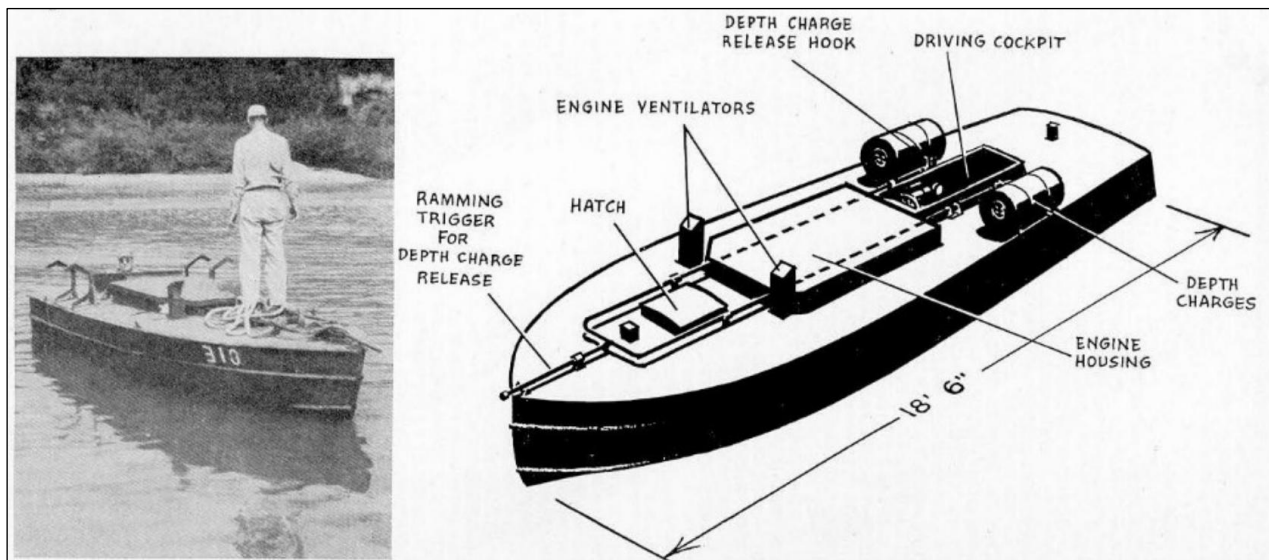


写真 31：米軍報告書に掲載されたマルレとそれを調査する兵士の写真と図面（左の写真は撮影年次不明）

掲載されているのは、左右に 120 kg爆雷を搭載する甲一型のマルレである。ただし写真では爆雷は外されている。

画像はアイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館デジタルライブラリ所蔵『ONI 208-J Supplement No. 2 Far-Eastern Small Craft (ONI 208-J 補足第 2 号 極東小型船艇)』より引用。



写真 32：搬出された震洋（沖縄県にて 1945 年米軍撮影）

画像の場合は台車で搬出するタイプであった。船尾には発射器が見える。奥には不鮮明ながら秘匿壕とそれを眺める米兵の姿が見える。

画像は『Intelligence joint: Joint Intelligence weekly bulletins (共同情報週刊速報)』（国立国会図書館デジタルコレクション所蔵）



写真 33：戦後、ラバウル（パプアニューギニア）において撮影された上陸用舟艇秘匿壕（1945年10月4日豪軍撮影）

秘匿壕から大発動艇と小発動艇と思わしき上陸用舟艇3隻が地上に引き出されているのも確認できる。見えにくいかもしれないが、右壕の前をトラックが走行している様子が写っている。

解説には「ラバウル、ニューブリテン。1945年10月4日。ブランシュ湾岸の崖側面に掘られた日本軍の艇用トンネル」とある。（※この場における「艇」は上陸用舟艇を指す。）

トラックについては不明であるが、筆者の根拠のない推測を述べさせていただくと、日本陸軍によって運用されたトラックが鹵獲されたものだろう。トラックの車高（2m程度と推測）を基準として考えると、右・中央の壕の高さはおおよそ4～5m程度、左の壕の高さは3～4m程度ではないだろうか。

画像はオーストラリア戦争記念館所蔵写真『RABAUL, NEW BRITAIN. 1945-10-04. JAPANESE BARGE TUNNELS IN THE SIDE OF CLIFFS ON THE SHORE OF BLANCHE BAY.（日本語訳：ラバウル、ニューブリテン、1945年10月4日。海岸の崖の側面にある日本軍の艇トンネル。）』より引用。



写真 34：戦後、ラバウル（パプアニューギニア）において撮影されたカラビア湾の海岸に停泊する大発動艇と舟艇秘匿壕らしきトンネル（1945年12月1日豪軍撮影）

大発動艇が4隻ほど写っている。奥には舟艇用の秘匿壕らしきものが確認できる。

解説には「ラバウル、ニューブリテン、1945年12月1日。カラビア湾の海岸に停泊する日本軍の船とトンネル。トンネルは連合軍の空襲から身を守るため、日本軍によって掘られた。」とある。このトンネルは舟艇秘匿壕の可能性は高いものの、実際には人員や物資など他のものを退避させるものだったかもしれない。

画像はオーストラリア戦争記念館所蔵写真『JAPANESE BARGES AND TUNNELS ON THE FORESHORE OF KARAVIA BAY. THE TUNNELS, WERE DUG BY THE JAPANESE AS A PROTECTION AGAINST ALLIED AIR ATTACK. (日本語訳：カラビア湾の海岸沿いにある日本軍の艇とトンネル。これらのトンネルは、連合軍の空襲からの防護のために日本軍によって掘られたものである。)]より引用。



写真 35：広島県竹原市忠海に残る上陸用舟艇秘匿壕（2023年12月17日筆者撮影）

船舶工兵第九連隊補充隊が1945年に忠海（広島県）に移動してから建設していたものとみられる。構築途中で放棄されたようだ。

地元住民の証言を基に推測すると、上陸用舟艇を秘匿するための壕であると考えられる。同地域には物資を隠匿するための壕も存在していたとされる。

格納壕とみられるものは2つ確認された。一方は壕内部が段差上になっており、手前部分と奥の部分の高さが異なる。高さ4.3m（手前部）～2.3m（奥部）、幅5.8m、奥行き7.8m。もう一方は高さ3.5m、幅6m、奥行き3.8m（崩落後の数値、崩落直前の推測値は8.3m）である。壕口は前者が角張った□型の反面、後者も□型ではあるが、角が少し丸みを帯びていた。

証言や遺構の状況から、壕はダイナマイトで発破を行うか、ベンチカット方式で掘削されたとみられる（掘削の際には削岩機も使用）。

内部には壕口側面部・奥部には坑木跡が集中して残っているほか、壁面に掘削痕が多く確認されている。

（調査の際はレーザー距離計を使用しました。入坑の際には竹原市へご相談してください。）



写真 36：②壕の壁面部の拡大図（2023年8月27日筆者撮影）

赤丸で囲まれている部分が削岩機による掘削痕。おそらく②壕は幅を拡張する予定だったのだろう。



写真 37：⑧壕奥部に残る掘削痕らしきもの（2023年8月27日筆者撮影）

赤丸部分。なお実際に削岩機の痕跡なのかは不明。⑧壕で確認された掘削痕らしきものはこの穴だけである。

第五章 櫛ヶ浜陸軍船舶部隊と人々の記憶

●人々の記録に残る櫛ヶ浜基地

当時の櫛ヶ浜基地には召集・転属により各地からやって来た一般兵のほかに、特攻要員にもなることもあった特別幹部候補生も来ていた。彼らは香川県小豆島に位置する特別幹部候補生隊にて訓練を終えた後、この基地へと転属してきた。筆者の調査内では、海上駆逐隊補充隊で教育を受けた者はその後、特攻・気象観測・輸送の分野へ進み、機動輸送補充隊で教育を受けた者たちは特攻・潜水艦乗組員・輸送の分野へ進んでいたことが確認された。ただし、この地で行われた訓練は行軍などの陸軍兵士としての基礎訓練や船舶・自衛火器についての基礎知識に関するものだけであり、特攻訓練を実施した記録はない。

本文中に出典や論拠として使用した特別幹部候補生らの回顧録『紅の地は燃えて』・『若潮三期の絆』や、『続・紅の地は燃えて』（「特幹二期生の記録」編纂委員会 2004）では、櫛ヶ浜基地の海上駆逐隊補充隊・機動輸送隊補充隊に配属された彼らの体験談を読むことができ、これらの訓練の記録も残っている。そのほかにも、営内での生活の細かな描写のほか、空襲経験・壕を掘削したという記録も残っているので、兵士たちの日常から転属してからどのような道筋を歩んできたのかを窺える。ここでまとめるには、あまりにも膨大であるため、興味のある方はこの3冊を実際に読んでいただいた方が良いでしょう。

以上のことから、特別幹部候補生の記録が十分にあることはもう言うまでもない。しかしながらも一般兵からの証言は少なく、彼らの体験記などはほとんど出版されていない。そこで本項では海上駆逐隊補充隊と機動輸送隊補充隊の証言をほんのわずかであるが、要約した上で紹介させていただこうと思う。

・海上駆逐隊補充隊

「鈴木惣太郎氏」 原隊 歩兵第三十四連隊 1944年より教育要員として転属

当初、鈴木氏が転属した際（1944年5月）の櫛ヶ浜基地には、満州から来ていた兵隊や召集兵などがいた。同氏は沖縄要員（海上輸送第十五大隊の基礎訓練を担ったと推定）を育成したこともあった。

また、1944年10月ころまでは博多港にて釜山へ糧秣や弾薬などの物資を運ぶための船を徴用する任務に就いた（おそらく海上輸送大隊に転属になったとみられる）。潜水艦の攻撃や空襲を回避するため、船は夕方に出て、明け方に釜山に到着するようにしていた。輸送に使用する船も同じ理由で小型のものを選んだ。また、彼は広島にて二連装の機関銃（高射機関砲）の訓練を受けた経験もある。

鈴木氏が広島から訓練を受けたのち、再び海上駆逐隊補充隊の教育を担当するため櫛ヶ浜基地へ帰ってきた際（1944年11月末）、「中隊（教育を担当する部隊のことか？）は空っぽ」で、留守番をしていた准尉から「部隊は外地に派遣されるためほとんど出て行った」と伝えられた。

それから1945年5月まで鈴木氏は櫛ヶ浜基地で訓練の指導を行った。対象となる兵士は、初年兵から根こそぎ動員された35～40歳の未教育補充兵とまばらだったと記されている。彼らは「対上陸作戦の要員」とのことであり、本土決戦に向けた訓練をしていた。訓練内容は壕に入り、竹竿の先につけた地雷を戦車のキャタピラに突っ込む・爆雷を戦車に取り付けるという訓練だったが、銃（本文中では「九九式歩兵銃」と明示）が全員に行き渡らない・銃剣の鞘が竹であるなどさまざまな問題を抱えていた。なお、結局この部隊は解散になったとのことである（部隊詳細は不明）。

その後、鈴木氏は再び海上輸送大隊へ転属になったとみられ、終戦を迎えた。

※『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編） 第8巻』の『常德作戦の苦しみと玉砕した戦友を想う』（平和祈念展示資料館）より要約・再構成

・機動輸送隊補充隊

「中川与一郎氏」 原隊 歩兵中部三十七連隊 1943年ごろに一般兵として入営

櫛ヶ浜での船上勤務訓練の後、1100トンくらいの1隻の輸送船（SB艇と推定）に搭乗（機動輸送中隊に配属になったとみられる）。乗組員は150名ほどで、中川氏は砲関係の担当についた。しばらくは瀬戸内海で航行訓練を実施していた。1944年、ついに台湾へ物資輸送のために向かう。その後、中国沿岸部まで武装の乏しい小型船を護衛したりするなど、さまざまな任務を遂行したという。ところが、台湾に戻った1945年2月18日、B-24（米軍が運用した爆撃機）による攻撃を受け、死傷者が20名程度発生。同氏も手・肩・足を負傷、その後本土の病院へ入院した。

※『語り継ぐ戦争の体験—平和への祈りをこめて—』（京田辺市平和都市推進協議会1992）の『私の戦争体験』より要約・再構成

●市民と櫛ヶ浜陸軍船舶部隊の記憶

また、この度の調査では幸運にも、兵士と関わった当時の市民の貴重な証言を得ることができた。

その市民とは、先ほどから幾度も登場している秋本元之氏である。筆者が昔からお世話になった恩師である同氏は、今日では光海軍工廠・光嵐部隊（突撃隊）の研究における第一人者でいらっしゃるが、少年時代には櫛ヶ浜船舶部隊とともに太平洋戦争を生き抜いた生き証人でもある。

秋本氏は少年時代を櫛ヶ浜基地の付近である荒神（下松市）で過ごし、その間にさまざまな経験を体験されてこられた。彼は聞き取り調査に快く承諾してくださり、そのおかげでいろいろなお話を伺うことができた。そこで今回はわずかだが、その一部を紹介させていただこう。

・「休みの日、兵士の方が家に訪ねてきて、畳で寝転んでいた。」（兵舎は畳がなかったため、故郷の畳の匂いが恋しくなったのではないかと秋本氏は後に回想する。）

・「陸軍記念日（3月10日）には基地が兵士の家族をはじめとする一般人に解放された。酒保の周辺には仮設のステージが設置され、演芸会のようなものが実施された。仮装（参考G・H・I）をしていた兵士がおり、舞台劇が行われていた。とても楽しかった。」

・「快晴の日に、巡視艇のようなもの（装甲艇と推測）に乗せてもらい、笠戸湾を一周した。真っ白な波しぶきが上がり、海から日立の工場（下松市）などを見て回ったことを今でも覚えている。」（その際、装甲艇は笠戸湾に面している基地中央の棧橋に係留されていたとのことである。）

・「月夜の晩には、自宅にも基地からのラッパの音が聞こえてきた。」

・「自宅付近には特攻で戦死した方（丹心飛行隊の石村氏、レイテ島スリガオ海峡にて戦死。「関門日報」1944年12月12日にも記載があるとのこと）の墓標があった。櫛ヶ浜船舶部隊の将兵が墓標の前で必ず止まって、敬礼をしているのを見た。乗馬していた将校の方が下馬して敬礼する場面も見た。」

・「戦後、櫛ヶ浜船舶部隊の方からお礼の手紙が来た。」

・「下松にあった日立工場への空襲の際に、目標から逸れた爆弾が櫛ヶ浜基地の北側にあった水田に落下した。自宅にもその破片が飛んできた。」（秋本氏はその時走行していた列車の明かりをめぐらして落とした結果ではないかと術懐していた。）

・「堀川運河にかけられていた橋はその当時、可動橋であった。潮が満ちた際はベルが鳴ると同時に橋が開き、運河を陸軍の船（本人は上陸用舟艇と記憶）が通っていた。」（この橋は現在、可動はしていないものの、今日も残っているそうである。）

このほかにも、秋本少年が風邪をひいて寝込んでいた際に兵士の方がお見舞いに来てくれたなどの貴重かつ重要なお話を聞かせていただき、当時、現地の人々と兵士の間には盛んな交流があったことが窺えた。

おそらく今回証言をしてくださった秋本氏以外にも、当時のことを覚えている方々はまだまだ多くいらっしゃるに違いない。

筆者は櫛ヶ浜船舶部隊に関する研究の中で今後していくべきことの1つに、このような人々の貴重な証言をまとめ、後世に残していくことを挙げたい。研究・調査には数多の課題があるが、戦争を体験されている方が減少している現在、当事者・関係者への聞き取り調査は最優先で行う必要がある。



写真 G (左)・H (中央)・I (右)：仮装をする兵士たち（撮影年月・場所不明）

写真の兵士は歩兵第四二連隊（山口市）の所属であり、櫛ヶ浜の船舶部隊とは無関係。おそらく、櫛ヶ浜基地でもこのような様子の者が見られたのだろう。

画像は筆者の先祖の遺品であるアルバム（『歩兵第四十二連隊記念写真帖』）より引用。

余談であるが、遺品のアルバムには虹ヶ浜（光市）で訓練がされている風景なども残っており、現行の本などからは知ることのできない歴史を垣間見ることができる。皆さまも是非一度、所有されている昔のアルバムをご覧になってみてはいかがだろうか。もしかすると、懐古だけに留まらず、新たな発見につながるかもしれない。

終章 さいごに

本研究では、いままでスポットが当たっていなかった山口県周南市櫛浜地区に駐屯していた陸軍船舶部隊「海上駆逐隊補充隊」・「機動輸送隊補充隊」についてまとめさせていただいた。まずは拙い文章をここまで読んでくださった読者の方々に感謝の言葉を述べさせていただきます。

ここまででの調査で、櫛浜地区と笠戸島に駐屯していた船舶部隊についての基礎的な情報は明らかになった。しかし、まだまだ櫛ヶ浜基地について調査が必要であるというのは自明のことだ。詳細な部分を見ていくと不明な点が多く、様々な問題や検討の必要性は無数に存在していることが浮き彫りになったのは、読者の方も実感されたことであろう。

現在、近現代史・戦跡考古学という学問は年々注目が高まっている学問分野のひとつである。とはいえ、筆者個人としては本書の執筆に伴う調査を通じて、掩体壕（飛行機を敵の攻撃から守る施設）などの戦争遺構の情報は集成・分類などが進む半面（住吉 2024 などに代表）、まだ集成・分類されていない戦争遺構がたくさんあるという実態をまざまざと見せつけられた。

従来、史料に残されていない戦争遺構の情報を明らかにするためには、証言が主たる手がかりであった。だが、第二次世界大戦終結から 80 年経った今日、その手法は次第に困難になっている。

これからの社会が、先人が文字通り命を危険に晒して生きていた痕跡を「ワケの分からないもの」として忘却してしまうという事態を防ぐために、遺構のデータをより一層集積し、体系的に分析するなど、文献学・考古学的方法からも遺構の情報を明らかにする手法を確立する必要があるのではないかと調査中に考えさせられた。

そのためにも、官民間問わず、積極的に戦争遺跡への調査が推進されることを願っている。そして、どんな遺構でも形状や特徴からどのように利用されていたのかを推定できるようになれば、太平洋戦争の研究と人々の理解はますますの発展をみせるのではないかと期待している。特に櫛ヶ浜基地に関しては、関係史料や遺構が豊富に残されており、未確認の史料・遺構も多数存在すると考えられる。調査の余地は極めて大きい。継続的な調査と検証を行えば、郷土史や戦跡考古学など多くの分野での発見が得られるに違いないだろう。

また、今回紹介した一部遺構は経年劣化により崩壊する可能性があるため、しっかりと調査して記録に残す・必要に応じて保存活動を行う必要があることもこの場で述べさせていただきます。

さて、この本を読んでくださった方のなかには、内容に疑問点や不満点をお持ちになった方々もいらっしゃるだろう。先ほど書いた通り、本書では現時点（2025 年）までに確認した情報しか掲載できておらず、まだ不明な点が多々存在する上、筆者が大間違いのことを恥ずかしげもなく、堂々と書きつらねている可能性も十分にある。学識が豊富な方や本格的に研究を行っている有識者の方にとっては、基本的な情報ばかり書かれていて、非常につまらない内容と捉えられたかもしれない。

そう思ったみなさまにはこれを機に、ぜひとも櫛ヶ浜陸軍船舶部隊についての私の誤った理解や未解明の部分へ、「真実」という名のメスを斬り込んでいただければ幸いである。

最後に改めましてもう一度。ここまで読んでくださった読者の皆さま、誠にありがとうございました。この書が皆さまの知識の蓄積や、太平洋戦争に対する興味関心の涵養の機会となれば、筆者にとっては何よりもうれしいことです。

取って付けたような締めくくりとはなりますが、これから山口県内の太平洋戦争期の研究のより一層の邁進と、櫛ヶ浜基地から任務へ赴かれ、戦死された方をはじめとする太平洋戦争にてお亡くなりになった全ての方々のご冥福をお祈りして、本書を終わりとさせていただきます。

参考文献等・ご協力していただいた方の紹介

●画像引用

国立国会図書館デジタルコレクション

・『Weekly Intelligence bulletins, Vol. I, Nos. 1 to 52, 14 July 1944 to 9 July 1945. Report No. 11-c(3), USSBS Index Section 6 (文書名:Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 46, Security-Classified Intelligence Library. 1932-1947. 65 ft = 米国戦略爆撃調査団文書 ; 各種日本関係情報) (課係名等:Intelligence Branch ; Library and Target Data Division) (シリーズ名:Intelligence,joint: Joint Intelligence weekly bulletins)』

(週刊情報速報集 第1巻 (第1号~第52号) 1944年7月14日~1945年7月9日、報告番号: No.11)

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009859/1/167>) [最終閲覧日 2025年5月10日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/460>) [最終閲覧日 2025年5月10日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/149>) [最終閲覧日 2025年7月1日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/152>) [最終閲覧日 2025年7月1日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/161>) [最終閲覧日 2025年7月1日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/170>) [最終閲覧日 2025年7月1日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009858/1/168>) [最終閲覧日 2025年7月1日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009857/1/250>) [最終閲覧日 2025年6月25日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009857/1/272>) [最終閲覧日 2025年6月25日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009859/1/330>) [最終閲覧日 2025年6月24日]

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/4009859/1/94>) [最終閲覧日 2025年6月24日]

オーストラリア戦争記念館 (Australian War Memorial)

・1945 『RABAUL, NEW BRITAIN. 1945-10-04. JAPANESE BARGE TUNNELS IN THE SIDE OF CLIFFS ON THE SHORE OF BLANCHE BAY.』

(ラバウル、ニューブリテン島。1945年10月4日。ブランシュ湾岸の崖面に設けられた日本軍の艇用トンネル)

(<https://www.awm.gov.au/collection/097769>) [最終閲覧日 2025年5月10日]

・1945 『JAPANESE BARGES AND TUNNELS ON THE FORESHORE OF KARAVIA BAY. THE TUNNELS, WERE DUG BY THE JAPANESE AS A PROTECTION AGAINST ALLIED AIR ATTACK.』

(カラビア湾の海岸沿いにある日本軍の舟艇とトンネル。これらのトンネルは、連合軍の空襲からの防護のために日本軍によって掘られたものである。)

(<https://www.awm.gov.au/collection/C76463>) [最終閲覧日 2025年7月9日]

アイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館 デジタルライブラリ (Ike Skelton Combined Arms Research Library Digital Library)

・『ONI 208-J, supplement no. 2: Far-Eastern small craft.』

(<https://cgsc.contentdm.oclc.org/digital/collection/p4013coll8/id/4690/rec/1>)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 1 日〕

(ONI 208-J 補足第 2 号：極東地域の小型船舶)

※史料閲覧にあたってはサンフランシスコ海洋国立公園協会 (San Francisco Maritime National Park Association) のサイトも使用。以下に示すのはサンフランシスコ海洋国立公園協会の URL。

(<https://maritime.org/doc/id/oni208j-far-eastern-small-craft/pg023.php>)〔最終閲覧日 2025 年 6 月 26 日〕

(<https://maritime.org/doc/id/oni208j-far-eastern-small-craft/pg022.php>)〔最終閲覧日 2025 年 6 月 26 日〕

(<https://maritime.org/doc/id/oni208j-far-eastern-small-craft/pg025.php>)〔最終閲覧日 2025 年 6 月 26 日〕

(<https://maritime.org/doc/id/oni208j-far-eastern-small-craft/pg090.php>)〔最終閲覧日 2025 年 6 月 26 日〕

(<https://maritime.org/doc/id/oni208j-far-eastern-small-craft/pg031.php>)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 1 日〕

防衛研究所

・『機械課 9 9 式機舟取扱法の件』JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C01005215400、陸普綴記室 昭和 1 6 年 (防衛省防衛研究所)

(<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2006083122580821313&ID=M2006083122572321157&REFCODE=C01005215400>)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 18 日〕

・『1 0 小輸送艇 2 型研究中間報告』JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C14010851700、研究報告綴 昭和 1 9 年度 (防衛省防衛研究所)

(<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2014020316161735695&ID=M2014020316161735707&REFCODE=C14010851700>)

大竹市教育委員会

・大竹海兵団写真データ

工藤洋三氏所有写真

・1945 年 7 月 5 日米軍偵察写真

麻生敏治氏所有写真

・陸軍船舶特別幹部候補生写真

その他

・陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989 『紅の血は燃えて 船舶特幹二期生の記録』 陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会

・「目で見える徳山・下松・光・新南陽の一〇〇年」刊行会 1998 『目で見える徳山・下松・光・新南陽の 100 年』 郷土出版社

- ・土本誠治 2024 『行李は語る』
- ・岡村真翔 2021 「笠戸島小深浦・深浦地区の戦争遺構（地下特殊壕）についての考察」 2021 年度山口大学ジュニアリサーチセッション（中高生研究発表会）
- ・Google マップサービス〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・国土地理院サービス

空中写真 『整理番号 USA コース番号 M122 写真番号 33 撮影年月日 1947/03/11（昭 22） 撮影地域徳山 撮影高度(m)4724 撮影縮尺（アナログ） 数値写真レベル（デジタル）30858 地上画素寸法(cm)

カメラ名称 K-17B 焦点距離(mm) 153.100 カラー種別モノクロ 写真種別アナログ 撮影計画機関米軍 市区町村名下松市 備考 ワンストップサービスの可否○』

(https://service.gsi.go.jp/map-photos/app/map?search=photo&limit=200&search_date_from=1940&search_date_to=1948&color_type_ids=1%2C2&scale_from=0&scale_to=99999999&intersect_lat=34.011435100045475&intersect_lon=131.83476752446057#13/34.017960038/131.859718519)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 1 日〕

- ・その他は筆者所有写真（『歩兵第四十二連隊記念写真帖』に加え、筆者が撮影したもの）

●主要参考史料

アイク・スケルトン統合戦闘兵科研究図書館 デジタルライブラリ（Ike Skelton Combined Arms Research Library Digital Library）

- ・『Japanese recruiting and replacement system, July 1945.』

（日本の募兵および補充制度 1945 年 7 月）

(<https://cgsc.contentdm.oclc.org/digital/collection/p4013coll8/id/2370/rec/94>)〔最終閲覧日 2025 年 6 月 26 日〕

山口県文書館

- ・『船舶特定部隊 行動概見表 留守業務局調製』（県庁戦後 B1940 年代 96）
- ・『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第 1 号』（県庁戦後 A 総務部 1509）
- ・『旧軍用土地建物 一時使用申請及認可綴 第 2 号』（県庁戦後 A 総務部 1507）
- ・『土地建物関係綴③』（県庁戦後 A 商工部 131）
- ・『特殊物件外船舶調査綴』（県庁戦後 A 総務部 1486）
- ・『旧陸海軍雑用船名簿』（県庁戦後 A 総務部 1487）
- ・『旧陸海軍舟艇引継所綴（正式返還以前）』（県庁戦後 A 総務部 1492）
- ・『船舶関係雑件綴』（県庁戦後 A 総務部 1489）
- ・『船舶仮保管一件』（県庁戦後 A 総務部 1488）
- ・『部隊一覧表』（県庁戦後 B1940 年代 72）
- ・『軍需品払下関係綴』（県庁戦後 A 商工部 368）
- ・『主要品目報告一件』（県庁戦後 A 商工部 137）
- ・『国有財産移管綴』（県庁戦後 A 商工部 128）

- ・『完結原議綴 器具ノ部』(県庁戦後 A 商工部 28)
- ・『完結原議綴 器具類』(県庁戦後 A 商工部 31)
- ・『完結原議綴 軽機械ノ部』(県庁戦後 A 商工部 30)
- ・『完結原議綴 発電機・変圧器・充電器』(県庁戦後 A 商工部 22)
- ・『完結原議綴 電気器具』(県庁戦後 A 商工部 24)
- ・『完結原議綴 器具 1』(県庁戦後 A 商工部 64)
- ・『完結原議綴 器具』(県庁戦後 A 商工部 65)
- ・『完結原議綴 雑品』(県庁戦後 A 商工部 70)
- ・『保管転換綴』(県庁戦後 A 商工部 124)
- ・『国有財産引継一件』(県庁戦後 A 商工部 129)
- ・『兵器処理関係綴 1』(県庁戦後 A 商工部 118)
- ・『兵器処理関係綴 2』(県庁戦後 A 商工部 120)
- ・『特殊物件払下雑件綴 雑ノ 3』(県庁戦後 A 商工部 114)
- ・『船舶関係綴』(県庁戦後 A 商工部 142)
- ・『旧軍船舶関係綴』(県庁戦後 A 商工部 247)
- ・『海没物件引揚一件』(県庁戦後 A 商工部 201)
- ・『特殊物件原議台帳』(県庁戦後 A 総務部 1468)
- ・『参議院特殊物件視察調書』(県庁戦後 A 商工部 117)
- ・『放出物資完結原議綴 5ノ 3』(県庁戦後 A 商工部 74)

防衛研究所

- ・防衛研究所戦史部 1969 戦史叢書『豪北方面陸軍作戦』朝雲出版社
(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=023)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 17 日〕
- ・防衛研究所戦史部 1975 戦史叢書『大本営陸軍部< 9 >昭和 20 年 1 月まで』朝雲出版社
(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=081#)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 17 日〕
- ・『昭 1 6 ~ 2 0 在外海軍官衙部隊一覧表』(うち、『特設回航班~海龍隊』)
(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/DetailKen?id=1000544556)〔最終閲覧日 2025 年 7 月 17 日〕
- ・『海軍施設本部関係小冊子綴 昭和 1 9 . 1 0 . 5』(うち、「昭和 1 9 年 8 月 1 0 日 魚雷射堡甲標的揚卸施設並に震洋基地構築要領 海軍施設本部 昭和 2 0 年 2 月 1 0 日調製」 「第 4 章 滑台」)・
『附図第 5 震洋艇装備要領図』
(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/DetailMok?action=fromkenmei&id=0030034008)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・『小舟艇用掩體構築法 昭和 1 9 年 1 0 月 2 0 日』
(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/DetailMok?id=0080081510)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕

アジア歴史資料センター

・『教育船舶兵団』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12121090900、陸軍部隊編合資料 昭和20年8月15日現在（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2012122711451812583&ID=M2012122711452012609&REFCODE=C12121090900>〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

・『船舶司令部編成人員表』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12121044700、船舶司令部編制人員表（防衛省防衛研究所）

https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122711445212147〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

・『元船舶部隊一覧』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14020307700、元船舶部隊一覧表 昭和23.3（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2014030613213541477&ID=M2014030613213541478&REFCODE=C14020307800>〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

・『第217号 昭和18年12月5日 陸軍異動通報』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12120897000、陸軍異動通報綴 自第203号 至236号 昭18年11月16日～18年12月28日（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2012122711390610658&ID=M2012122711390710670&REFCODE=C12120897000>

・『陸軍船舶部隊略歴 その4』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122415900、陸軍船舶部隊略歴 その4（防衛省防衛研究所）

https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122713101125859&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115175001206%2BF2006090108080091439&IS_ORG_ID=F2012122713101125859&IS_SORT_FLD=sort.seq%2Csort.refc&IS_SORT_KND=asc&DIS_SORT_FLD=sort.seq〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

・『陸軍船舶部隊の参考』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14020208000、陸軍船舶部隊の参考（防衛省防衛研究所）

https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2014030613204140480&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115153401201%2BF2006090108075491365%2BF2014030613204140480&IS_ORG_ID=F2014030613204140480&IS_SORT_FLD=sort.seq%2Csort.refc&IS_SORT_KND=acs&DIS_SORT_FLD=sort.seq〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

・『第3章 船舶部隊の運用／第4節 船舶部隊の特性に基く運用』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14020201400、船舶戦史（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2014030613203640397&ID=M2014030613203740414&REFCODE=C14020201400>〔最終閲覧日 2025年6月3日〕

- ・『暁部隊』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C15120130600、内地官衛部隊名簿 1 / 4 昭和20（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2015120913344577098&REFCODE=C15120130600>
- ・『架橋器材 9 7 式駄載折畳舟外 1 点制式制定の件』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01004537500、密大日記 第 1 4 冊 昭和 1 3 年（防衛省防衛研究所）
https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=reference&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KEY_S1=C01004537500&IS_TAG_S1=fi.rfc%2Citm.rfc&IS_MAP_S1=&IS_LGC_S1=&IS_KIND=detail&IS_START=1&IS_NUMBER=1&IS_TAG_S18=eaid&IS_KEY_S18=M2006083120265195913&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006083118133052046%2BF2010100610521334201%2BF2010100611274734242%2BF2006083120261395789&IS_ORG_ID=M2006083120265195913〔最終閲覧日 2025 年 5 月 20 日〕
- ・『兵務課 渡河作業教範総則及第 1 部第 2 部の件（1）』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08070709400、昭和 1 6 年 陸達綴 記室（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2008081910262872963&REFCODE=C08070709400>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『2 9. 海運器材資材整備予算』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122035100、整備計画に関する綴 昭和 2 0 年（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2012122711584322030&REFCODE=C12122035100>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『常德殲滅作戦に於ける教訓 昭和 1 9 年 1 月 2 5 日 第 3 9 師団』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11112132500、第 3 9 師団常德殲滅作戦に於ける教訓 昭和 1 9 年 1 月 2 1 日～1 9 年 1 月 2 5 日（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M201112915561013524&REFCODE=C11112132500>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『第 3 揚陸隊命令 1 0 月』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C21110071500、第 3 揚陸隊作命綴 昭 1 8. 1 1. 1～1 8. 1 2. 2 9（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2022010611363646371&REFCODE=C21110071500>〔最終閲覧日 2025 年 7 月 18 日〕
- ・『第 1 L i n g a y e n 湾上陸作戦』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14020207500、陸軍上陸作戦戦例 1 9 4 1. 1 2～1 9 4 2. 1 0（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2014030613204140475&REFCODE=C14020207500>〔最終閲覧日 2025 年 7 月 18 日〕
- ・『兵政造密第 1 3 6 7 号 昭和 2 0 年 4 月 2 日 中輸送艇の製造命令訂正相成度件通牒 他』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14011001700、発来翰綴 昭和 2 0. 4～2 0. 7（防衛省防衛研究所）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2014020316173637204&REFCODE=C14011001700>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『1 6 3. 大作第 4 5 2 号 中輸送艇整備ニ関スル件通牒 昭和 2 0 年 2 月 1 9 日』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14010955600、発来翰綴 昭和 2 0. 1～3（防衛省防衛研究所）

- <https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2014020316171136746&REFCODE=C14010955600>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『162. 大作秘第477号 中輸送艇整備ニ関スル件依頼 昭和20年2月16日』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14010955500、発来翰綴 昭和20. 1～3（防衛省防衛研究所）
- <https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2014020316171136745&REFCODE=C14010955500>〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『9. 兵政造密第56号 中輸送艇（150噸型機帆船）整備ニ関スル件 昭和20年1月9日』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C14010940800、発来翰綴 昭和20. 1～3（防衛省防衛研究所）
- https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&REFCODE=C14010940800&ID=F2014020316170336587&ID=&NO=11&TYPE=PDF&DL_TYPE=pdf〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『陸軍船舶部隊略歴 その1』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122416600、陸軍船舶部隊略歴 その1（防衛省防衛研究所）
- [https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122713101225866&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115175001206%2BF2006090108080091439%2BF2012122713101225866&IS_ORG_ID=F2012122713101225866&IS_SORT_FLD=&IS_SORT_KND=&DIS_SORT_FLD=\)](https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122713101225866&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115175001206%2BF2006090108080091439%2BF2012122713101225866&IS_ORG_ID=F2012122713101225866&IS_SORT_FLD=&IS_SORT_KND=&DIS_SORT_FLD=))〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『陸軍船舶部隊略歴 その2』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122415200、陸軍船舶部隊略歴 その2（防衛省防衛研究所）
- https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122713101125852&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115175001206%2BF2006090108080091439&IS_ORG_ID=F2012122713101125852&IS_SORT_FLD=sort.seq%2Csort.refc&IS_SORT_KND=asc&DIS_SORT_FLD=sort.seq〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『陸軍船舶部隊略歴 その3』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122417400、陸軍船舶部隊略歴 その3（防衛省防衛研究所）
- https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=default&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=summary_normal&IS_START=1&IS_NUMBER=20&IS_TAG_S51=iFi&IS_KEY_S51=F2012122713101225874&IS_EXTSCH=F2006083118101851446%2BF2006090108075391350%2BF2007112018333701102%2BF2007112115175001206%2BF2006090108080091439&IS_ORG_ID=F2012122713101225874&IS_SORT_FLD=sort.seq%2Csort.refc&IS_SORT_KND=asc&DIS_SORT_FLD=sort.seq〔最終閲覧日 2025 年 6 月 3 日〕
- ・『山口県引渡目録 1/2 第2復員局（①-引渡目録-187）』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08011150600、山口県 引渡目録 1/2（防衛省防衛研究所）
- https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&REFCODE=C08011150600&ID=F2008021311281282515&ID=&NO=1&TYPE=PDF&DL_TYPE=pdf〔最終閲覧日 2025 年 5 月

13日]

・『第2節第5項 本土決戦の水上水中特攻戦力の編制並に配備』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C16120668800、昭和26年8月～27年3月 海軍の軍備並びに戦備の全貌 其の5.6（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/C16120668800>〔最終閲覧日2025年5月13日〕

・『舟艇引渡目録 第102震洋隊』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C08010616500、高雄警備府 引渡目録 13/15（防衛省防衛研究所）

<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/C08010616500>〔最終閲覧日2025年5月13日〕

●参考文献・資料

・櫛浜地区コミュニティ推進協議会 1990 案内板『龍神社』
・櫛浜コミュニティ推進協議会広報部 2006 『コミュニティくしがはま』
(<https://shunan-chiikijoho.jp/community/kakuchiku/kushigahama/koho/kushigahama295.pdf>)〔最終閲覧日2025年8月4日〕

・松原茂雄 遠藤昭 1996 『陸軍船舶戦争』 星雲社
・岡上義治 1978 『陸軍船舶特別幹部候補生隊』 特幹若潮四期生会事務局
・二宮充史 2016 「日本軍の渡洋上陸作戦 -水陸両用戦争の視点からの再評価-」 海幹校戦略研究
(https://www.mod.go.jp/msdf/navcol/assets/pdf/ssg2016_07_04.pdf)〔最終閲覧日2025年6月3日〕

・陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会「特幹二期生の記録」編纂委員会 1989 『紅の血は燃えて 船舶特幹二期生の記録』 陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会

・朝鮮人強制連行真相調査団 2001 『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』 柏書房
・船舶特幹二期生会 1991 『陸軍船舶特別幹部候補生隊 第二期生会会員名簿』 船舶特幹二期生会
・「船舶特幹第三期生の記録」編集委員会 1995 『若潮三期の絆 船舶特幹第三期生の記録』 陸軍船舶特別幹部候補生第三期生会

・陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会「特幹二期生の記録」編纂委員会 2004 『続・紅の血は燃えて 船舶特幹二期生の記録』 陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会

・土本誠治 2025 『戦争遺跡 笠戸島の海岸洞窟の研究 【テーマ・笠戸島の洞窟の成り立ち】』

・毎日新聞社 1996 『不許可写真集』 毎日新聞社

・奥本剛 2016 『日本陸軍の船艇』 大日本絵画

・大内健二 2016 『輸送艦 給糧艦 測量艦 標的艦 他』 潮書房光人社

・NHK アーカイブス 2016 『BS1スペシャル 原爆救護～被爆した兵士の歳月～』

(https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001130363_00000)〔最終閲覧日2025年5月10日〕

・徳山市史編纂委員会 1985 『徳山市史 下巻』 徳山市

・全国モーターボート競走施行者協議会 1970 『競艇沿革史』 全国モーターボート競走施行者協議会
(<https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2006/00005/contents/0115.htm>)〔最終閲覧日2025年9月6日〕

- ・ハカルプラス株式会社 会社沿革
(<https://hakaru.jp/company/history>)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・日立市郷土博物館 2006 「日立市の戦災」『日立市の歴史点描』
(<http://saki-archives.com/modern/hc-sensai.html>)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・土本誠治 2024 『行李は語る』
- ・『深浦小学校百十年誌』（下松市図書館所蔵、出版社・出版年確認できず）
- ・笠戸本浦自治会 2000 案内板『笠戸島 夕日岬』
- ・下松地方史研究会 2006 『下松地方史研究 第43号』 下松地方史研究会
- ・木俣滋郎 1998 『日本特攻艇戦史: 震洋・四式肉薄攻撃艇の開発と戦歴』潮書房光人新社
- ・儀同保 2003 『陸軍水上特攻隊ルソン戦記 知られざる千百四十名の最期』 光人社 NF 文庫
- ・NHK アーカイブス 2009 『証言記録 兵士たちの戦争“ベニヤボート”の特攻兵器 ～震洋特別攻撃隊～』
(https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100579_00000&chapter=001)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 11 日〕
- ・環境省沖縄奄美自然環境事務所 2020 『座間味村 慶留間島：マルレ秘匿壕跡』
(<https://www.mlit.go.jp/tagengo-db/R2-00917.html>)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・西伊豆町田子地域振興協議会 2001 案内板『洞窟の由来』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（V） 一宮古諸島編一』
- ・前薮廣幸 2024 『北九州の戦争遺跡』 富士印刷商会
- ・岡村千秋 2020 『船舶工兵隊戦記』 光人社 NF 文庫
- ・小笠原村教育委員会 2002 『小笠原村戦跡調査報告書一式』
- ・平和祈念展示資料館 鈴木惣太郎（時期不明）『常德作戦の苦しみと玉砕した戦友を想う』 『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編） 第8巻』（出版年確認できず）
(https://www.heiwakinen.go.jp/wp-content/uploads/archive/library/roukunote/onketsu/08/O_08_349_1.pdf)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- 権田梅芳『船舶部隊の戦陣回想』 『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編） 第8巻』
(https://www.heiwakinen.go.jp/wp-content/uploads/archive/library/roukunote/onketsu/11/O_11_132_1.pdf)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 11 日〕
- ・京田辺市平和都市推進協議会 中川与一郎 1992 『語り継ぐ戦争の体験—平和への祈りをこめて—』
(https://www.city.kyotanabe.lg.jp/cmsfiles/contents/0000012/12173/3_2018031409435816.pdf)〔最終閲覧日 2025 年 5 月 10 日〕
- ・住吉太郎 2024 「千島（クリル列島）における近代考古学の試み -現存する有・無蓋掩体壕の集成・分析と千島掩体群の位置付け-」第 11 回空襲戦跡九州ネットワーク菊池集会報告

※本書に掲載されている画像につきましては、可能な限り各機関・関係者に確認を取り、ご了承をいただいた上で使用しております。

ただし、以下の文献より引用した画像につきましては、関係団体の解散や出版社の倒産等により、現在（2025年7月時点）著作権者との連絡がつかない状況が続いております。

・『紅の血は燃えて 船舶特幹二期生の記録』 陸軍船舶特別幹部候補生隊第二期生会

・『目で見ると徳山・下松・光・新南陽の100年』 郷土出版社

これらの史料は、地域や戦中・戦後の歩みを知るうえで極めて重要な歴史的記録です。櫛ヶ浜船舶部隊への理解促進のため、これらの貴重な画像をどうしても掲載したいという強い思いで、本文中での利用をさせていただきました。

著作権その他に関して問題がございましたら、大変お手数ではございますが、ご一報くださいますようお願い申し上げます。ご指摘をいただいた場合には、速やかに書籍の回収・内容の訂正・削除などの対応を行うとともに、必要があれば法的措置にも応じさせていただきます。

何卒ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

●調査にご協力していただいた方々

調査・執筆の際に協力していただいた皆様、この度は本書執筆のために多大なるお力添えをしていただき、誠にありがとうございました。

2021年より調査をはじめ、そして今日。なんとか櫛ヶ浜船舶部隊の研究をこの書にまとめ、世間の皆さまへお見せできるところまで漕ぎつけることができました。

途中で寄り道も多くしたとはいえ、振り返れば、このテーマを5年間も研究し続けたという事実に自分でも驚いているところです。

しかし、この書は私の力によるものではなく、手助けしてくださった多くの人のご協力が積み重なった集大成であると、ここではっきりと述べさせていただきます。本文中では私が偉そうに講釈を垂れたり、鼻につくような文章ばかり書き連ねていますが、櫛ヶ浜船舶部隊の実像は皆さんの協力によって明らかになったのです。

今まで調査に協力してくださった全ての人に深く感謝しております。

直接お礼を言いに行くことが難しい方も多々いらっしゃるため、この場をお借りして皆さまへお礼の言葉を申し上げさせていただきます。

(※大変失礼ながら、編集等の関係で敬称は略させていただきます。どうかご無礼をお許してください。)

・山口県立光高等学校

教職員 太郎良康幸氏

筆者が2021年、高校生だった当時、様々なご指導・調査のお手伝いをしていただきました。先生のおかげで、この研究が始まったと言っても過言ではありません。

また、2021年度山口大学中高生研究発表会の準備において、文章や発表方法などの面でご協力してくださった加藤先生や伊藤先生、小島先生、中村先生をはじめとする同高校の先生方にもこの場で感謝の言葉を申し上げさせていただきます。大変お世話になりました。

・光地方史研究会

秋本元之氏

筆者が2021年、高校生だった時から様々なご指導をしてくださいました。また、櫛ヶ浜基地についての貴重な証言や本書執筆に際してはご指導までしていただきました。先生なくしてはこの本はおろか、今の私は存在しえないと言っても過言ではありません。

初めて先生の講演に参加させていただいた際、発表を聞いて、これが「歴史学か！」と非常に感銘を受けたことを今日でも思い出します。先生の光海軍工廠の研究は「知識の蓄積」という面だけでなく、「歴史との向き合い方」という姿勢の面でも大変勉強になりました。先生のご健康と研究の更なる進展を心よりお祈りしております。

・福岡大学人文学部歴史学科

笠原健氏

私の友人で、2023年に実施した調査にご協力していただきました。

・山口大学教育学部社会科専修

河村元気氏

私の友人で、2023年に実施した調査にご協力していただきました。

・鹿児島大学大学院人文社会科学研究家人間環境文化論専攻考古学

住吉太郎氏

完成した原稿へのアドバイスなどをしていただきました。写真の配置や構成などの改良をすることができ、おかげさまで提示した図表を見やすく表示できました。

・中国新聞社

客員編集委員 佐田尾信作氏

2023年度より櫛ヶ浜基地だけでなく、広島県忠海の遺構についてもさまざまな情報提供をしていただきました。また、土本氏を紹介してくださったのも佐田尾さんのお陰です。ありがとうございます。

・広島エイト倶楽部

土本誠治氏

笠戸島の島民として、笠戸島にて船舶部隊と関わった当事者として、貴重な情報を私にご教授していただきました。また、弟正二さんや廣中氏をはじめとする様々な方と協力しながら、多数の証言などの情報を収集し、まとめてくださった上で、共有していただきました。

他にも、郷土史家の工藤洋三先生から史料を取り寄せていただいたり、図面を作成していただいたり、と櫛ヶ浜の船舶部隊の研究において、非常に重要な作業をしてくださったことに感謝いたします。

・麻生敏治氏

お父様が香川県小豆島にて船舶特別幹部候補生だったということで、さまざまな史料・写真を提供していただきました。ご協力していただき、ありがとうございます。

・笠戸島・櫛ヶ浜・忠海の地元住民や証言をしてくださった皆様

本研究では、ここで紹介するにはあまりにも多すぎるほどの方々に証言や調査の面でお世話になりました。

貴重な当時のお話をしてくださった他にも、快く壕の立ち入り調査を許可していただいたこと・真冬のなか、暖かい室内で当時のことについて詳しく教えてくださったこと・某民泊の方にはコーヒーまで振る舞っていただいたことなど様々な思い出が残ります。皆さまのご厚意と暖かい親切心のおかげで、知識だけでなく荒んだ心まで豊かになることができました。

時より、私の不手際でしっかりしたお礼が言えなかった時があったことがありましたが、それを思い出さず、自分の未熟さをひどく悔やんでおります。

本来ならば直接お礼を申し上げるべきところなのですが、この場をもって皆さまへ感謝の言葉を申し上げます。本当にありがとうございました。

・確認作業を手伝ってくださった皆様

にお忙しい中、わざわざ時間を割いてこの冗長な駄文をご丁寧に確認していただきました。吉元さん、堀家さんや大学の知人などの多くの方のご協力に感謝します。ありがとうございました。

・各関係施設の皆さま

壕への入坑許可申請や掲載許可の一件では、お忙しい中、お手を煩わせてしまい、申し訳ございませんでした。ですが、皆さまが協力してくださったおかげで、本書を満足のいく出来にまで持っていくことができました。この度は誠にありがとうございます。

・筆者家族

まだ現地へ赴くための足も金もない中、調査を進められたのは皆のお陰です。ありがとう。

●著者について



岡村真翔

2004年、山口県生まれ。2021年ごろから櫛ヶ浜における船舶部隊について調べる。2023年、福岡大学人文学部歴史学科に入学。

●注意 引用等に際する著作権に関してのお願い（引用される際は必ずご一読してください）

この本の大部分の内容は使用の際に出典を示していただければ、基本的に自由に利用していただいて構いません（なお、政治利用・思想の主張のための利用は除く）。

ただし、本書内の史料や画像を出版物等、公となる場所で使用される際には、キャプションや本書の末尾に示してある出典元を記載してください（トラブルを避けるため、必要に応じて出典元の団体・施設等からも使用許可を得たのちに引用してください）。

また、以下に示させていただいた一部項は、引用に制限をかけさせていただきます。ご理解ください。

①個人情報を保護するため、本書内で登場する一部個人名や「●調査にご協力していただいた方々」の項に書かれた個人氏名・所属組織などの引用は禁じます（引用のための筆者氏名利用などは除く）。

②「●櫛ヶ浜に残る戦争遺構」の項に掲載したデータは個人の方が所有されている土地を調査させていただき、得たデータです。出版物等の公となる場所でこの項を引用する際には、土地所有者の方から許可を得たのちに使用してください。プライバシー保護や土地権利などの観点から、土地所有者の方とご相談をされていない状態で写真や図等を引用することを禁じます。使用する場合の注意点ですが、遺構のデータは土地所有者の方より立入許可をいただいた上で収集したものです。公的機関が公表した調査記録ではないことを示してください。

また、無許可での立入・撮影はやめてください。住民の方へ多大なご迷惑をおかけしてしまうだけでなく、れっきとした犯罪行為です。さらに重大な事件・事故が発生した場合には遺構への立入が制限される可能性があり、これからの地方史研究に大きな悪影響を及ぼすことが予想されます。

③「●本浦に残る戦争遺構」・「●深浦・小深浦に残る戦争遺構」の2つの項に掲載した遺構のデータは下松市より立入許可をいただいた上で収集したものです。引用はご自由にしていただいても構いませんが、公的機関が公表した調査記録ではないことを示してください。

また、無許可での立入はやめてください。入坑の際には事前に下松市役所の担当部署の方とご相談をしてください。重大な事故が発生した場合、遺構への立入が制限される可能性があり、これからの地方史研究に大きな悪影響を及ぼすことが予想されます。

忘れられた郷土史

榑浜地区の陸軍船舶部隊「陸軍海上駆逐隊補充隊」・「陸軍機動輸送隊補充隊」の基地跡を探る

2025年8月6日刊行（第1版）※仮刷版除く。

（追記 第1版における表紙・背表紙書名『忘れられた郷土史 榑ヶ浜の陸軍船舶部隊「陸軍海上駆逐隊補充隊」・「陸軍機動輸送隊補充隊」の基地跡を探る』は誤りです。現書名『忘れられた郷土史 榑浜地区の陸軍船舶部隊「陸軍海上駆逐隊補充隊」・「陸軍機動輸送隊補充隊」の基地跡を探る』が正しいものです。）

2025年9月13日刊行（第2版）※加筆・修正

著者・発行者 岡村真翔

印刷所 アクセア博多駅前店